

M4-145-2

農

業

農業

第一章 總説

農業は古來朝鮮の國本であつて工業の急速なる發展を見た現在に於ても尙朝鮮産業の樞軸を爲してあり昭和十七年（一九四二年）末に於て總戸数の六割三分は之に従事してゐる。従つて農業の改良發達を圖ることは直に朝鮮の富力を増し多数民衆の福利を増進する所以なので、農業に關しては總督府は從來特に多額の經費を支出して其の振作に力を致して

來た。

施政當時の農業を顧るに李朝末期の秕政苛歛誅求地主の土地兼併等に依り農村は疲弊を極め農民は懶惰安逸を事として勤儉力行の美風に乏しく進んで多年の悲境を脱せんとする氣力と資力を缺き種苗農具耕作法施肥灌漑等に留意する者は稀であつて全く天成地功に放任し自然の豊凶に悲喜するの常態であつて端境期たる春秋二季の頃に至れば食ふに食なき窮民が各所に現出する有様で



あつた。  
茲に於て總督府は施政當初農業振作の目標  
として窮乏せる鮮内の食糧を充實し併せて貧  
弱な農家の經濟を向上せんが爲に、  
の生産を増加すること、  
は出来得る限り自給を圖ること、  
接國に對して輸移出の見込ある產物は、  
生産の改良増殖を圖り一面鮮内の消費を節約  
して輸移出額を増すことに重きを置いたので  
ある。

要するに先づ以て生産物の改良増殖を圖る  
といふことを施政當初の農業振興の大眼目と  
爲したのであつて、此の目的を達成する爲の  
手段に就いては概ね左の事項に基礎が置かれ  
た。  
(一) 氣候土質の適否に鑑み適所に適應作物を  
介布すること  
(二) 在來作物の品種を改良すること  
(三) 有利な新作物を輸移入して栽培の普及を  
圖ること

(四)	肥料の増施を圖ること
(五)	水利灌漑の設備を改善すること
(六)	未墾地の利用を増進すること
(七)	家畜家禽並に其の製品の改良増殖を行ふこと
(八)	養蚕其の他の副業の奨励を行ふこと
然し	今加うる當時農民の智識程度は低く、農法は頗る幼稚であり且つ農家経済も貧弱であつたので、此の實情に鑑み實行に當つては左の四大要綱を根本方針とした。

一	奨励事項の多岐に涉らざること
二	其の實行簡易にして費用の支出は皆無又は少額なること
三	其の <del>効果</del> 果の適確なること
四	實地 <del>に</del> 就き具体的に指導を爲すこと
上述の方針の下に	勸業機關として中央に農事試験場、地方に道農事試験場、道原蚕種製造所等を設け、一面本府並に地方廳に技術員を配置して農民の指導啓發に勉めたるのであるが、叙上の方針は能く當時の事情に適合し過

去三十餘年間に於ける進歩の蹟は定に顯著なものがある。

次に朝鮮農業の現状を略述するに  
朝鮮に於ける昭和十七年（一九四二年）の耕地總面積は畝約百七十六萬町歩、田約二百七十一萬町歩、火田約三十七萬町歩合計四百八十四萬町歩であつて、之を陸地全面積に對する開拓の割合より見ても亦農家一戸當の面積より見ても日本のそれと較べて決して狭小ではない。然し韓國時代の多年に亘る秕政に因り

土地は荒廢し地力は減耗して生産力の僅少なることと日本と比べてくもない情況に在つたので、~~地~~政以來之が回復に非常な努力が拂はれ之に依り生産力は漸次日本の水準に近付きつつある。又農家の戸数は約三百五萬戸であつて決して農業勞力の不足を感ずる程度ではないが、中世以來土地の兼併が行はれ農家の大部分は地主と小作農とに兩断せられて自作農が寡少な爲、小作制度の欠陥と相俟つて、農民は一般に懶惰無爲を事として農業の改良を企圖



せんとする氣力に欠くる所があつた。總督府は施政以來此の點に留意して努めて勤儉力行を奨励し農民の覺醒を促し來つたのであるが、時勢の推移と相俟つて農家の面目も漸次一新されつつある。

作物の分布は食糧作物を主とし衣料其の他の工業原料用作物が之に次いでゐる。食糧作物中最も主要なものは米で次で麥、粟、大豆である。昭和十五年（一九四〇年）に於ける年産額は米二千百五十二萬石、麥類千二百五

十萬石、大豆三百二十六萬石、小豆其の他の豆類九十四萬石、粟四百二十六萬石、諸雜穀二百三十六萬石であつて果實蔬菜も相當の産額がある。特用作物に在つては棉一億八千六百萬斤、麻類五百三十萬貫を主とし楮、莞草等も亦栽培されてゐる。

蚕業は古來多少の素地はあつたが萎微振はなかつたので現時の蚕業は寧ろ施政以後の創始に係るものと謂える。氣候、風土、農閑の餘剰等より考へ養蚕は朝鮮に最も好適してゐる。



る新産業であつて、施政以來年々成績を増し昭和十七年（一九四二年）には蚕繭高千四百七十萬疋に達してゐる。

畜産は日本に比較し産業上重要な地位を占め、古くより養畜思想は普及してゐたが、家畜の品種、其の他飼養管理利用に関する知識が甚だ幼稚であつて、永年自然の儘放任せうれ、特殊に副はない状態を呈してゐたので、施政以來其の改良増殖に努め、昭和十七年（一九四二年）現在牛百七十四萬頭、馬五萬頭（馬は一九

三七年現在）豚百十四萬頭、鶏五百六十九萬羽を算してゐる。豚、鶏は飼料の不足に因り減少してゐるのであつて、戦前昭和十二年（一九三七年）には豚百六十二萬頭、鶏七百二十萬羽に達してゐた。牛は資質頗る優れ、朝鮮牛の名は廣く内外に宣傳せうれて、逐年其の移出は増加の趨勢を示し、豚、鶏は農家の副業に好適して、改良種の飼養も年々増加してゐる。

前述の如く、普通農作、養蚕、畜産の各業に亘り、諸種の産物は、何れも相當の産額に達して

るるので朝鮮内の需要を充てて餘りあるものは之を内地<sup>日本</sup>及外國に供給してゐる。昭和十六年（一九四一年）に於ける農産物の輸移出入と見るに輸移出の主なるものは米三百五十一萬石、大豆三十二萬石、縹綿千百萬斤、麻二千八百萬斤、繭七十七萬斤、生糸百九十萬斤、生牛五萬三千頭、牛皮八十八萬斤等であり、農産物及其の加工品にして輸移入を仰ぐものは小麦粉三千八百萬斤、砂糖六千二百萬斤、清酒九千石、麥酒百八十萬立等である。

ノ

其の貿易の相手は大部分日本である。朝鮮に於ては最近製造工業は異常な發展を爲してゐるが尚農業、漁業等の原始的産業が重要な地位を占めてゐるので生産品中苟も内外的需要を喚起し得べきものは乏し生産と獎勵して外國市場に販路を求むると共に農産物の如きは出來得る限り輸入を防遏して貿易の均衡と經濟の發展を圖るべきである。而も朝鮮は尚勞力は豊富、賃金は低廉であり生産に要する費用は一般に低く従つて農業の經營は

相當有利である。故に今後は日本其の他隣接  
國に不足せる米、小麦、大豆、果實、生牛、  
牛皮の如きは其の生産力の充實を圖つて之を  
是等諸國に供給し更に海外に於て需要の旺盛  
な果實、人蔘、煙草及蚕糸等に付又は極力海  
外に其の販路を求むべきである。斯くすれば  
各種産物の生産増加の餘地は多大であつて、  
朝鮮農業の前途は寔に多望であると謂ふこと  
が出来た。



## 第二章 耕地

朝鮮に於ける耕地面積は畝約百七十七萬町歩・田約二百七十萬町歩で火田の耕作せられ  
てゐる面積三十七萬町歩を加へるとまは四百  
八十四萬町歩に達し、全面積の約二割を占め  
農家一戸に對し耕地面積一町五反歩に當り、  
中部以南の地方は畝多く田と相半ばし中部以  
北は田多く畝一に對し田五の割合に當つてゐ  
る。

朝鮮は古來農業を以つて産業の大宗と爲れ

各般の産業的施設は總て農業を以つて基幹と  
してゐた。故に李朝の初期に在つては爲政者  
が水利灌溉に意を用ひた結果各道に堤堰（溜  
池）及沢（井堰）の完成せられたもの堤堰六  
千餘、沢二萬餘に達したのである。然し本が  
り李朝の中葉以降秕政相次ぎ租税の苛歛地主  
の誅求と相俟つて水利の施設は漸次荒廢して  
殆んど昔の俤なきに至り、僅かに應急的姑息  
の設備に依つて灌溉をなすもの全面積の二割  
弱を占むるに過ぎず、殘餘八割の畝は其の運命



を擧げて不安なる天水に委するの状態にあつた。茲に於て日本保護政治の初頭明治三十八年（一九〇五年）水利に依る土地の灌漑疏鑿、開拓に關する事業を經營せしむるため水利組合の設立を認めたりたのであるが、當時民力は極度に疲弊し農家の智識も甚だ低級であつたため水利組合の事業に著しい進捗を期すことは困難な事情にあつた。朝鮮の農業が漸次面目を改むるに至つたのは大正九年（一九二〇年）産米増殖計畫が樹立され土地改良事業

の實施を見るに至つてかうであつて、次に述べ各種の施設に依り現在に於ては水利の便を有するもの百二十五萬町歩、畝面積の約七割を占むるに至つた。

第一節 産米増殖計畫以前の施設

(一) 土地調査の完成

從來朝鮮には地籍の制度が無く土地の所有権は極めて不確實な状態に在ったので明治四十二年(一九〇九年)之が調査を開始し八箇年の星霜を経て大正六年(一九一七年)全道に亘り完成を見るに至つた。尤も林野は土地調査の範囲外であつたので、大正八年(一九一九年)より之が調査に着手し大正十三年(一九二四年)に全鮮の調査を

完了した。

(二) 国有未墾地の貸付及付興

干潟 河邊又は山麓に於て民有に属しない国有未墾地は概測に依り干潟二十餘萬町歩、河邊荒蕪地三萬町歩、山麓傾斜地八十萬町歩と稱せられてゐる。是等未墾地を開拓して土地利用を完からしむることは産業開發上必要であるので、保護政治の初期に於て、国有未墾地利用法を發布し、一定の事業を経営することを條件として未墾地を一定期

間貸付し、料金を徴収し事業成功の上は其の土地を無償又は有償にて供與することとした。然し此の法令は單に貸付に關する事項の規定に急であつて(一)貸付後に於ける指導助成施設の極めて薄かりしこと(二)受貸付者の事業計畫が宜しきを得ないばかりでなく、技術能力に乏しく事業實施の方針及工事實行の方法等に當を得ないものが多かつたこと(三)受貸付者の資金調達が不如意であつたこと(四)貸付に際して徒に權利を獲得し

に

之を賣買の目的とする者の取締が不充分であつた等の原因に依つて、國有未墾地の處分は相當進捗したに拘らず其の實際の利用は甚だ不振の状態に在つた。

(三)堤堰の修築

在來の主なる水利灌溉の設備は堤堰、沢であつて其の数は堤堰六千餘、沢二萬餘を算してゐた。然し是等は殆んど荒廢に歸し其の用を爲さないので、施政後之が修築を計畫し地方廳の調査設計、國庫の補助並に蒙利者



の賦役の方法に依り指導獎勵を加へた結果  
大正八年度（一九一九年）末迄に修築を  
了したものの堤堰淤一千九百三十七箇所其の  
灌漑面積五萬二千町歩に達した。大正八年  
（一九一九年）以後は地方廳に財源を興へ  
地方廳として之が助成に當らしめた。  
(四) 水利組合の設立及其助成  
水利組合條令の發布を見たものの民度の低  
い朝鮮には共同施設を爲すもの少く時期尚  
早の感が有つたが日本人の愛農者が漸次移

住し大規模の農事經營を企畫する者が増加  
し、水利組合設立の機運漸く動くに至つた  
ので大正六年（一九一七年）朝鮮水利組合  
令が發布せられ舊條令に代つた。然し水利  
組合の設立には事業の調査設計の完備を必  
要とし之が爲に多額の經費と適當なる技術  
者を要する等の事情があり、水利事業の勃  
興は遅々として振はなかつた。依つて大正  
八年（一九一九年）水利組合補助規程が制  
定され事業の調査計畫は政府に於て施行す



る。次に工事費補助とし、事業費の一割五分以内を國庫より下付して之を助成する。ことになった。

水利組合の事業は(一)灌漑、排水、水害豫防、(二)土地改良を行ふ等であり昭和十六年(一九四一年)度末に於ては組合数三百七十三、其の蒙利面積二十九萬三千九百五十八町歩に達してゐる。

第二節 朝鮮産米増殖計畫に依る施設

朝鮮は米作上天恵の地であるが其の生産は未だ貧弱で而もそれは一人爲の之に伴はないことに原因するので併合以來大正八年（一九一九年）に至る九ヶ年間産米増殖の施設として主として品種の改良及自給肥料の奨励に努力が拂はれた。其の結果生産年額約六百萬石輸出年額約二百五十萬石の増加を見良好の成績を収めたのであるが、是等施設は農事改良に依り米の増収を期し得べき畓の全部

に普及し既に其の奨励擴張の餘地なきに至つた。従つて更に大に産米増殖の途を講ぜんとせば先づ以つて農事改良の基礎である耕地の改善擴張を圖る必要が生じた。幸に當時朝鮮には極めて有利に此の土地改良事業を經營し得べき土地が尠からず存し、其の見込面積は現在畓の灌溉設備を改善し得べき土地四十萬町歩、現在田を變換して畓に爲し得べき土地二十萬町歩、荒蕪地千馮地を開墾千拓して畓と爲し得べき土地二十萬町歩合計八十萬町歩

と概算された。

「當時食糧不足に悩んでゐた日本政府は食糧

問題の解決に資せんが爲大正九年<sup>一九二〇年</sup>以降三十年

を期し前記土地の改良事業を遂行する方針の

下に、先づ以つて向ふ十五箇年間に其の二分

の一に對し改良事業を完了し一面耕種法の改

良に付とも一層の奨励を加え之に依り九百萬

石を増産するの計畫を樹立した。

再來此の計畫に基いて事業の進捗が圖られ

たが計畫の當初に於て企圖された事業實行機

關の實現を見なかつたことと、計畫樹立後に

於て財界に變動があり企業熱は頓に衰退し殊

に一般金利の高騰に依り工事費に對する二割

乃至三割の政府の補助金を以つては採算

が甚だ困難となつた等の諸事情に因つて實施

以來大正十四年末（一九二五年）に至る六箇

年間に於ける成功豫定面積は約九萬町歩に過

ぎなかつた。茲に於て之が對應策を講ずる必要

なかつた。

を認め從來の計畫の一部を變更すると共に、低



利資金の斡旋供給等新に諸般の奨励の方途を  
 定め大正十五年度（一九二六年）以降之が實  
 行に着手した。  
 次に産米増殖計畫の施設に付て述ぶるに  
 一土地改良基本調査  
 朝鮮産米増殖計畫が確立され、や其の施設事  
 項の一つとして、全鮮に亘り水系別に地押的に  
 将来土地改良事業を施行し得べき地區の所在、  
 面積、用水の關係、利用の方法、工事費の  
 概算等を調査し、将来に於ける耕地改良擴張の

基本資料と爲すと共に、其の結果を公表して普  
 く一般企業家の資料に供し、以て事業の促進  
 に資することとした。本調査は大正九年（一  
 九二〇年）に着手され、昭和四年度末（一九二  
 九年）に完了したのであるが、調査の結果土  
 地改良事業を施行し得べき地域数は二千百五  
 十八箇所であつて、其の面積は  
 既成畝の灌溉改善 三二九、九一五町歩  
 田を畝とする地目變換 一四五、六四四  
 開墾 一六、三六二





特別の事情ある場合、於ては此の制限を起  
 へて補助を爲し得る例外規定が存した。  
 三産米増殖計畫の更新  
 産米増殖計畫は日本の食糧問題の解決に資せ  
 んとする國家的重要政策であつたに拘らず前  
 述の如く諸種の事情に因り豫期の通り進捗し  
 なかつたので、従来より一層有利な條件の下に  
 之を促進するの必要を認め(1)従来資金難と  
 緩和するため政府の預金部より低利の事業資  
 金及農事改良資金の融通と受くることとし(2)

更に事業の代行機関を設けて計畫の進展を確	保すると共に(3)農業改良資金の融通に依り施	肥の増加を奨励し品種の改良と相俟つて工事	完成後の増収を圖り以て企業者の利潤の増	加を圖る方策の下に産米増殖計畫を改訂し大	正十五年(一九二六年)以降十二ヶ年間に新	に	既成産の灌漑改善	一九五〇〇〇歩	田を畝とする地目變換	九〇〇〇〇	開墾開拓	六五〇〇〇
----------------------	------------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	---	----------	---------	------------	-------	------	-------

三
五
口
口
心
心

米増殖を圖るごととなつた。

而して此の新しき産業増殖更新計畫に依る

三  
五  
萬  
町  
歩  
の  
土  
地  
改  
良  
事  
業  
に  
要  
す  
る  
経  
費  
の

總額は約二億八千五百三十三萬圓である。

に  
對  
し  
政  
府  
の  
補  
助  
見  
込  
總  
額  
は  
六  
千  
五  
百  
七  
十  
萬  
圓

で	あ	る、	其	の	差	額	二	億	二	千	二	十	六	萬	圓	は	企	業
---	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

者  
が  
言  
間  
諱  
を  
要  
す  
る  
金  
額  
で  
あ  
る  
が、  
其  
の  
内  
一  
億  
九

千八百十九萬圓は總督府が低利資金を融通する。

20

輪旋  
と  
爲す  
ので  
殘額  
二千二百  
萬圓  
を  
計  
算  
す

ね  
 は  
 足  
 り  
 3  
 十  
 畫  
 で  
 あ  
 3。

尚更新產米增殖計畫  
依了效果豫想  
示

[illegible][illegible]

(イ) 三十五萬町歩の土地改良事業に依り得る

[illegible]

(四) 前項の土地に對し耕種法の改善に依り

ウ  
3  
ベ  
キ  
増  
収  
高  
  
  
  
  
百  
九  
十  
二  
萬  
石

(ハ) 土地改良を施行せざるに對する耕種



[illegible]

第三節 其の他の施設

一 朝鮮増米計畫

朝鮮産米増殖計畫は先述の如く昭和九年（一九三四年）以降一時中止されたのであるが、昭和十五年（一九四〇年）に至り事變下に於ける主要食糧たる米穀の自給確保を目的して昭和十五年（一九四〇年）以降六ヶ年に十六萬三千町歩の土地改良を施行する計畫（本計畫は耕種法の改善に依る増米計畫と併せて朝鮮増米計畫と稱す）を樹て

實行に着手したのであるが、昭和十七年（一九四三年）時局の推移と日本の人口増殖政

策に對處する爲、昭和十五年（一九四〇年）

度以降十二ヶ年に五十七萬七千七百町歩の

土地改良を施行する計畫に擴充したのである。

本計畫に於ては朝鮮の旱害對策としての

見地から主として既成灌の灌漑改善に重点

を置いたのであるが、從來の實績に鑑み耕

地整理及暗渠排水を擴充し新に干拓事業を

實施する等土地改良事業を積極的に施行し
耕種法の改善に對應することとした。尚、
の産米増殖計畫の実績及最近の經濟情勢に
鑑み、補助率を増嵩し測量設計工事監督等
の技術的助成を厚くし、所要資金に就ては大
蔵省預金部資金を融通する等計畫の圓滑な
る遂行を期した。
二小規模土地改良事業
昭和五年（一九三〇年）度より土地改良
事業補助規則の適用を受けない小規模の土

地改良事業に對して國庫補助を交付するの
途を開き、道費の補助金と併せ工事費の五割
程度を補助し之が助長促進を図ることとし
た。本工事に對し昭和十四年（一九三九年
）度迄に交付した國庫補助金は累計三十七
萬餘圓。施行地區三百二十ヶ所。施行面積
八千五百七十餘町歩に達した。（昭和十五年
）一九四〇年度以降は朝鮮増米計畫に包
括實施し
三旱害對策小規模土地改良事業の助成



朝鮮の現状は未だ旱魃の被害より免れ得  
ざる番九十四萬町歩を存し、農村更生上之に  
對する施設の一日も忽緒に附し難きものが  
あるので、昭和十二年（一九三七年）度  
に於て既存堤堰淤の改修を行へば旱魃の被害  
より免れ得る地区十八萬八千町歩中差當り  
五萬二千町歩に付毎年三千五百町歩宛十五  
ヶ年に其の改修を施行する計畫を樹て土地  
改良補助規則を改正し、右工事に對しては  
特に五割以内の國庫補助を與へ、尚技術的後

助を與ふる爲道に國費職員を増置し、又水  
利組合事業として行ふものに對しては特に  
低利資金を斡旋する等積極的に指導助成と  
爲すこととした。而して右計畫に依り昭和  
十四年（一九三九年）度迄に實施せるもの  
九十二ヶ所面積七千二百七十三町歩であつ  
て、之に對する補助金交付額は六十九萬九  
千餘圓である。（昭和十五年「一九四〇年  
一度以降は朝鮮増米計畫に包括實施」）  
四 既成耕地改良事業の助成

既成土地改良地区に於ては年所を經るに  
伴ひ、既存設備の改良或は追加工事の施行を  
爲さなければ豫期の收穫を擧げ得ざるもの  
を生ずるに至つたので、昭和五年（一九三  
〇年）一度以降年々之が補助金を計上し工事  
費の二割乃至五割の補助を與へ之を助成す  
ることとした。昭和十六年（一九四一年）  
度迄に支出した國庫補助金は累計百四十四  
萬五千八百圓に達してゐる。

五既成耕地用排水改善事業の助成

從來施行せられた土地改良事業地区に於  
ては、主として水源及主要用排水施設は完備  
されたが用水配給、悪水排除等の局部的施  
設が之に伴はないものがあるのので、之が改  
良を圖る爲昭和十二年（一九三七年）度に  
於て計畫を樹立し、差當り第一期計畫として  
三萬町歩に付毎年一千五百町歩宛二十ヶ年  
間に小用排水施設の改善を爲すこととし、  
右工事費に對しては土地改良事業補助規則  
の規定に依り二割の國庫補助金を交付し、

尚測量設計に付ても國及道に於て可及的援
助と與へ又水利組合の行ふ事業に對しては
低利資金の斡旋を爲すこととした。而して
右計畫に依り昭和十四年度（一九三九年）
迄に實施せる地區數は一七、蒙利面積四千
九百六十五町歩に達し、之に對する補助金交
付額は十一萬一千六百六十四圓である。（昭
和十五年「一九四〇年」度以降は朝鮮増米
計畫に包括實施）
（朝鮮増米計畫）

昭和十五年（一九四〇年）度より實施せ
られた朝鮮増米計畫は耕種法改善を主とし
土地改良を從とするものであつて、土地改
良事業は前述の如く從來の各種施設と之に
統合して計畫が樹立されたのであるが、昭
和十七年（一九四二年）の擴充計畫に於て
は積極的に土地改良を實施することとなり、
計畫完成年次に於て土地改良に依り六百十
九萬六千石、耕種法改善に依り五百十八萬
七千石を増産し、之に陸稻四十一萬五千石



千石を確保せんとするものがある。

尚昭和十五年度以降昭和十八年度迄の成績

と示せば左の通である。

事業別	計	實績	功
灌漑改善	一五、七〇〇	一、二一、二四〇	八五
用排水施設改善	二四、〇〇〇	一七、五八二	七三
小規模事業	八、〇〇〇	七、七五七	九三
千拓	八、〇〇〇	八、八五五	一〇
計	一五三、七〇〇	一五五、四三八	八二

[illegible]

### 第三章 氣象

朝鮮は位置東經百二十三度五十六分より百三十一度十一分に及び北緯三十三度六分より四十三度に亘り。北方は大陸に接續し東西、南の三面は海に瀕してゐる。氣象は所謂大陸性を帶び寒暑共に酷烈であつて雨量尠く、從つて大氣は甚しく乾燥してゐる。其の年平均氣溫は南部地方に於て攝氏十三度、中部地方に於て十度、北部地方に於て四度乃至八度内外であつて日本の中部地方、北海道と大差は

ないが、春秋の期間短く冬季最も長く又晝夜の氣溫の較差大であつて、時に二十五度に及ぶことがある。又雨雪の年量は概して寡少で大部分八百耗乃至千耗に過ぎず、南東海岸に最も多く北西に進むに従ひ漸減する。即ち釜山、元山地方は千四百耗に達し京城、仁川地方は約千耗、平壤、龍岩浦地方は九百耗であつて更に北部内陸豆滿江流域地方に至ると五百耗に充たない所がある。之を日本に比べると一般に甚だ寡少である。然し朝鮮に於ては六

月より八月に至る三箇月間を降雨期 十月より五月に至る期間を乾燥期と稱し、雨期と乾燥期と截然たる區別がある。降雪及霜の初終は年に依り遅速はあるが初霜は北部地方に在り又は九月下旬 他は概ね十月七日より十月下旬の間にある。終霜は釜山地方の三月下旬を最早とし北部地方に在りては五月六日中旬に至りて終るを常とする。初雪は北部高原地方に最も早く十月下旬 他は概ね十一月に見る。東南岸は最も遅れて十二月下旬であつて特に

は年中雪を見ないこともある。終雪は北部國境地方最も遅く四月下旬であつて釜山地方は三月下旬である。一般の氣象は右の如くであつて其の農業に及ぼす影響は概して良好である。其の主なる点を擧げると  
(一) 氣温  
年平均温度は日本の同緯度地方に比し稍低い。が朝鮮は夏期と冬期との気温の差が甚しいので、夏期の気温は割合に高く之に反し冬期の



の気温は甚しく低下する。従つて朝鮮に於  
ては夏期の温暖な期間に一代を終る作物は  
其の生育上比較的高温を要するものも良く  
成育する。然し越冬を必要とする作物は寒  
氣に對する抵抗力の強いものでないと危  
険である。即ち日本の温暖な地方に於ても其  
の成績の充分でない陸地棉が朝鮮に於て好  
成績を挙げ又生育上多くの光熱を要する蔬  
果類が朝鮮に於て比較的容易に栽培し得る  
に拘らず一方日本に於て成績の良好な柑橘

類が朝鮮に於て殆んど望の無いのは前述の  
理由に依る。又夏期と冬期との気温の差の  
甚しいことは一面春秋兩季節の気温の變化  
が急であると看做すことが出来る。春季一旦  
気温が上昇し始めると頓に追むかうして作  
物の晩霜被害を蒙むることが比較的少ない。  
(二)降水量

朝鮮の降水量が一般に寡少であり、季節的  
に分配の偏倚してゐることは前述の通りで  
あるが、降雨期たる夏期に於て雨量の多い



朝鮮には豪雨は尠くないが日本に於ける様  
に強烈な暴風雨に依つて農作物が害される  
といふことは極く少く、殊に日本に於て種  
作の最大危険をなす二百十日、二百二十日  
の如き厄日の存しないことは有利とする所  
である。其の  
之を要するに朝鮮の氣象は農業上一大天恵を  
なし其の經營上一般に好影響を與へてゐると  
言ふことが出来る。



# 第四章 作物

## 第一節 米

施政當初に於ける一般農民の經濟狀態は極めて貧弱であつて、秋收期に小作料を納り舊債を支拂ふと收穫物の殘餘は幾許もなく早春には既に食が盡きて或は地主に高利の食糧を借り或は山野に草根木皮を漁つて辛うじて露命を繋ぐ狀態で、~~春~~農繁期になつても食糧不足のため完全に勞役に服し得ないものが尠からずあつた。依つて政府當局は夙に農家の食

糧充實を圖ることの急務なると認め、産米の増殖を企圖して朝鮮に於ける經濟の振興向上に資することゝ努めた。  
纏つて施政當初<sup>時</sup>の朝鮮に於ける米作の狀態を見るに、其の氣象、土質等天然の要素は米作に好適し又耕地を改良擴張して米作に供し得る餘地頗る多く、且つ耕種に従事すべき農民の數も亦頗る饒多であつたが、李朝時代多年の秕政の結果土地は荒廢に委せられ農家は疲弊して生産の改良増殖を企圖せんとする

意氣も資本も欠如する有様であつた。従つて  
若し近代に於ける科学的施設を行ひ適當な方  
法を以つて農民を指導するならば、産業事業  
の振作は期して俟つべきものがあつたので、總  
督府は此の方針に基き左の如き事項の施設奨  
励に努め來つたのである。

(一) 品種改良

(1) 優良品種の普及

在來種は幾多雜駁な品種と混淆し收量  
品質共に劣等なもので、總督府は優良品種の

普及と種作改良上の第一要件として取り

上げ之に最大の努力を傾注した。即ち農

事試験場<sup>及道農事試験場</sup>に於て優良品種を選出し道に採

種園を設けて其の種子の育成を爲し、之

を農民に配付すると共に民間に於て生産

された優良品種の種籾と在來品種の種籾

とを交換させ兩々相俟つて優良品種の普

及を圖つたのである。然し其の實施の初

めに於ては保守的な農民は其の成果を狐

疑し又は何等の理由なしに其の栽培を嫌

忘したので、生産品評會・立毛品評會  
又は講習會等を開催して優良品種の有利  
なことを宣傳すると共に種子の無償配布  
を行つて其の普及に努力した。其の後奨  
励の趣旨徹底するに伴ひ漸次若干の代價  
を徴して種子の配付を行ひ遂に全部の有  
償配布を行ふに至つた。又民間の種子交  
換も優良品種に對し若干の割増を附して  
在來種と交換させることとした。斯くて  
優良品種の作付反別は年と共に増加し、  
34

明治四十三年（一九一〇年）に於ては約  
一千町歩に過ぎざりしものが昭和十六年  
（一九四一年）には百六十萬町歩に達し  
た。

(四) 優良品種の種子更新  
優良品種は前述の如く廣く農家に普及  
せられたりであるが、栽培數年に及ぶと  
優良品種の中に異品種の種子と混淆し其  
の特性が劣變して品質に於ても收量に於  
ても在來種と異ならぬものとなり、折



角普及した優良品種も其の成果を失はんとする趨勢を示すに至った。茲に於て監督府は優良品種の種子更新の方途を講ずるため、道として道農事試験場に於て純良なる原種を育成せしめ、之に依つて得たる種子を更に郡及面に設置した系統的採種圃に於て育成増殖して一般農家に配布し、四ヶ年又は五ヶ年に優良品種普及面積全部の種子更新を行ふ計畫を樹立し、大正六年（一九一七年）實行に移したの

であるが、色々の事情のため豫期の成績を挙ぐることが出来なかつた。其の主な原因は右系統的採種中最下級の採種圃經營の困難にあつたので、大正十一年（一九二二年）總督府は之に對し國庫より補助金を交付して助成することとし、優良品種の既に普及した約百萬町歩の種子を五箇年間に更新する計畫を樹て大正十五年（一九二六年）度其の實施を完了した。依つて更に昭和二年（一九二七年）第

二期種子更新計畫を樹立したのであるが、  
此の度は従來の實績に鑑み今後五箇年間に  
優良種子の普及を了する見込面積を目  
標として種子更新を計る必要を認め、更  
新豫定面積を百三十五萬町歩と爲し、第一  
次更新計畫と同様な方法で本計畫を實施  
し昭和六年度（一九三一年）之を完了し  
た。昭和七年度から九三二年  
と以つて種子更新計畫を樹立したのであ  
るが、道に於ては優良品種の普及並に其

の種子更新の徹底は米質改善上一日も忽  
にすべからずと爲し、殆んど全道に亘つ  
て五箇年更新面積を三箇年に更新する計  
畫を樹て實施するに至つたので、總督府の  
計畫に對し豫期以上の好成績を挙ぐるに  
至つた。

い 在來種の改良  
現在の優良品種の栽培には相當灌漑の  
行はれり土地を必要とし、又甚しく用水  
の不足する箇に滴灌する優良品種を選出

することには頗る困難なので、天水苗の多い朝鮮に於ては、今後も在來種を栽培しなければならぬ地域は相當に有る。然し、在來種は品種が頗る多く且つ各品種が混濁して極めて雜駁となり、品質收量共に劣等である。就中赤米の混濁が多く外觀を損じ、精白歩合を減殺するので、價格を墜すことが甚しい。依つて總督府は大正三年（一九一四年）以來、地方に於て廣く栽培せられ、且つ成績優良と認められるものを

に就き選穂に依つて種子を採取せしむる。ことを奨励し來りたるが、未だ一般に行はれず、在來種の改良は良好な成績を挙げ得なかつたのであるが、平安南道に於ては大正十二年（一九二三年）以來、在來種中比較的優良と認められた數品種を選定し、系統的採種圃を設けて其の種子の育成増殖を圖り、優良品種の種子更新と同様な方法で在來種の改良を企圖し、相當良好な成績を挙げた。總督府は之に鑑



昭和二年（一九二七年）在來種の改良  
と急務とする京畿、黄海、平南、平北、  
江原の五道に補助金を交付し、前述の優  
良品種の種子更新と同様な方法で、在來種  
中の優良品種を以つて種子更新を行はし  
むる計畫と樹て、産米改良の効果を一層確  
實ならしめんことを期して昭和六年度（  
一九三一年）種子更新豫定面積約十五萬  
畝の更新を完了した。然る所栽培技術  
の進歩並に水利事業の進捗に伴ひ、農家

は在來種栽培地に対しても日本系優良品  
種の普及を希望するに至つたので、昭和  
七年（一九三二年）度以降は平南、江原  
の二道に限り在來種の種子更新を行はし  
むることとした。従つて更新豫定面積も極  
めて僅小となつた。  
(二) 陸稻栽培の改良  
陸稻の栽培は其の面積收穫共に僅小で稻  
作全体より見れば極めて小部分であり、而  
も作付の擴張は氣候風土等の關係よりして

遠に奨励し難いものがあるので從來主として品種の改良に意を用ひ優良品種の奨励に努め來つたのであるが其の結果昭和九年（一九三四年）には總作付面積の三割七分に優良品種の普及を見るに至つた。

（三）苗代の改良

苗代期に於ける害虫の防除及雜草等の拔取に便ならしめるため從來揚床短冊形苗代の奨励を爲してゐる。尚近年は苗代に於ける薄播の必要が痛感されその奨励にも努めて

るが共に好成績を挙げてゐる。

（四）肥料の施用

朝鮮の農家は一般に施肥に對する觀念が頗る幼稚であつて、特に畝に對しては施肥を爲さないか又は二年或は三年目に施肥するを普通とした。従つて米作改良上肥料の施用は緊急の必要事と認められたが、當時に於ては農家の經濟及農民の智識程度に鑑み堆肥・人糞尿・綠肥等の自給肥料の製造施用を先づ奨励し、金肥は寧ろ抑止す

了方針が<sup>採</sup>取された。其の後農家の經濟は稍  
向上し農民の智識程度も幾分進歩が認めら  
れたに至つたので、大正八年（一九一九年）  
より一般に對し金肥の施用を獎勵せらるる  
に至つた。特に土地改良事業の進展と優良  
品種の普及とは土中養分の消費を増大し益  
々之が補給の必要に迫られるに至つたので、  
總督府は肥料改良増施計畫を樹立し大正  
十五年（一九二六年）以降に於て肥料の増  
施に對し積極的獎勵を加へることとなつた。

### (五) 稗拔

従来水稻に稗の混植甚しく爲に收量を減  
じ産米の品質を損じ殊に輸移出米として  
の聲價を煩ふ失墜してゐたので苗代及本苗  
に於ける稗の拔取が獎勵された。其の結果  
新時番に於ける稗は著しく減少を見るに至  
つた。

### (六) 害虫驅除豫防

稻の害虫の中主なるものは浮塵子及螟虫  
であつて、特に浮塵子の害は恐るべきもの



があるので害虫駆除豫防規則を發布して害  
虫の駆除豫防の勵行を期したのであるが、  
之のみでは充分の効果を擧ぐるに至らな  
つたので大正十五年度（一九二六年）より  
害虫駆除の爲現金支出を要するものに對し  
ては相當の補助を爲し駆除の徹底を期す  
ることになった。

(七)適期の刈取  
農法の粗放農民の放漫及地主對小作人  
間の折金の不圓滑等の爲従来稲の刈取が適

期に行はれず、枯熟期を過ぎるも久しく番  
に暴露される状態で産米の収量及品質を減  
少することが多くなつた。依つて此の弊  
風の矯正を期する爲適期刈取の指導獎勵が  
行はれたのであるが、幸にして豫期の成績  
を擧げ現今に於ては昔日の如く極端に刈取  
の遅延するものは殆んど跡を絶つに至つた。  
(八)乾燥調製の改良  
朝鮮の天氣は濕度低く稲及穀の乾燥は容  
易なるに拘らず、従来刈取後の乾燥又は脱

穀後若は粃摺前の粃乾燥を行はなかつた爲  
貯藏中に甚しく米質を損じ春期後に於て  
はエビ米を混入し或は臭氣を發するに至る  
ものが尠くなかつたので之を改善する爲  
刈稻の平乾又は稻架乾と粃摺前<sup>の</sup>於ける粃  
乾の勵行に努力が拂はれた  
又在來の調製法は直接地上に於て稻と石又  
は臼等に打ち付けて脱穀し僅に天然の風  
力に依り土砂塵埃を除去して直に之を包裝  
するので粃中に夥しい土砂を混入し之を

玄米と爲すも夾雜物が多く前述乾燥の不良  
と相俟つて玄米の品質を損じ日本との取  
引には使用出来ない状態であつた。依つて  
脱穀作業は莖の上で成るべく稻扱を用ひて  
行はしめ又は粘土叩き調製場を造らて莖敷  
に代へさせ之に依つて石の混入を防ぐと  
共に唐箕、萬石等を用ひて夾雜物を除去せ  
しむるや獎勵し來つた。  
尚稻扱器、唐箕、篩等の調製用具及莖織  
機に付ては當初は出來得る限り誦費を以つ

て之を購入して農民に配布せしめる方法が採られたが、後農民が其の便利を理解するに及んで漸次共同購入が勧誘され、又一面此等器具の使用法に付傳習會が開催された。斯くて調製器具の使用は相當普及するに至つたのであるが、尚地方市場に出廻る叔の中には夾雜物の夥しいものがあるので極力矯正の途が講ぜられ、大正十二年（一九二三年）よりは延敷調製の勵行に關し各道が歩調を一つにして之が徹底的實行を期する

こととなり、特に集中的指導部落を定めて官民協力して之を督勵したので農民の自覺と相俟つて是等指導部落の生産叔は著しく改善せられるに至つた。

### (九) 玄米調製

従来米穀の販賣は叔のみ、行はれ日本人の農業經營者に於てすら玄米調製を爲す者殆んど皆無の状態で、叔摺作業は専ら商人の手に依つて行はれてゐた。而も朝鮮人農家の飯米は玄米の調製を行はず叔より直に



精白する蓄積であつて、斯かる方法は農家の  
の勞力を利用する矣よりするも、白米の歩  
止り及び粃摺の副産物たる粃穀利用の矣よ  
りするも、又玄米調製の完全を期する矣よ  
りするも、特又農民をして産米改良の實績  
を的確に會得せしむる矣よりするも決して  
喜ぶべき所ではないので、玄米調製を促進  
する爲に粃摺用器の無償配付を爲し或は其の  
共同購入の奨励を行つたのである。而して  
玄米調製は日本人營農者先づ之を實行し、

次いで日本人居住者の多き地方の朝鮮人に  
普及し今日に於ては各地共多少之が實行と  
見らるに至つた。殊に前述の乾燥調製の指導  
部落に對しては其の改良生産物を有利に販  
賣せしめんが爲、特に玄米調製を奨励した  
ので之を實行する者が急に増加し一般的に  
も其の機運を醸成した。尚組合組織に依り  
動力農具を設備して玄米調製を爲すものに  
對しては、道に於て相當補助の途を講じ其  
の發達を圖つた結果、昭和五年（一九三〇

年)には是等組合の数は二百五十餘を算す  
るに至り何れも良好の成績を示してゐるの  
で、今後農家に於ける玄米調製事業は著し  
い進展を示すものと思料される。只現在に於  
ては農家をして産米全部の玄米調製を行は  
しめんとせば倉庫の普及並に金融の便を圖  
るの必要があり、是等の事情に依つて遽に  
農家一般に之が勵行を望むことは困難なの  
で、今日に於ける玄米調製奨励の成績も之  
と全體より見ると尚極めて微々たるもので

ある。

### (十) 米穀検査

米穀

前述せし如く従来朝鮮米は乾燥不良、調製  
粗笨之に加ふるに包装は不完全、容量は不  
統一であつたので、市價は低廉となり其の  
取引亦圓滑を欠ぎ輸移出を促進する上に支  
障少がうがうるものがあった。依つて米穀中  
其の取引数量の最も多く且つ如上の欠点の  
甚しかつた玄米に對し第一着に其の改善を  
圖る爲大正四年(一九一五年)米穀検査規

則と發布し道費の事業として検査を施行す  
ることになった。其の結果多大の好成績を  
挙げ輸移出米は検査施行以前のものに比し  
雲泥の差を生じ、其の優良なものは好評噴  
々として内地優良米に比するも此の遜色無  
きに至った。尚舶米の輸移出も漸次増加し  
其の検査の必要を生じたので大正十一年（  
一九二二年）検査規則が改正せられ玄米と  
共に検査が實施されることとなった。検査  
規則に就ては再後数回に亘って必要な改正

が行はれたが各道各個に検査を施行する為  
動もすれば検査の統一を欠き諸種の弊害が  
有ったので是等の弊害を除去し取引の實情  
に應ずる為検査事業は昭和七年（一九三二  
年）十月より國營に移管された。

#### (土) 販路の擴張

施政當初に於ては米穀需要の状況、運輸交  
通の設備、税制及經濟金融等諸般の狀態が、  
今日とは霄壤も啻なうない差が有ったの  
で産米の販路開拓に付ては相當の苦心が拂



はれた。先づ從來米及粃に對して課されて  
ゐた朝鮮輸出税を廢して日本及滿州への  
出荷を奨励し、次で日本に於ける移入税を  
撤廢して日本移出を便にしたのであるが、  
産米改良の實績が著るに及んで日本の取引  
市場に於ける受拂代用米として使用せらる  
るに至り、鮮米の日本取引は非常に圓滑と  
なり、その品質の改良と相俟つて日本各方面  
の需要は激増するに至つた。  
以上諸般の施設奨励事項中成績の最も良好な  
47%

のは優良品種の普及であつて、今や如何なる  
僻地の農民も豊玉、毫尾等其の地方に奨励せ  
られてゐる米種の名稱及其の栽培の有利なこ  
とを知らざる者はなく、之に依つて擧げられ  
る年增收額は三百有餘萬石と推定されてゐる。  
又乾燥調製の改良は農家に於ける實行未だ  
普しとは言へないが、米穀検査施行の結果と  
相俟つて、輸移出玄米の改良せられたことは爭  
ふべからざる事實であつて、日本市場に於ける  
朝鮮米の聲價は夫に擧り施政三十餘年の今日

全く朝鮮米は其の面目と一新したと稱しても決して過言ではない。其の他の施設奨励事項も仔細に査検するときには其の終局の目的を擧げるのは寧ろ今後にあるが、優良品種の普及並に乾燥調製の改良と相俟つて、朝鮮産米の生産を増加し其の品質を向上せしめた効果は實に大なるものがある。

(四) 朝鮮産米増殖計畫  
朝鮮産米増殖計畫は土地改良事業と耕種法の改良とを併せ行ふものであつて、土地改良

に就ては前章耕地に於て述べた通りが、耕種法の改良については(一)金肥の使用を奨励すると共に其の購買資金を斡旋すること(二)種子更新年限の短縮を期すること(三)米作改良に關し實地指導に當らしむるため地方廳に農業技術員を配置すること等各般の施設に付て其の擴充改善が行はれた。  
(四) 朝鮮増米計畫  
前述の昭和十五年(一九四〇年)度より實施された朝鮮増米計畫に於ても、土地改良事

業の外耕種法改善に依る増産計畫を併も行ふ  
ものであつて、稲作栽培技術の改善向上、農  
業勞力及灌漑水の配給調整、自給肥料の増産  
増施、病虫害の驅除豫防等稲作經營の改善に  
基調を置き、特に直接農家指導に當るべき郡  
農會、邑面職員の充實整備に努め朝鮮官民協  
力一致増米確保を期する方針の下に實施され、  
完成年次に於て土地改良事業に依り六百十  
九萬六千石、耕種法改善に依り五百十八萬七  
千石の増産を確保せんとするものであるが、

時局の影響に依り肥料事情は極度に窮迫し勞  
力、畜力、資材等も亦不足を告げ、加ふるに  
天候にも恵まれず計畫生産數量に對し実績は  
甚だ振はない情態で終戦となつた。  
凶米穀補給金に依る施設  
食糧品價格の高騰を抑止するため昭和十四  
年（一九三九年）米穀其の他の食糧品に就き  
公定價格が設定され、次いで消費者に對する  
食糧の配給の圓滑を期する爲め、特定の配給機  
關として直接生産者より買収らしむることと



減つたのであるが、他物價の騰貴するにつれ、米穀生産費は増大し、食糧品價格は割安となつて生産者の生産意欲を減殺する虞を生ずるに至つた。然し食糧品價額の引上げは直接國民生活に及ぼす影響が大なので、一方食糧品に對しては低物價政策を堅持すると共に之に依り生ずる生産者の不利を除去するため昭和十八年（一九四三年）度より生産者に補給金を交付し、而も之を食糧の増産施設に充當せしめて生産の一層の増強を圖らしむるの方策が

採られた。然し一般の民衆に照らし生産者の自發的施設のみに委ねることは其の目的を達する上に種種の困難な事情が存するので、補給金の中玄米石當二圓は生産者に直接交付する方法を避け、之を農會其の他の生産者團體に交付して生産者に代り増産目的達成上必要な施設を爲さしむることとした。而して代行施設は補給金の趣旨に鑑み、（一）米穀増産上有効適切なるものたること（二）出來得る限り生産者が並行的に均霑するものたることといふ方針

の下に選定され、昭和十八年（一九四三年）  
 度に於ては其の總額二千三百四十餘萬圓は（一）  
 農村糧穀共同作業場兼保管倉庫設置（二）技術指  
 導員設置（三）農耕牛充足施設（四）自給肥料増産施  
 設（五）部落共同作業擴充整備等十六項目の施設  
 に充當され、昭和十九年度（一九四四年）に  
 於ても總額二千百五十餘萬圓は前年実績に鑑  
 み多少の変更は有つたが大體同様の施設に充  
 當された。

尚最近に於ける米の生産高を示せば

八ノ

年次	作付反別	指數	收穫高	指數	反當量	指數	價額	指數
明治四十二年 一九一〇年	一三五二・七九七	一〇〇	一〇、四五六・三	一〇〇	〇、七六九	一〇〇	九、九六六・九	一〇〇
昭和六年 一九三一年	一六七四・五〇	一二四	一五、八七六・九九	一五二	〇、九四八	一三三	一六、八四九・九	一六九
昭和七年 一九三二年	一六四三・四四九	一二一	一六、三三五・八五	一五七	〇、九九五	一三三	一六、九三三・八五	一七三
昭和八年 一九三三年	一六九七・四六四	一二五	一八、九一六・七〇	一七五	一、〇七五	一五九	一八、三三三・四八	一八八
昭和九年 一九三四年	一七二一・九四九	一二七	一六、七二七・三三	一六二	〇、九七七	一三七	一五、五五五・六七	一四七
昭和十年 一九三五年								

米

	作	付 段 別 (町)				收 穫 高 (石)				一段歩収穫高(石)			
		総 数	粳 米	糯米	陸 米	総 数	粳 米	糯米	陸 米	総 数	粳 米	糯米	陸 米
明治	43年	1,352,796.8	1,255,309.9	83,698.4	13,788.5	10,405,613	9,225,072	582,601	97,940	0.769	0.775	0.676	0.710
	44	1,399,012.8	1,289,177.5	95,332.5	14,502.8	11,568,362	10,769,671	704,443	94,248	0.827	0.835	0.739	0.650
大正	1	1,417,174.3	1,311,805.7	90,687.3	14,681.3	10,865,051	10,139,486	630,249	95,316	0.767	0.773	0.695	0.649
	2	1,457,077.9	1,350,957.4	88,570.3	17,548.2	12,109,840	11,345,327	666,828	92,685	0.831	0.840	0.753	0.557
	3	1,484,013.7	1,379,508.4	87,651.9	16,853.4	14,130,578	13,260,961	759,025	110,592	0.952	0.961	0.866	0.656
	4	1,498,019.9	1,388,816.5	91,525.5	17,677.9	12,846,085	12,021,193	719,891	104,993	0.858	0.866	0.787	0.594
	5	1,518,843.8	1,413,150.6	87,851.9	17,718.7	13,933,009	13,104,373	717,025	111,561	0.917	0.927	0.815	0.630
	6	1,528,961.7	1,425,710.0	84,323.7	18,928.0	13,687,895	12,889,091	673,797	125,007	0.895	0.904	0.799	0.660
	7	1,548,169.7	1,445,226.2	84,598.0	18,345.5	15,294,109	14,430,238	731,236	127,635	0.988	0.998	0.870	0.695
	8	1,537,999.2	1,435,775.2	83,447.4	18,574.6	12,708,208	12,057,102	592,027	57,079	0.826	0.840	0.709	0.318
	9	1,555,405.8	1,453,729.1	83,887.0	17,789.7	14,882,352	14,060,394	604,777	117,179	0.957	0.967	0.840	0.659
	10	1,531,545.5	1,431,508.4	81,668.6	18,440.7	14,324,352	13,530,845	675,427	118,080	0.936	0.945	0.827	0.643
	11	1,557,948.5	1,459,722.7	79,605.1	18,440.7	15,014,292	14,211,409	683,486	119,397	0.964	0.973	0.859	0.647
昭和	12	1,550,399.4	1,453,671.7	76,681.1	20,046.6	15,174,645	14,363,372	675,401	135,872	0.979	0.988	0.881	0.678
	13	1,575,715.6	1,477,461.9	70,426.2	27,827.5	13,219,322	12,549,980	534,227	135,118	0.839	0.849	0.759	0.486
	14	1,585,216.2	1,488,812.9	68,185.1	28,217.2	14,773,102	14,036,468	575,927	160,707	0.932	0.943	0.845	0.570
	1	1,587,999.9	1,492,350.4	66,427.6	29,219.9	15,300,707	14,537,483	570,695	192,529	0.831	0.974	0.859	0.659
	2	1,602,331.6	1,505,600.1	62,962.7	33,768.8	17,298,887	16,439,298	607,193	250,396	1.080	1.072	0.968	0.742
	3	1,517,755.1	1,422,869.5	58,544.7	36,340.9	13,511,725	12,828,715	474,272	213,738	0.870	0.901	0.810	0.588
	4	1,632,064.9	1,536,354.7	54,437.1	38,273.1	13,701,746	13,043,767	439,103	218,876	0.840	0.849	0.764	0.572
	5	1,662,020.6	1,565,275.8	57,537.4	38,506.9	19,180,677	18,300,473	573,843	286,361	0.982	1.167	1.032	0.744
	6	1,674,610.1	1,579,068.3	56,835.0	38,706.8	15,872,779	15,132,713	487,681	252,605	0.948	0.958	0.858	0.653
	7	1,643,447.0	1,551,804.0	54,026.1	37,618.9	16,345,825	15,597,738	483,301	264,586	0.995	1.005	0.895	0.703
	8	1,697,462.9	1,605,563.5	53,848.6	38,051.8	18,192,720	17,417,008	517,249	258,463	1.072	1.085	0.961	0.679
	9	1,711,949.1	1,620,918.3	53,438.8	37,592.0	16,717,238	16,002,012	469,072	246,134	0.977	0.987	0.878	0.655
	10	1,694,539.3	1,604,675.3	51,454.6	38,409.4	17,884,669	17,131,991	479,877	272,801	1.055	1.068	0.933	0.710
	11	1,601,334.6	1,531,093.2	37,074.6	33,166.8	17,410,763	16,770,698	403,588	226,477	1.212	1.226	1.089	0.713
	12	1,639,116.8	1,576,185.9	28,633.6	34,297.3	26,796,950	26,030,669	423,265	343,016	1.635	1.651	1.478	1.000
	13	1,659,861.1	1,596,522.4	27,623.1	35,685.6	24,138,874	23,484,867	367,267	286,740	1.454	1.471	1.330	0.804
	14	1,234,805.7	1,184,686.3	17,280.6	32,838.8	14,355,773	14,078,842	195,343	81,608	1.163	1.188	1.130	0.249
	15	1,641,748.5	1,603,816.0	22,317.8	15,612.7	21,521,393	21,132,789	271,621	122,783	1.311	1.318	1.217	0.788
	16	1,645,877.0				24,885,142				1.512			



5	1.662.020.6	1.565.275.8	57.537.4	38.506.7	19.180.677	18.300.473	593.843	286.361	0.782	1.167	1.032	0.744
6	1.674.610.1	1.579.068.3	56.835.0	38.706.8	15.872.777	15.132.713	487.681	252.605	0.948	0.958	0.858	0.653
7	1.643.447.0	1.551.804.0	54.026.1	37.618.9	16.345.825	15.597.738	483.301	264.586	0.995	1.005	0.895	0.703
8	1.697.463.9	1.605.563.5	53.848.6	38.051.8	18.192.720	17.417.008	517.249	258.463	1.072	1.058	0.961	0.679
9	1.711.949.1	1.620.918.3	53.438.8	37.592.0	16.717.238	16.002.012	469.072	246.134	0.977	0.987	0.878	0.655
10	1.694.539.3	1.604.675.3	51.454.6	38.407.4	17.884.669	17.131.991	479.877	272.801	1.055	1.068	0.933	0.710
11	1.601.334.6	1.531.093.2	37.074.6	33.166.8	17.410.763	18.770.698	403.588	236.477	1.212	1.226	1.089	0.713

12	1.639.116.8	1.576.185.9	28.633.6	34.297.3	26.776.950	26.030.669	423.265	343.016	1.635	1.651	1.478	1.000
13	1.659.861.1	1.596.522.4	27.623.1	35.685.6	24.138.874	23.484.867	367.267	286.740	1.454	1.471	1.330	0.804
14	1.234.805.7	1.184.686.3	17.280.6	32.838.8	14.355.793	14.078.842	195.343	81.608	1.163	1.188	1.130	0.249
15	1.641.748.5	1.603.816.0	22.317.8	15.612.7	21.521.393	21.132.789	271.621	122.783	1.311	1.318	1.217	0.788
16	1.645.877.0				24.885.642				1.512			
17	1.213.405.0				15.687.578				1.293			
18	1.517.176.0				17.687.722				1.239			
19	1.323.060.0				18.718.740				1.259			
20					18.415.72							

第二節 主要食用烟作物

朝鮮に於ける烟の總面積は二百七十萬町歩で耕地面積の大割強に當り、農家の主要食糧である麥、豆其の他の雜穀を主として栽培してゐる。是等生産物に對しては從來より其の改良増産に努力が拂はれて來たのであるが其の生産は鮮内の需要を充たすに至らず、粟、小麥、雜穀等の輸移入は毎年三百萬石に達する情勢に在った。茲に於て<sup>總務</sup>本府は昭和六年度（一九三一年）以降十二箇年を期し、優良品

種の育成普及、耕種法の改善並に指導の徹底等の方途に依り烟作物の増産を圖り、之に依つて鮮内の食糧の充實、貿易の改善、農家經濟の安定に資せんとする烟作改良増殖計畫<sup>を</sup>樹立し實行に移したのであるが、其の計畫の大綱は左の通りである。

(一) 優良品種の育成並に普及

烟作物は廣汎に栽培せられ其の品種も多く中には優良なものも有るが、未だ農家の智識が幼稚で品種に對する觀念薄く異品種の混淆

が甚しい實情にあつた。然し從來農事試験所に於ては急を要する産米の品種に對する試験調査並に新品種の育成に主力を傾注して、作物に對する施設に付ては殆んど見るべきものがなかつたので、總督府は昭和六年（一九三一年）西郷支場の設備を擴張し麥、大豆及粟の優良品種に付基礎的育成を爲し、道に補助金を交付して各道農事試験場に原種圃を設置せしめ其の應用的増殖を爲さしむると共に、更に其の生産種子を道及郡農會に於て増殖

しえと一般農家に普及せしむることとした。  
 (二) 指導圃の設置  
 一般農家に畑作改良増殖の範を實地に示すと共に四隣に増収法の實際を周知宣傳する爲に畑作物主要栽培地方二百郡島に對して一箇面一ヶ所の割合で指導圃を毎年設置し之に對し三箇年間繼續して助成並に實地指導を行ひ附近農家をして之に倣はしめ以つて一般的改良増殖を圖ることとした。  
 (三) 畑作改良組合の設置



前述烟作改良指導團の設置せられた部落に  
 は必ず烟作改良組合を設置せしめ、組合長に  
 は其の部落の中心人物を推挙し指導團の指導  
 員を兼ねしめて、郡技術員と連絡の下に其の  
 指導監督に當らしめ、指導團の助成期間満了  
 後に於ても専ら組合を督勵し其の機能に依り  
 自發的に部落全体に亘り改良耕作法の實行を  
 期することとした。  
 (四) 専任指導技術員の配置  
 叙上の施設並に一般的指導に當らしむるた

又、農事試験場に専任職員を設置するの外道  
 に補助金を交付して各道農事試験場並に指導  
 團を設置する前述二百郡島に各一人宛の専任  
 技術員を設置することとした。  
 牛乳述べし施設に依り計畫實施を完了すべし  
 十二箇年後には現在生産高に比し大麥は四百  
 七十六萬石、小麥は百五十萬石、裸麥は二十  
 五萬石、大豆は百十一萬石、粟は二百九十五  
 萬石を増収する豫定であつた。  
 以上は食用烟作物に對する従來の施設の大

55



一 麥類

麥類は農家の食糧として最も重要なものであり、且つ小麥粉の輸移入は相當の額に上り、之を防遏する必要もあつたので、施政以來麥類の増殖に付ては總督府は種々なる努力を拂つて來たのである。其の要領を挙げると、  
(一) 作付段別の擴張  
麥の作付面積は施政當初に於ては田全面積の三割五分に過ぎず、又畝作としては僅に十萬町歩であつて、畝全面積の一割にも達せ

ざる状態であつたので、作付段別擴張の餘地を認めると同時に、殊に田地の分布の少ない南鮮地方に於ては、畝の二毛作として麥作擴張の必要を感じ、畝田兩方面に對し作付の擴張を奨励した。其の結果最近に於ては作付面積は施政當時に比し十八割の増加を示し、二毛作田は五十二萬九千町歩に達するに至つた。  
(二) 優良品種の普及  
農事試験場及道農事試験場に於て優良品種



を	選	定	し、	農	事	団	体、	篤	農	家	に	道	よ	り	補	助		
金	を	交	付	し	て	播	種	田	を	設	置	せ	し	め	之	を	増	殖
し、	依	つ	て	得	た	種	子	を	一	般	農	家	に	配	付	栽	培	
せ	し	む	る	外、	既	に	民	間	に	普	及	せ	る	優	良	品	種	と
在	來	種	と	の	種	子	交	換	を	奨	励	し	て	優	良	品	種	の
普	及	を	圖	つ	た	の	で	あ	る	が、	選	定	せ	ら	れ	た	優	
良	品	種	は	未	だ	其	の	数	少	く、	而	も	其	の	品	質	收	量
等	に	於	て	在	來	種	に	比	し、	一	水	稻	に	於	け	る	様	な
著	し	い	差	異	の	あ	る	も	の	が	少	い	の	で	其	の	普	及
成	績	は	未	だ	充	分	で	な	い。									

57

(三)	肥	料	の	増	施														
麥	作	に	は	比	較	的	多	量	の	肥	料	を	要	し、	従	つ	て		
麥	の	作	付	段	別	の	擴	張	に	は	先	づ	肥	料	の	準	備	が	
必	要	で	あ	り、	又	段	當	收	量	の	増	加	を	圖	る	に	も		
肥	料	の	増	施	が	第	一	要	件	と	あ	る。	然	し	當	初	に		
於	て	は	金	肥	の	使	用	は	農	家	の	實	情	に	適	し	な	か	
つ	た	の	で、	總	督	府	は	先	づ	自	給	肥	料	の	増	産	を	奨	
勵	し	肥	料	の	増	施	を	圖	つ	た	の	で	あ	る	が、	一	般		
農	家	の	肥	料	に	對	す	る	智	識	漸	次	向	上	し	麥	作	に	
對	す	る	硫	安、	過	燐	酸	石	灰	等	の	金	肥	施	用	の	有		

利	な	こ	と	と	認	識	す	る	に	至	り	今	日	に	於	て	は	是
等	肥	料	の	施	用	量	は	著	し	く	増	加	し	た				
(四)	病	虫	害	の	驅	除	豫	防										
麥	類	一	般	に	黒	穗	病	及	小	麥	胡	椒	病	の	被	害	が	甚
し	い	ろ	で	、	黒	穗	病	に	付	て	は	被	害	穗	の	拔	取	を
又	胡	椒	病	に	付	て	は	種	子	の	篩	選	を	奨	励	し	て	ゐ
る	が	未	だ	一	般	に	徹	底	的	實	行	を	見	る	に	至	つ	て
る	な	い																
(五)	乾	燥	調	製	の	改	良											
従	來	農	家	の	行	ひ	來	つ	た	乾	燥	調	製	の	方	法	は	極

め	て	粗	悪	で、其の調製品は到底商品たるに滴
し	な	か	つ	た。
依	つ	て	販賣に供せられたる麥類	
に	對	し	ては乾燥調製の改良を奨励すると共	
に	國	營	検査を施行し商品價値の向上を圖つ	
た。				
以	上	は	従來の施設の主要であつたが、麥類に	
付	て	は	昭和十七年（一九四二年）食糧政策の	
一	環	として昭和十七年（一九四二年）度以降		
五	ヶ	年を期し、作付面積の擴張、品種改良、		
耕	種	改善、肥料の増施、病害虫防除等に依り		

[illegible][illegible]



脊

明	作	付	校	別	收	積	高
日	数	大	小	麦	麦	数	麦
43	857.579.6	575.957.5	242.874.3	38.740.8	6207.623	4.746.936	1.205.772
44	910.807.4	618.269.9	255.435.3	43.102.2	7.366.024	5.650.853	1.408.187
1	935.173.6	622.392.0	267.422.2	45.357.4	7.735.129	5.856.917	1.565.724
2	1.006.001.5	664.016.7	294.660.7	47.324.1	8.875.285	6.717.362	1.809.621
3	1.034.246.2	687.670.2	297.807.0	48.684.0	8.079.218	6.120.741	1.639.207
4	1.075.608.9	717.530.9	307.803.0	50.275.0	8.828.651	6.793.528	1.690.681
5	1.107.388.1	737.743.8	315.870.7	51.773.6	8.610.650	6.537.867	1.720.907
6	1.144.007.7	758.158.3	332.447.8	53.401.6	9.108.775	6.931.255	1.788.015
7	1.191.777.7	790.850.9	344.380.1	56.748.7	10.078.581	7.728.112	1.933.326
8	1.203.783.3	802.518.0	346.870.2	54.375.1	9.302.316	7.270.220	1.670.820
9	1.232.487.7	824.079.0	355.379.2	53.011.5	9.860.843	7.366.800	2.145.641
10	1.272.652.7	807.434.7	357.370.0	52.828.0	10.179.690	7.615.500	2.170.525
11	1.232.284.2	816.301.9	362.178.6	52.803.8	9.232.172	6.819.733	2.057.209
12	1.224.502.6	813.145.0	356.257.0	55.178.6	8.057.436	6.030.717	1.679.872
13	1.227.783.4	812.418.1	360.895.2	54.470.1	9.700.014	7.168.000	2.133.460
14	1.245.082.1	828.266.7	361.937.4	54.877.8	10.419.602	7.815.878	2.172.196
15	1.256.547.3	835.287.0	365.403.7	56.154.6	9.591.332	7.082.126	2.123.626
26	1.251.667.4	837.213.7	366.026.6	56.426.7	9.077.983	6.218.005	2.187.523
3	1.267.020.6	844.606.2	365.419.4	56.775.0	8.746.123	6.572.276	2.178.266
4	1.293.318.4	873.238.6	356.673.7	6.338.3	9.387.605	7.211.636	2.252.16
5	1.318.050.0	873.931.7	346.077.7	7.803.8	9.964.037	7.517.748	2.163.151
6	1.316.866.7	900.342.8	333.279.4	8.224.7	10.207.232	7.812.127	2.229.482
7	1.321.654.7	898.503.8	323.759.4	9.938.5	10.617.158	8.023.756	2.228.287
8	1.335.618.4	888.820.8	322.216.8	12.458.8	10.370.744	7.585.304	2.222.387
9	1.353.783.7	887.953.7	325.613.0	140.217.0	11.116.743	7.773.767	2.837.781
10	1.366.327.5	876.843.1	326.543.4	162.943.0	12.311.276	8.751.963	2.932.817
11	1.405.982.7	861.352.7	333.533.3	205.334.7	12.462.0	10.404.782	6.813.676
12	1.450.507.3	856.877.3	341.053.1	237.416.7	13.160.2	14.680.101	7.775.330
13	1.476.091.7	840.856.4	345.009.6	275.764.7	14.240.8	11.760.108	7.417.278
14	1.491.073.4	830.014.5	350.517.8	277.022.2	13.507.7	13.137.588	7.570.488
15	1.527.732.4	807.762.7	347.576.0	323.425.0	21.168.5	12.505.463	6.883.162
16	921.546	322.905	331.882	27.814	6.529.832	1.670.520	3.324.4
17	737.557	327.905	390.094	23.386	3.131.544	1.514.355	2.062
18	753.706	310.707	374.755	31.941	8.418.804	4.319.119	1.509.531
19	790.188	230.070	348.893	48.118	7.644.756	1.909.180	3.102
20							

收 穫		高 (石)		一 段		步 收		穫 高 (石)	
總 數	大 麦	小 麦	裸 麦	一 麦	總 數	大 麦	小 麦	裸 麦	一 麦
6207.623	4746.936	1.205.992	254.715		0.724	0.824	0.499	0.657	
7.366.024	5.650.853	1.408.187	306.784		0.809	0.923	0.551	0.712	
7.735.129	5.856.919	1.565.924	312.286		0.827	0.941	0.598	0.663	
8.875.285	6.717.362	1.809.621	348.302		0.882	1.011	0.614	0.736	
3.079.218	6.120.741	1.629.807	279.266		0.783	0.886	0.549	0.615	
8.828.651	6.793.532	1.690.681	344.438		0.821	0.949	0.549	0.685	
8.610.650	6.537.867	1.770.907	301.876		0.776	0.884	0.561	0.583	
9.108.795	6.931.255	1.788.015	389.505		0.796	0.914	0.538	0.729	
10.078.581	7.728.119	1.933.326	417.136		0.846	0.977	0.561	0.744	
9.302.316	7.270.280	1.670.820	361.216		0.773	0.906	0.482	0.625	
9.860.843	7.366.820	2.145.641	348.402		0.800	0.894	0.604	0.657	
10.179.690	7.615.500	2.170.525	393.665		0.836	0.943	0.607	0.745	
9.232.172	6.819.733	2.057.409	357.030		0.749	0.835	0.569	0.676	
8.057.436	6.030.919	1.679.892	346.645		0.658	0.742	0.492	0.628	
9.700.014	7.168.000	2.133.460	398.554		0.790	0.882	0.591	0.731	
10.419.602	7.815.878	2.172.196	424.508		0.837	0.944	0.602	0.774	
9.591.322	7.082.126	2.123.626	385.570		0.763	0.848	0.581	0.687	
9.077.983	6.818.005	1.875.235	386.743		0.721	0.814	0.512	0.685	
8.746.123	6.572.276	1.782.266	391.581		0.690	0.778	0.488	0.627	
9.387.605	7.221.636	1.725.216	450.953		0.726	0.826	0.484	0.711	
9.964.039	7.567.748	1.863.151	532.940		0.689	0.847	0.538	0.683	
10.207.232	7.829.127	1.729.482	665.723		0.775	0.868	0.519	0.800	
10.619.158	8.003.956	1.778.289	837.113		0.803	0.892	0.549	0.842	
10.370.744	7.585.304	1.762.287	1.023.153		0.776	0.853	0.547	0.821	
11.116.943	7.793.969	1.837.781	1.285.193		0.821	0.900	0.564	0.917	
12.311.296	8.751.963	1.932.817	1.626.516		0.901	0.998	0.592	0.998	
10.404.782	6.813.696	1.605.235	1.962.778		0.740	0.791	0.481	0.754	
14.680.101	9.795.330	2.030.875	2.771.878		1.012	1.143	0.595	1.158	
11.760.108	7.417.298	2.062.488	2.995.668		0.797	0.882	0.598	0.797	
13.137.588	7.570.488	2.491.564	2.795.688		0.881	0.912	0.711	1.009	
12.505.463	6.823.162	2.078.236	3.441.714		0.817	0.852	0.598	0.974	
	6.529.833	1.670.520	3.324.640			0.905	0.517	1.002	
	3.131.544	1.514.355	3.062.262			0.696	0.462	0.785	
8.418.804	4.319.119	1.509.531	2.451.154			0.573	0.486	0.652	
7.664.756	1.909.180	3.102.019	223.512		0.970	0.578	0.889	0.483	
(7 麦)	(7 麦)	(7 麦)	(7 麦)		(7 麦)	(7 麦)	(7 麦)	(7 麦)	

## 二 大豆

大豆は朝鮮の風土に好適し且つ其の栽培は他の作物に比し肥料を要すること極めて少く、又比較的粗放な栽培法に依るも尚相當の收穫を得られるので、~~栽培~~當時各種の作物が悉く日本の生産状態に比し著しい遜色が有つたに拘らず、獨り大豆は其の品質及收量に於て日本と大なる径庭なく却つて地方に依りては日本産を凌駕する優~~良~~品を生産してゐた。其の當時の生産額は三百萬石、輸移出額は六十萬

石内外であつたが、乾燥調製の不良、異品種の混淆等の爲朝鮮大豆固有の特色を發揮することが出来ず、而も包装不完全の爲荷傷を生じ取引上故障頻出の情態であつた。朝鮮大豆は粒形色澤共に優秀で蛋白質に富み最も食用に適し、殊に日本に於ては豆腐製造、味噌醬油醸造用として愛好せられ其の聲價は常に満州大豆の上に在つた。而も日本に於ける大豆の供給不足は年々累増する状況に在つたので、朝鮮大豆の増殖は多々益々辦



ると謂つても不可なく、總督府に於ても生産の増加に力を拂ふと共に、上述の欠点を除去せんとして左の施設を講じた。

(一) 優良品種の普及

大休麥と同様の方法に依つて優良品種の普及に努めつつあるが、優良品種の選出が困難である外既に選出された優良品種は其の特性が著しくないので現在の所其の普及成績は良好でない。

(二) 種子の粒選

播下しする種子中に異品種が混在する為收穫物には依然異品種を混淆し、且つ其の収量を減少して栽培上尠からざる不利があり、而も販賣の際價格が低下するので、在來品種中優良と認められるものに付種子の粒選を必行せしむることとし、其の實行に付ては講習講話會の開催、粒選品の異検、技術員の巡回督勵等の方法が採られた。而して粒選に付ては從來より之に類する慣習の存する地方もあり比較的解も容易であつた。

大豆は輸移出中米に次で重要であるが従来	(四)大豆検査	を一新し相當の成績を挙げこめる。	給機関に依る買収制度の實施に伴ひ稍面目	る状態であつた。然し最近に於ては食糧配	般に徹底せず大部分は商人に依つて行はれ	來つたのであるが、農家に於ける實行は一	大体米の乾燥調製改良に準じて之を奨勵し	(三)乾燥調製の改良	ので其の成績は相當良好である。
---------------------	---------	------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	------------	-----------------

に依り昭和二十五年（一九五〇年）完成年度	七ヶ年を期し優良品種の普及、耕種法改善等	八年（一九四三年）度以降	以上は従來の施設の大要であるが、昭和十	なつた。	に準じた方法に依り検査を實施すること	で、大正六年（一九一七年）より米穀検査	を失墜すること少からうとするものがあつたの	良、夾雜物の混入等に付、 <del>検査</del> 難の聲あり、聲價	日本市場に於て其の乾燥、調製及包装の不
----------------------	----------------------	--------------	---------------------	------	--------------------	---------------------	-----------------------	-------------------------------------	---------------------

[illegible]

に於て十九萬三千六百町歩の優良品種の普及を圖り十九萬三千六百石の增收を圖らんとする計畫が樹立され、計畫に従ひ昭和十八年（一九四三年）度には原種田三十二町歩第一次採種田三百八十七町歩が設置された。

尚最近に於ける大豆の生産額は左の通りである。



養正

大正	作付及別			作付及別			作付及別			作付及別		
	收積高	一歩	一歩	收積高	一歩	一歩	收積高	一歩	一歩	收積高	一歩	一歩
明	(町)	(区)	(市)	(町)	(区)	(市)	(町)	(区)	(市)	(町)	(区)	(市)
43	707.5560	3635.684	488.0520	2746.358	0563	217.5040	887.326	0405	-	-	-	-
44	794.1163	4.210.883	547.7451	3.155.279	0.576	233.5034	1.004.864	0.430	-	-	-	-
1	844.3498	4.732.994	589.5403	3.566.662	0.605	231.1931	1.084.946	0.467	-	-	-	-
2	909.1235	4.824.990	635.5633	3.603.014	0.567	247.1110	1.121.996	0.454	-	-	-	-
3	950.7216	4.891.953	665.0522	3.623.727	0.545	255.7634	1.152.609	0.450	-	-	-	-
4	1.007.0727	5.224.478	710.2278	4.016.588	0.566	257.2007	1.072.791	0.414	25.385.0	86.890	0.342	-
5	1.007.687.8	5.536.935	708.427.6	4.225.717	0.596	256.8581	1.142.923	0.445	27.153.4	96.368	0.355	-
6	1.052.557.7	5.690.134	737.460.9	4.309.676	0.584	264.2512	1.172.620	0.446	30.564.4	107.368	0.351	-
7	1.078.322.55	6.521.081	758.553.0	4.868.321	0.655	267.3382	1.323.330	0.469	32.172.3	131.882	0.410	-
8	1.077.332.6	2.891.267	758.553.0	3.280.631	0.432	257.7437	4.60.368	0.177	31.315.7	59.644	0.190	-
9	1.087.617.5	6.254.629	771.053.0	4.771.177	0.621	257.7437	1.313.947	0.467	32.315.5	134.961	0.405	-
10	1.108.460.2	5.771.203	789.027.2	4.677.288	0.593	262.6220	1.074.418	0.409	32.928.5	127.636	0.376	-
11	1.114.654.2	5.636.277	776.104.7	4.515.836	0.567	261.3172	703.647	0.346	34.202.9	112.763	0.330	-
12	1.125.859.8	5.854.700	805.877.7	4.644.467	0.576	261.930.3	788.140	0.377	35.542.7	122.600	0.345	-
13	1.113.868.0	4.450.960	798.828.7	3.657.623	0.458	257.3937	635.907	0.247	35.792.4	88.285	0.249	-
14	1.116.176.8	5.803.048	803.495.1	4.612.033	0.574	253.2335	968.042	0.282	37.652.3	126.240	0.335	-
1	1.107.754.8	5.568.868	791.535.9	4.351.537	0.550	255.685.8	986.001	0.386	32.073.2	131.210	0.336	-
2	1.103.834.7	6.017.869	793.628.8	4.747.706	0.578	251.289.6	1,038.010	0.413	32.953.5	137.156	0.357	-
3	1.107.134.4	4.769.097	800.623.3	3.810.641	0.476	244.661.63	763.656	0.310	37.708.9	108.960	0.274	-
4	1.098.010.2	5.013.632	793.027.3	3.790.965	0.503	243.005.4	807.896	0.333	42.141.5	118.433	0.281	-
5	1.096.284.5	5.627.994	792.973.7	4.470.048	0.566	241.1141	878.590	0.373	41.617.8	131.874	0.317	-
6	1.092.016.5	5.212.070	792.683.3	4.131.795	0.521	237.205.6	862.726	0.361	40.126.9	124.725	0.311	-
7	1.103.658.5	5.525.035	809.971.8	4.409.677	0.544	233.7174	877.236	0.375	37.741.2	130.280	0.328	-
8	1.074.884.8	5.707.234	803.851.1	4.555.517	0.566	232.770.8	914.564	0.373	38.891.1	130.694	0.336	-
9	1.087.487.1	4.929.832	775.041.8	3.812.377	0.480	233.373.9	873.367	0.374	38.822.6	132.623	0.341	-
10	1.085.617.7	5.576.765	771.857.5	4.375.278	0.553	234.480.1	734.127	0.398	38.415.2	133.770	0.348	-
11	1.074.522.8	4.768.916	787.437.1	3.784.215	0.481	230.230.4	757.072	0.330	37.476.6	105.389	0.281	-
12	1.069.466.4	5.412.111	785.416.8	4.262.188	0.543	227.022.3	889.651	0.393	32.525.4	130.917	0.349	-
13	1.049.178.4	4.977.832	766.787.4	3.867.835	0.504	224.434.3	775.075	0.354	37.846.8	123.860	0.327	-
14	1.015.824.7	2.911.505	737.815.8	2.332.782	0.316	222.137.7	417.431	0.187	36.356.1	67.297	0.191	-
15	909.361.2	4.214.719	665.477.6	3.266.107	0.491	202.577.2	770.332	0.284	25.178.8	81.005	0.222	-
16												-
17												-

[illegible]

三 雜穀									
朝鮮に於て栽培せられる雜穀は粟、稗、黍、	蜀黍、玉蜀黍、燕麥、及蕎麥であるが就中	粟が最も重要である。	(一) 粟	粟作は西北鮮地方の主要作物で古來相當重	要視せられ、作付面積は米麥に次ぎ其の耕	種方法も他の作物に比し稍進歩し能く朝鮮	の風土に適應してゐた様に見受けられる。	然し品種の選定、施肥、病虫害の驅除豫防	

等に付ては甚しい欠失があり、爲に反當收	量は著しく少く僅かに六、七斗であつて日	本の収量の半に過ぎず、其の生産高は五百	餘萬石に達するも尚鮮内の需要を充たすに	足らず彼の大正八年（一九一九年）の凶作	に際しては支那より精粟百五十萬石の輸入	を爲した状態である。之は西北鮮に於ては	粟は主要食糧品であつて地方民は米麥より	も寧ろ粟を常食と爲してゐるからである。	然るに近年に至り南鮮地方に於ては産米を
---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------



有利に販賣して粟を代用食とする者が増加し、年と共に粟の輸入の増加する傾向がある、ので積極的に粟の生産増加を圖つて農家の食糧を充實する必要が生じた。然し粟作の面積を遽に擴張することは困難なので従来より米、麦、大豆に對する改良増殖施設と略同様の手段に依り品種の改良、肥料の増施、病虫害の驅除豫防等に力を致し反當收量の増加に主として努力を拂つて來たのであるが、昭和四年度（一九二九年）より粟

作地帯各郡に専任指導員を置き模範作圖を設置し、更に昭和六年度（一九三一年）以降は前述畑作改良増殖計畫の實施に伴ひ施設を一層充實して之が増産奨励に力を致すこととなつた。次いで昭和十六年（一九四一年）には昭和十六年度（一九四一年）以降五年を期し耕種法改善、病虫害防除等に依り昭和二十年（一九四五年）完成年度に於て五十七萬六千石の増收を圖り總收穫高五百五十六萬石を確保せんとする計畫が

[illegible]

實<sub>ニ</sub>行<sub>ハ</sub>れたのであるが、肥料、勞力等の不  
足に加へて天候にも恵まれず本計畫は良好  
な成績を挙げ得なかつた。  
尚最近に於ける生産高を示せば左の通りあ  
る。

雜穀

期別	粟		稗		黍		蜀黍	
	作付反別 (町)	收穫高 (石)	一作歩 收穫高 (石)	作付反別 (町)	收穫高 (石)	一作歩 收穫高 (石)	作付反別 (町)	收穫高 (石)
43年	538.1675	3346600	0.622	123.7014	841.322	0.680	16.7914	78.755
44	584.1889	3632614	0.621	111.5573	707.536	0.814	16.3772	101.364
大正	1	565.0235	3812782	0.675	114.1142	787.001	0.865	16.6503
2	641.3083	4576104	0.714	109.4438	755.183	0.871	14.6230	102.071
3	650.6143	4024723	0.619	107.4478	875.095	0.783	14.4602	86.402
4	679.6029	4383563	0.645	113.9077	951.360	0.835	15.0341	70.268
5	692.7652	4820720	0.696	113.2084	1000.854	0.884	14.9816	73.782
6	746.4963	5182218	0.694	113.3755	753.314	0.841	15.1305	70.572
7	758.2334	5662793	0.747	114.4333	1042.590	0.711	14.7282	100.537
8	780.6325	3816272	0.489	118.4567	654.164	0.553	16.5140	76.336
9	773.4066	6036452	0.781	121.4298	1073.335	0.884	17.2032	117.123
10	777.9378	5862685	0.753	122.5107	1073.612	0.876	17.0563	111.780
11	785.7853	5138106	0.654	115.7791	882.777	0.761	16.7351	113.376
12	779.9321	5298153	0.679	114.6917	912.715	0.796	17.0674	102.988
13	774.2832	5077657	0.656	109.3814	808.754	0.740	17.1527	78.044
14	789.1360	4756742	0.603	103.5380	786.610	0.760	16.8754	77.247
昭和	1	787.8514	4777020	0.605	77.5782	734.015	0.737	17.017.3
2	773.6763	4974278	0.629	77.7108	722.237	0.737	16.7452	76.632
3	810.2267	5233186	0.646	74.2116	671.674	0.713	18.1303	75.365
4	771.1747	5244271	0.663	70.1636	668.475	0.741	16.6821	71.946
5	770.8146	5573256	0.705	85.8557	657.764	0.768	16.4740	77.233
6	771.1355	4590364	0.580	82.5368	513.162	0.622	16.0750	83.535
7	806.6647	5537381	0.687	77.2964	528.479	0.684	15.7853	88.792
8	777.2383	5145301	0.645	73.7457	506.489	0.687	14.2495	86.851
9	771.6061	3771730	0.476	77.8275	406.746	0.523	14.6730	64.567
10	774.4224	4860747	0.612	72.1642	457.358	0.637	14.7278	71.377
11	788.5555	5065096	0.642	68.0546	494.476	0.727	14.5963	74.084
12	777.3432	5840688	0.747	65.4067	514.863	0.787	14.1474	80.523
13	761.0775	5237415	0.688	57.7126	396.747	0.664	13.2771	67.273
14	850.4173	5027171	0.591	57.8253	340.821	0.620	18.3064	87.007
15	682.1934	4260858	0.625	47.6470	310.195	0.651	8.4042	37.718



黍		王		燕		燕		燕	
黍	一返步 收穫高 (石)	作付反別 (町)	收穫高 (石)	黍	一返步 收穫高 (石)	作付反別 (町)	收穫高 (石)	燕	一返步 收穫高 (石)
98.755	0.581	644.833	400.956	0.622	65.8560	420.978	0.639	2274.82	187.373
001.364	0.619	722.455	522.734	0.668	67.7575	400.275	0.591	5644.82	380.866
042.87	0.626	25.881.4	393.256	0.782	67.9316	441.986	0.632	5381.22	338.175
02071	0.630	85.920.0	658.972	0.767	68.789.4	480.863	0.699	67.657.7	574.077
026402	0.598	87.189.1	607.578	0.683	74.814.1	492.669	0.657	67.895.7	582.220
0268	0.601	87.808.4	625.757	0.727	77.417.3	495.309	0.640	82.101.7	702.323
03982	0.627	87.123.7	710.209	0.797	77.676.5	575.352	0.722	87.987.9	760.735
0572	0.645	92.3388.7	764.344	0.827	83.160.4	584.643	0.703	88.574.3	705.273
0537	0.672	93.538.4	793.631	0.848	84.187.9	614.303	0.730	67.174.4	924.028
06336	0.662	97.312.7	537.646	0.553	89.415.0	371.126	0.437	7.6333.4	405.074
7123	0.681	98.372.8	835.823	0.850	91.187.7	626.135	0.687	73.621.7	817.335
1.780	0.655	100.357.4	822.248	0.824	91.695.0	620.847	0.677	107.224.1	983.480
3.396	0.674	77.208.7	705.951	0.726	92.592.3	561.684	0.607	11.104.15	746.587
2988	0.603	77.845.0	705.802	0.721	94.584.7	543.011	0.574	117.312.0	814.947
8044	0.572	97.037.5	683.074	0.690	73.445.7	457.613	0.498	116.890.6	783.144
7.247	0.588	98.081.8	705.985	0.720	78.366.5	551.744	0.561	107.172.3	661.774

5551	0.561	77.714.7	677.901	0.674	102.294.2	547.835	0.546	112.908.3	791.871
6.032	0.573	76.789.6	682.144	0.705	102.533.8	552.296	0.537	111.169.0	770.087
5.365	0.526	76.622.2	678.677	0.702	104.001.3	617.470	0.574	108.111.8	748.489
1946	0.551	75.225.8	672.041	0.708	106.326.6	626.430	0.587	110.242.4	805.496
233	0.570	73.573.0	678.672	0.725	107.956.1	655.747	0.607	110.231.8	775.076
3.535	0.520	90.767.6	581.011	0.640	108.102.6	608.060	0.557	124.573.5	746.762
8.792	0.562	87.733.7	616.858	0.702	110.073.7	664.047	0.603	118.121.2	895.555
6.851	0.570	86.422.9	607.374	0.705	112.727.6	682.274	0.605	119.147.4	485.272
4.569	0.440	84.772.5	491.402	0.580	112.622.2	516.233	0.437	117.377.6	452.650
1.377	0.485	82.465.5	557.312	0.676	119.242.3	715.280	0.600	117.177.2	418.520
4.084	0.508	78.720.4	564.105	0.717	128.787.3	854.836	0.664	106.171.4	514.946
0.523	0.569	80.006.1	597.495	0.747	136.730.1	904.791	0.662	87.968.8	566.679
7.273	0.522	76.638.3	536.582	0.700	137.573.1	751.255	0.538	81.221.6	503.296
7.009	0.475	75.845.2	415.271	0.548	148.686.2	641.356	0.431	71.032.1	295.373
2.918	0.475	67.600.5	407.453	0.706	166.798.2	811.664	0.486	55.601.5	240.324



獲 品 種 の 普 及 ・ 健 苗 の 増 産 ・ 栽 培 法 等 の 改	改 さ れ ・ 昭 和 十 九 年 度 以 降 三 ヶ 年 間 に 多 收	す る こ と と な っ た の で 本 計 畫 は 更 に 擴 充 更	れ た の で あ る ・ 所 が 食 糧 の 増 産 が 愈 急 を 要	五 ヶ 年 を 期 間 と す る 増 産 計 畫 が 樹 立 實 施 さ	と と な り 昭 和 十 四 年 一 九 三 九 年 一 度 以 降	が 激 増 し た の で ・ 之 が 積 極 的 増 産 を 圖 る こ	種 々 の 工 業 原 料 と し て 甘 藷 に 對 す る 需 要	る 増 産 の 必 要 が 生 じ た の と ・ 酒 精 ・ 澱 粉 等	來 た の で あ る ・ 然 る 事 變 後 食 糧 の 急 速 な
---------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------



[illegible]

善に依る反富收量の増加並に休閑地の利用	作付方式の改善、種蒔の確保に重実的指導を	加へ、計畫完成年度たる昭和二十一年（一	九四六年）に於て作付面積四萬町歩、收穫	高に於て一億三千七百萬貫を増加し、目標	作付面積十萬町歩、生産目標二億五千萬貫	を確保せんとする方針の下に一層積極的増	産和圖られた。	尚最近に於ける甘藷の生産高は左の通り	ある。
---------------------	----------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------------------	---------	--------------------	-----

年次	諸			
	作付反別	收穫高	一段高 收穫高	價 額
昭和 8 年	18,940.1	43,285.493	228	5,770.762
9	21,764.8	44,367.395	204	6,129.910
10	24,590.5	56,543.042	230	8,464.222
11	26,711.6	59,117.521	199	8,249.538
12	28,420.3	66,906.167	235	9,462.909
13	33,304.2	82,253.464	247	11,984.583
14	39,154.3	73,019.372	186	15,101.865
15	44,818.4	85,936.280	192	24,255.591
16	57,205.9	107,328.359	187	30,361.444
17	52,612.9	62,499.425	119	18,655.518

## 二馬鈴薯

馬鈴薯は從來全鮮各地に於て栽培せられ殊に北鮮地方に比較的普及してゐた。馬鈴薯も甘藷と同様單位面積當食糧價值が高いので、農家の食糧充實を圖るため從來より主として中部以北冷涼な地方に甘藷と同様な方法に依つて其の増産を奨励し來つたのであるが、中南鮮及西北鮮平地帯に於ては馬鈴薯の退化現象が著しく漸次収量を減ずるので、年々日本より種薯を移入して種子更新

新を行つてゐた。然るに戦後に於ては日本よりの種薯の移入が困難となつたので、昭和十八年（一九四三年）度以降西北鮮の高地帯に毎年一千五十町歩の採種圃を設置し、二百十萬貫の無病・無傷・健全なる種薯を生産し之に依り馬鈴薯の種子更新を行ひ、退化による減収を防止すると共に種薯の自給自足を圖り馬鈴薯の増産を期することとなつた。次いで昭和十九年（一九四四年）度以降三年を期し採種事業の擴大強化、



作付面積の増加 耕種法改善等総合的増

産方法を講じ、昭和二十一年（一九四六年

）完成年次に於て作付面積三萬町歩、收穫

高一億五千三百萬貫を増加し目標作付面積

十七萬町歩、目標生産高三億四千萬貫を確

保せんとする計畫が實施された。

### 第三節 棉

棉花は衣本として生活上の必需品であり、又紡績工業は日本工業の基礎を爲す重要産業であるに拘らず、其の原料たる棉花は日本に於ては殆んど生産されず、年々数億圓の原棉を米國、印度及支那等より輸入しつゝ、ある状態で經濟上の不利は寔に少くないものがある。所が朝鮮は日本の領土中唯一の棉作有望地であつたので、朝鮮の斯業は漸く世人の矚目する所となつた。

朝鮮には古來棉花栽培の素地があり、施政前に於て既に作付反別四萬町歩に達してゐたが、在來棉は品質、繰糸歩合共に良好でなく、收量も亦少いといふ欠点があつた。然る所南鮮地方は米國種陸地棉（キングスインポール）の栽培に適することゝが認められるに至り、其の栽培の普及を積極的に圖ることとなり、左の如き施設が實施された。

(一) 試作時代

朝鮮に於ける米國種陸地棉の栽培は韓國政

(全部)  
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

府に對する棉花栽培協會の建議により始まる。  
即ち韓國政府は其の建議を容れ明治三十九  
年（一九〇六年）より同四十一年（一九〇八  
年）に至る三箇年間に十萬圓を支出し全羅南  
道に棉採種圃を置き、且つ繰棉工場を設けて  
收穫物から得た棉種子を一般に配付すること  
とした。次いで明治四十一年（一九〇八年）  
臨時棉花栽培所を設置し、棉花栽培事業の全部  
を舉げて政府の直營に移し、從來の施設擴充  
の外模範作圃の設置、在來棉との比較栽培

棉作組合の設置、優良小作人及功勞者の表彰  
等種々の施設を講じ陸地棉の栽培を奨励した  
結果、最も力を傾注した全羅南道に於ては一  
般農民克く陸地棉栽培の有利なことを會得す  
ると共に作付面積も累次擴張せられ、明治四  
十四年（一九一一年）には既に全鮮に於て裁  
培人員四萬三千人、其の作付面積三千町歩、實  
棉の收穫高二百七十萬斤を算するに至った。  
(二)第一期擴張時代  
陸地棉栽培開始以來六箇年の經驗成績に鑑



又	南	鮮	六	道	は	陸	地	棉	の	栽	培	に	適	す	る	こ	と	が
認	め	ら	れ	た	の	で		茲	に	棉	作	擴	張	計	畫	を	樹	て
大	正	元	年	(	一	九	一	二	年	)	よ	り	六	ヶ	年	を	期	し
裁	培	面	積	を	十	萬	町	步	に	擴	張	す	る	目	標	の	下	に
左	の	施	設	を	行	つ	た											
(イ)	技	術	員	の	配	置												
道	及	主	要	な	る	郡	に	棉	作	に	經	驗	あ	る	技	手	を	
配	置	し	裁	培	の	指	導	に	従	事	さ	せ	た					
(ニ)	棉	作	組	合	の	改	善	及	其	の	増	設						
棉	作	獎	勵	の	初	期	に	當	り	既	に	棉	作	組	合	を	組	

織	せ	し	め	た	の	で	あ	る	が		之	を	増	設	し	必	要
に	應	じ	補	助	金	を	交	付	し	又	農	工	業	銀	行	よ	り
低	利	の	資	金	を	融	通	せ	し	め	組	合	員	の	生	産	
に	係	る	棉	花	は	組	合	の	手	に	依	つ	て	共	同	販	賣
に	付	せ	し	め	て	棉	花	賣	買	に	伴	ふ	従	來	の	弊	害
の	除	去	に	努	め	し	む	る	と	共	に	純	良	種	子	の	保
存	及	在	來	種	子	混	合	の	防	止	に	意	を	拂	は	し	め
た																	
(ハ)	種	子	の	配	付												
棉	作	擴	張	計	畫	の	樹	立	と	共	に	今	後	新	規	擴	張

に要する種子は無償配付を行ふこととし  
一般栽培者に對し自家採種を奨励した。  
(二)棉花の共同販賣  
全羅南道の棉花栽培の盛んな地方に於て  
は棉花の賣買又は其の仲介を爲す者が族  
出し、是等商人中には在來棉を故意に陸  
地棉に混入し又は棉花に水氣又は土砂を  
撒布し若は不正衡器を使用する等不正  
手段を行ふ者續出し、延いては所要の陸地  
棉純良種子を得ることを困難ならしめた

ので、一面此の弊害を防止し一面農民の  
利益を保護する爲道知事の指導監督の下  
に、棉作組合は所謂指定販賣を行ふこと  
になつた。  
指定販賣の方法は綿綿工場を有する會社  
又は商店を買受人に指定し、棉作組合が  
直接に之を販賣する方法であつて其の價  
格は大阪の綿綿相場を基礎として算出し、  
一定の日時及場所を定めて組合員の生  
産品を持寄りしめ棉花技術員が其の等級

を査定して買収取引を行ふのである。然し指定販賣法は生産額の増加、経済事情の變化等に依り、買受人に於ても農民に於ても不測の不利益あるを免れないので、之を競争入札法に依る共同販賣に改めた道もあった。

### (ホ) 種子更新

純良な陸地棉種子も栽培年度を経るに従ひ劣變退化を免れないので、種子更新の必要を認め米國より年々種子を輸入して

26

農事試験場木浦棉作支場に於て育成し、

之を道に配付し郡採種園及面採種園に於て栽培増殖せしめ、次いで一般農家に配付

して種子の退化を防止することとした。

紋上の施設に基き總督府は極力棉作の奨励に努めたので、大体豫期の成績を挙げ本計

畫着年後七年にして作付反別九萬四千町歩、

其の收穫高六千萬斤を得るに至つた。

### (三) 第二期擴張時代

第一期擴張計畫は大体豫期の成果を挙げた



が、有利に棉を栽培し得べき土地の尙相當あり且つ日本市場に於て取扱はれる朝鮮棉の量が少きに失して其の品位相當の聲價を發揮するに至つてゐないので、今後一層生産額を増加するの必要を認め、大正八年（一九一九年）より十箇年を期し、南鮮六道には主として陸地棉を、京畿道及西鮮三道には在來棉の栽培を奨励し、作付反別に於て陸地棉十萬町歩、在來棉三萬五千町歩を増加し、既往の擴張面積と合せて總面積二十五萬町

歩に達せしめ同時に栽培法の改良を圖つて其の生産棉花を二億五千萬斤（實棉量）に達せしむる計畫を樹立し、生産棉花の半量（は朝鮮内に於ける紡績原料其の他の用途に充當して朝鮮に於ける棉花の自給自足を圖り、残りの半量は日本に移出し日本綿業界の期待せる十萬俵以上の供給を爲し、以つて紡績原料需要の一部に充てんことを期した。右第二期計畫に依る施設事項は概ね第一期計畫の踏襲であつたが之に追加された事

項も相當あつた。今是等を述ぶると

(イ)開墾及地目變換補助

林野未墾地を開墾して棉作地に供し、又

は灌漑が不充分で連年旱魃を免れない

を變換して田と爲し、棉作を爲さしむるこ

とを奨勵し其の所要種子代を交付するこ

ととした。

(ロ)在來棉の改良擴張

陸地棉は忠清南北、全羅南北、慶尚南北

の六道に適應することゝ大體確認した。

No.

であるが、尙是等六道中山地帯に屬する

地方には之に適せざる所もあり、是等地方

には寧ろ在來棉を奨勵するを適當とすべ

く、又京畿、黄海、平南、平北の四道は

從來より在來棉の好適地と認められてゐ

るので、其の中、古來棉作の素地ある地域

にして生産品搬出の便のある数箇郡を選

定し在來棉の改良擴張を圖ることとなつ

た。之が奨勵施設は大體陸地棉に準じて

行はれた。

No.

No.

(二) 指導里洞設置

(ハ) 栽培法改良及反富收量増加  
種子更新計畫を充實して農民の栽培材  
種子の優良性を維持せしめ、之と共に肥  
料の共同購入を斡旋して施肥量を増加し、  
其の他各般の栽培法の改良を指導奨励し  
て、大に反富收量の増加を計り十年後に  
於ては陸地棉を平均百五斤に、在來棉を  
平均九十五斤に達せしめんことを企圖し  
た。

No.

大正十一年度へ一九二二年より集約裁  
培法の徹底的普及を期せんとし、棉作  
の集團せる里洞を劃して指導里洞と爲し  
之に専任指導員を配置して其の手當を補  
助するの外、栽培者には反富二圓の肥料  
代を補助して特に周到な指導を加へ、模範  
的棉作里洞たるに至れば更に他の里洞と  
選定して同一方法に依り指導里洞と爲す  
こととし、大正十一年（一九二二年）度  
に於ては五十箇所、大正十二年（一九二



三年）度に於ては百五十箇所、昭和三年（一九二八年）度に於ては二百五十箇所  
の指導里洞を設置した。

#### (四)新規増産計画

第二期計画は昭和三年（一九二八年）を以  
つて終了したが、其の成績を見るに作付反別  
收穫高共に計画當時に比すれば著しく増  
加したが尚既定計画には達しなかつた。

昭和四年（一九二九年）度以降に於ては既  
往の実績に鑑み作付反別の積極的擴張は之

No.

を中止し、専ら集約栽培を奨励反實収量の  
増加を圖り、之に依つて棉花栽培の健全な發  
達を期することとした。

然るに當時經濟界の不況は農家經濟を益々  
窮乏に陥れ、又國際情勢も棉花の増産を必要  
ならしめたので昭和八年（一九三三年）新  
規の棉花増産計画を樹立し、更に昭和九年  
（一九三四年）其の擴充を行つて一層積極  
的に棉花の増産を圖り農家經濟を向上せし  
むると共に、日本の棉花自給に資し併せて國

借債

借債の改善を期することとした。

本計畫は昭和八年（一九三三年）度以降十

箇年を期し、南鮮六道及京畿、黄海、平南、

平北、江原の十一道を奨励區域とし、作付

反別三十五萬町歩、實棉生産高四億二千萬

斤に達せしめんとするものである。本計畫

に伴ふ主な施設事項を挙げると

(1) 本府農事試験場の職員を増置

品種改良及原種圃經營並に試験調査のた

め、陸地棉を主とする木浦棉作支場を擴

No.

81

No.

新設し必要な職員を設置した。

(四) 産業技師の設置

前記棉作奨励道に對し各産業技師一名を

設置せしめ、之が設置費に對し國庫より

補助金を交付することとした。

(ハ) 道在勤産業技師の設置

棉作奨励道中六箇道は既に棉作技師を設

置してゐるので、殘餘の五箇道に對し産

業技師一名宛設置せしめ、之が設置費を國

庫より補助することとした。

(二) 郡駐在産業技手の設置

棉作奨励郡百六十五郡に對し新に産業技手一名宛設置せしめ、之が經費を國庫より補助することとした。

(ホ) 指導郡の設置

集約栽培法の徹底と多角形的營農方法の指導を周到ならしむるため、郡を單位として指導郡を設定し、三箇年間之に特別濃厚な指導奨励を加へることとし、其の施

No.

92

No.

設費として一郡當四千三百圓宛を國庫より三ヶ年間繼續して補助することとした。

尚各年に於ける指導郡数は棉作奨励郡

百六十五郡の三分の一とし、四年目毎に

之を他郡に移動して九箇年間に全部を一

巡する計畫である。

(ハ) 指導郡移動後の郡に對する施設

指導郡としての特別濃厚指導を終った郡

に對しては三ヶ年間の指導の結果を確保

する爲大體従前の施設を繼續實施せしむ



ることとし、其の施設費として毎年一百万  
圓千圓宛を補助することとした。

(五) 第二期増産計画

昭和八年（一九三三年）に樹立された棉花  
増産計画は、昭和十七年（一九四二年）度と  
以つて終了したのであるが、其の実績を見  
ると栽培面積は略計画目標に達したが、收穫  
高に在つては計画目標の半にも達しない状  
況であつた。而も戦局の進展に伴ひ棉花資  
源の重要性は益々加重せられ、其の情勢に在つ

たので、昭和十八年（一九四三年）度以降  
十年を期し引續き第二期計画が實施され

ることとなつた。而して本計画は食糧事情  
の逼迫せる状況を考慮し、作付面積の積極  
的擴張は行はず、寧ろ反當収量の増進を圖り  
總収量の増加を期する方針の下に、前述棉  
花増産計画の目標を踏襲して實施された。  
尙最近に於ける棉花生産高を察せば左の通  
である。

棉

明治 43年	陸		土地		棉		在		未		棉	
	作件反別 (町)	収	穫	高	一 収	穫	作件反別 (町)	収	穫	高	一 収	穫
43年	1.268.1		668.151		53		58.892.0		20.410.685		35	
44	3.042.9		2.737.050		90		58.713.2		23.970.126		41	
大正	7.313.4		7.216.133		99		57.852.9		27.345.803		49	
1	15.822.4		13.448.898		85		56.187.8		26.023.763		46	
2	23.964.5		17.470.452		73		51.017.5		22.001.015		43	
3	34.715		28.668.371		83		43.705.1		19.118.228		44	
4	54.17.1		31.331.414		58		36.942.6		16.237.464		44	
5	72.174.5		54.553.665		76		36.301.3		17.701.476		49	
6	94.321.2		60.680.920		64		36.077.6		17.233.540		48	
7	109.236.2		86.024.602		79		36.300.9		11.334.375		31	
8	106.767.4		88.461.396		83		37.707.0		26.256.211		66	
9	104.740.7		67.857.572		68		42.796.8		22.582.550		52	
10	104.025.5		88.778.383		85		47.056.8		29.727.730		64	
11	109.660.0		96.826.736		88		47.817.3		30.771.272		63	
12	117.526.2		106.926.927		91		52.911.5		30.928.208		68	
13	138.843.7		101.225.045		73		59.023.8		38.957.337		66	

昭和 43年	陸		土地		棉		在		未		棉	
	作件反別 (町)	収	穫	高	一 収	穫	作件反別 (町)	収	穫	高	一 収	穫
1	150.726.6		118.264.570		78		65.183.3		43.819.705		67	
2	132.964.1		107.717.711		78		67.115.4		44.315.403		66	
3	137.663.1		121.771.181		83		67.714.2		47.095.778		73	
4	123.894.7		113.522.481		72		62.325.4		44.716.099		72	
5	132.458.8		127.327.208		76		60.414.9		41.441.572		69	
6	131.108.9		78.721.846		60		61.436.5		37.191.440		61	
7	100.332.0		111.909.164		112		58.937.6		42.368.573		72	
8	117.320.8		114.313.478		97		58.822.0		45.102.096		76	
9	133.367.4		120.077.388		91		60.147.4		34.261.185		57	
10	147.643.7		167.948.818		125		61.724.2		43.800.149		71	
11	164.235.5		89.392.474		54		61.364.2		47.982.738		75	
12	175.057.7		200.420.292		114		64.351.0		39.862.172		83	
13	188.950.5		180.083.198		95		66.611.2		30.287.028		65	
14	222.230.6		191.462.497		86		66.612.2		18.873.627		61	
15	279.174.4		180.222.540		15		66.612.2		6.618.018		46	
16	317.056.1		197.620.232		63		7.805.6		4.607.436		46	
17	332.181.7		210.277.107		63		8.103.7		3.773.743		47	
18												
19												
20												

18 316.653.2 224.796.346 102 (陸、在、計)

#### 第四節 麻類

綿以外に於て特用作物中主要なものは麻類、  
楮、莞草、荏、胡麻、杞柳等であつて就中  
麻類が重要である。

麻類中朝鮮に於て普く栽培せられてゐるものは大麻及苧麻の二種であつて、大麻は麻布を主とし其の他草鞋、魚網等の原料として使用せられ、苧麻も亦麻布製織用に使用せられる。而して麻布及苧布の朝鮮内生産高は相當の額に達してゐるが、尚需要を満すに足らず毎年

No.

支那より多量の麻布を輸入してゐる。従つて之が増産奨励のため從來より優良品種の普及と栽培方法の改良に依り反當収量の増加を圖り、併せて製麻法の改善に付指導を加へて來たのであるが、事變後一般纖維資源の逼迫に伴ひ之が必要は頗に増高したので、之が一層の増産を圖り需給の圓滑を期するため、<sup>總督府</sup>本府は昭和十六年（一九四一年）度以降五年間に作付反別三萬町歩、生産高七百萬貫を目標とする大麻増産計畫を樹立實施した。而して其



の後の実績は略目標に達してゐる。

尚大麻の外豆麻の栽培に付ては昭和六年（

一九三一年）農事試験場北鮮支場及咸鏡南道

に於て試作の結果頗る良好の成績を挙げた。

倣つて昭和八年度（一九三三年）に於て農家

をして百二十町歩の栽培をなさしめた所及當

収量四百三十斤に達し、其の品質も亦良好で

北鮮地方に於ける亚麻栽培の頗る有望なこと

が認められた。茲に於て<sup>總督</sup>本府は昭和九年度（

一九三四年）より其の増産計畫を樹て之が増

加

産を積極的に奨励することとなつた。

尚麻類の最近の成績を示せば左の通りであ

る。

大麻。苧麻。青麻

日期	大麻		苧麻		青麻		一 反 重 量 (磅)
	作付及別 (町)	收穫高 (尺)	作付及別 (町)	收穫高 (尺)	作付及別 (町)	收穫高 (尺)	
43年	18682.8	1749720	8642	47529			5.5
44	18727.6	2213328	6308	65083			7.0
大正	17966.8	254658	1440.1	95705			6.6
1	20545.6	2859712	1478.4	109392			7.4
2	22046.0	3036224	1456.3	125780			8.6
3	22545.6	310944	1349.5	106369			7.9
4	23058.5	32044	1287.7	96156			7.5
5	23127.4	391228	1103.7	61128			8.3
6	26358.7	459852	1157.5	102692			8.9
7	22936.6	472021	1288.0	117823			9.1
8	28026.2	233102	1265.5	118105			7.3
9	28453.7	541362	1292.3	122937			11.3
10	28853.5	558460	1295.5	133722			10.3
11	29344.6	555721	1392.6	138121			9.9
12	29249.3	555762	1407.7	152160			10.8
13	29502.0	554771	1513.6	143487			9.5
14							12.2

町名	大麻		苧麻		青麻		一 反 重 量 (磅)
	作付及別 (町)	收穫高 (尺)	作付及別 (町)	收穫高 (尺)	作付及別 (町)	收穫高 (尺)	
1	29925.9	5797028	1586.8	155705			7.8
2	29913.6	5618427	1593.3	143306			7
3	29484.7	5468444	1626.7	138707			7
4	29205.7	5333397	1587.7	127305			8
5	29004.6	5586777	1562.5	178233			11
6	28340.6	5238517	1482.7	129917			9
7	27386.0	5273216	1510.0	145406			10
8	27279.0	5267327	1524.7	145227			9
9	26766.1	4827206	1443.6	139088			10
10	26737.1	5074626	1761.6	151083			9
11	2646.19	4794521	1437.2	716546			8
12	25556.0	4810328	1388.2	137541			10
13	23107.6	4255120	933.3	8627			10
14	21895.0	3471567	826.4	63237			8
15	30146.3	5224426	991.5	61092			8
16	34180.2	6557126	933.2	67062			9
17	36634.9	5604922	997.1	47832			6
18	37688.6	6777153					7.1

第五節 果樹

朝鮮の氣候風土は園藝作物特に果樹類に好適し、柑橘類を除くの外各道共其の栽培を見ない所はない状況である。其の主な種類は梨、林檎、桃、柿、葡萄等であつて、中には其の産額相當多額に上るものもあるが、在來果樹類は柿を除くの外は品種、品質概取劣等で其の栽培法も甚だ幼稚であつた。依つて之が改良を圖るため、<sup>總督</sup>府は早くから農事試験場をして園藝に關する試験調査に従事せしめてゐた。

No.

今其の施設事項の主なものを挙げて

No.

(一) 優良品種の普及

調査試験に依つて朝鮮に適すと認められたる果樹の優良品種を選出し、之が普及を奨励した。で果樹園經營者は殆んど全部優良品種を栽培するに至つた。就中蘋果は品質、風味共に佳良であつて日本種を凌駕するは勿論、米國産の優良種に對しても何等遜色を見ない。其の他の果樹に在つても朝鮮は各歐米種の栽培に適し、日本に於ては殆んど



栽培不可能と稱せられたる歐洲葡萄、洋梨の如きものも好適する。

(二) 果樹園經營に關する指導

果樹園經營者に對しては適地の選定、苗木の選擇、植樹法、剪定整枝其の他の管理法に付て指導獎勵を行つた。

(三) 施肥の獎勵

施肥の適否は果實の肉質、風味及收量に及ぼす影響が多なりで肥料の種類、樹齡及植付距離に依る合理的施用量等の指導を行

87

つた。

(四) 病虫害の驅除豫防

果樹は病虫害に侵され易く且つ一旦其の發生を免ると、恐るべき蔓延力を持つてゐる。そこで大正二年(一九一三年)府令害虫驅除豫防規則を發布すると共に、之が驅除豫防に付て指導獎勵を加へ大正九年(一九二〇年)果樹及櫻樹移輸入取締規則を發布し更に昭和八年(一九三三年)朝鮮移輸入植物検査規則を發布して病虫害の發生並侵

入の徹底的防止に努め、苗木の生産地には  
果樹組合を設立せしめて苗木の検査を為さ  
しめてゐる。

#### (五) 果樹の貯蔵奨励

果樹の奨励品種は輸移出用を主とするので、  
貯蔵に堪へ得る品種に重きを置いた。然  
し栽培者は資金回収のため賣り急ぎを爲し、  
貯蔵に意を用ひる者が少く不利益を免れな  
いので其の貯蔵方を指導奨励してゐる。

#### (六) 販路の開拓

果實の生産増加と共に其の販路を研究する  
ことが緊要となつたので、大正元年（一九  
一二年）以來日本、關東州、滿州、西比利  
亞、上海、香港等に於ける果物の需要供給  
に付て調査を爲し、有望地に對しては試賣  
を行ひ販路の擴張に努力した。  
以上述べたが如き施設に依つて指導奨励を  
加へ、又果樹栽培者の集團せる地方には果樹組  
合を組織せしめ着々改良増殖を圖つた結果、  
各道夫優良果樹の栽培者頻出し果樹園藝は大

忠清南道儒城  
鳥致院  
慶尚北道大邱  
倭

羅州、  
黃海道  
海州、  
黃州、  
安岳、  
平安南道  
平

鏡城附近は主要産地と目せられ、其の生産高

あ  
ふ

最近  
に  
於  
け  
る  
果  
樹  
類  
の  
成  
績  
を  
示  
せ  
ば

7



年次	苹果		梨		葡萄		桃		柿		價額
	樹数	收穫高	樹数	收穫高	樹数	收穫高	樹数	收穫高	樹数	收穫高	圓
昭和 8 年	1,991.659	11,897.153	836.566	3,477.258	230.709	653.145	261.843	1,101.492	778.447	5,995.722	7,010.648
9	2,087.214	14,424.020	872.351	3,563.473	250.162	701.769	267.253	964.258	947.854	6,289.640	9,055.442
10	2,208.806	16,050.479	940.030	4,045.219	254.024	738.706	279.163	1,092.029	1,034.742	5,522.911	10,565.356
11	2,327.560	15,799.283	998.920	3,631.201	261.352	393.062	318.980	1,125.771	1,082.296	5,257.506	10,882.910
12	2,585.368	20,417.672	1,066.958	5,416.922	241.191	464.228	366.844	1,375.679	1,009.720	4,887.167	12,381.570
13	2,833.149	19,077.184	1,152.630	4,742.582	238.190	509.665	463.582	1,524.170	1,044.941	6,070.099	15,892.500
14	3,048.896	22,145.295	1,335.589	5,477.120	303.586	597.889	509.838	1,542.170	1,023.310	5,428.108	21,467.325
15	3,495.924	26,242.896	1,527.574	6,079.897	332.553	675.977	635.354	1,755.529	1,085.640	4,578.255	36,211.127
16	22,400.9 x 294.064	31,846.866 x 745.601	6,543.1 x 213.308	7,275.750 x 844.304	964.5 x 30.847	666.352 x 62.527	1,659.5 x 196.167	1,924.893 x 442.856	1,733.9 x 763.518	1,056.225 x 408.220	54,147.221
17	25,121.7 x 127.778	31,118.632 x 480.185	4,914.1 x 198.690	6,514.450 x 539.258	424.9 x 44.764	691.736 x 69.076	1,620.2 x 209.302	1,958.778 x 426.167	8,015 x 832.732	732.129 x 438.007	55,943.715

× 印ハ果樹園以外ニ於テハ樹数及收穫高ヲ求メ外書トス

## 第六節 農具

朝鮮は土地廣闊であつて農家一戸當りの耕地面積並に田圃の區劃は日本に比し甚だ廣く従つて耕種法は極めて粗放である。耕作地の多くは土性定粘であつて耕耘に勞力を要すること多く、従つて一般に畜牛の力を利用する風を生じ、南朝鮮に於ては一頭式、中北朝鮮に至るに従ひ二頭式を常用してゐる。

従つて苗田の犁耕は一に畜力に依つてゐる。農具として挙げ得るものは牛犁が主なもの

No.

ので、其の他には中耕除草に兩用する「ホミ」及調製用具として不完全な唐箕類を有するに止り、其の種類も至つて少く其の構造亦簡單幼稚であつて原始的域を脱せず、其の取扱に輕快を欠ぎ牛犁の作業行程が稍優れてゐる外は能率極めて劣等である。之は畢竟するに農法が粗放で農業勞力の價值を認めなかつた事に起因するが、亦一般に民度低く製造工業の發達しなかつたことと、多年の~~朝鮮~~政に依り農家の購買力が減殺されたことも其の原因であ

る。

斯くて在來農具の改良、新式農具の發明は農業改良上急務に属するが、民度、農法、各種作物の耕種方式等に關係する所大であり、之が調査研究には相當の経費と歳月とを要する。其の根本的の事は後日の施設に俟つこととし、先づ農事試験場及道農事試験場に於ける實驗の結果、朝鮮の現状に適應するもの認められ、日本又は外國農具の使用を獎勵する方針を採つた。

No.

No.

朝鮮農家に推廣する農具は使用方法加容易で、其の效果著しく且つ價格低廉で堅牢であることを要件とするので、先づ稻扱、磨、石、篩、板摺臼、蓆、備中鍬、シヨベル、松原鍬、灌水車、縫織機、三徳鍬、押切等十數種を選択し、當初は國庫より補助金を交付し、道をして改良農具の購入配付を行はしめたが、其の後には道より個人購入に補助金を交付し、又は地主及各種産業團體を督勵して共同購入を爲さしめ、或は農産品評會等の賞品として



之を授受する方法等には依り之が普及を圖つた。  
尚其の使用法に付ては農事講習會を開いて  
教授し特に稻扱、蒔種機、唐箕等の如く相當  
の熟練を要するものに付ては、最寄の地に数  
日に亘る傳習會を開催して實地作業を演ぜし  
めた。  
優良農具は作業能率高く其の構造が精密なの  
で當初は其の使用に習熟しない為、使用中破  
損するもの多く従つて其の真價を云爲し或は  
修理の途を知らない為、小破損の機も破損に放  
す。

置せられるものが多い状態であつた。依つて  
農具の修理傳習の必要を認め、各道に於て農  
具修理講習會を開催せし道内の木工、鍛工を  
集めて改良農具の修繕に必要な作業の傳習を  
行つた。其の結果木鍛工の技術が向上し簡易  
な修理は地方に於て之を爲すことが出来るに  
至つた。  
尚軌道は農業の進歩發達に伴ひ、小型石油發動  
機等動力に依る調製用具及揚水機の普及著し  
く又回轉稻扱器及深耕犁も各地方に普及を見

[illegible][illegible]

下  
 二  
 子  
 了  
 た

## 第五章 蚕業

### 第一節 栽桑

朝鮮の養蚕は古くより行はれ相當發達して  
るた跡が窺れ<sup>ば</sup>が、李朝中葉以降に於て政綱  
弛緩すると共に、桑田も亦荒廢に歸するに至  
つた。往時に於ても植桑に付ては相當獎勵を  
爲した様に見受けられるが一般農民に徹底し  
なかつた爲、蚕児は飼育するも植桑を嫌ふ舊  
慣を脱し得なかつた。然し朝鮮は氣候土質共  
に栽桑に適し、相當の施設獎勵を爲せば其の發

No.

達は期して俟つべきものがあるので、施政以  
來之が獎勵に努め大正十四年（一九二五年）  
には産繭百萬石增收計畫を樹立し、其の方針  
として（一）養蚕は農家の副業とし養蚕者一戸に  
對し、春蚕約二枚、夏秋蚕約一枚の飼育に充つ  
べき程度の植桑を爲さしむること（二）植桑地は  
成るべく肥沃地を使用すること（三）土立法は一  
般養蚕家の民度に應ずる方法に依り植桑せし  
むることとし、主として農家の副業として奨  
勵することとした。



(一) 桑苗の生産

施政當時に於ては、<sup>朝鮮</sup>鮮内に桑苗の生産を見な  
かった。府は先づ農事試験場に桑苗圃  
を設け、地方の農家獎勵機關及富業者の希  
望に應じて桑苗の無償配付を爲し、又地方  
に於ては恩賜授産費を以つて日本より桑苗  
を購入して之を無償配付し來つたのである  
が、漸次蚕業の發達するに伴ひ地方農家獎  
勵機關は勿論富業者の中にも桑苗の生産を  
業とする者續出するに至つたので、農事試

No.

驗場は其の配付を廢止し、地方農家機關は無  
償配付を有償配付に改め、桑苗購入の斡旋、  
接木傳習會の開催等の助長に努り、桑苗  
の供給は専ら桑苗生産業者の手に依ること  
とした。而して年に依り消長あるも昭和十  
七年（一九四二年）に於ける桑苗生産業者  
は五百六十七人、生産数は四千二百萬本と  
算した。

(二) 種類の改良

朝鮮在來桑樹及山桑は品質が劣等なので、

各種試験機関の調査に基き、朝鮮の風土に適  
應する優良種十種類を選出して其の植栽を  
奨励した。初見に於ては各道共概ね魯桑を  
主としたが、最近に至つては改良最速、市平  
等の優良種を植栽すると共に、西北鮮中寒  
氣酷烈の地方に於ては寒粘等の氣象的關係  
をも考慮し在來桑中比較的優良と認められ  
る錦桑、唐桑、秋雨等の種類を漸次植桑す  
るに至つた。

No.  
(三) 桑田の増殖

No.  
養蚕奨励の初に當つては最も速に収葉し得  
られる桑田を造成して蚕児の飼育を行ひ、  
其の利益を農民に周知せしむる必要があつ  
たので魯桑、實生を立通し又は密植として  
植桑し來つたのであつた。大正十四年（一  
九二五年）からは産繭百萬石増收計畫に基  
いて主として立木を奨励したので新設桑田  
は各道共著しく増加した。又一方に於て在  
來桑樹に付ては整枝を行はしめ肥培管理を  
促したので、新業の進展に伴ひ純根刈桑田

の増加は特に顯著なものがあつた。

#### (四) 植桑地の選定

朝鮮農家の家屋は一般に狹隘で多量の養蚕に適せず、従つて所要の桑田も廣大な面積を必要としない。故に植桑地は先づ主として宅地の塙壁、河川の沿岸等を利用し漸次養蚕の盛んとなるに従ひ、更に田圃の周圍又は瀕々として水害を蒙り夏作に不利な土地等に植桑せしむる方針を採つたが、是等の土地は地力に乏しく又肥培管理等も困難

No.

No.

で、概ね其の成績は良好でなかつた。依つ

て大正九年（一九二〇年）からは最も適當

な熟田を選び栽培せしむることにより方針を改

めたのであるが、其の結果は成績顯著なも

のがある。

#### (五) 肥培管理

肥培管理に關しては實地指導其の他の方法

に依り、其の必要欠ぐべからざる所以を説

示して其の徹底に努めつゝあるが、一般農

民は桑は樹木なるを以つて肥培の要なきも



のの如く觀念し肥培管理を等閑に附する嫌  
があるので、一定の期日即ち「桑の日」を  
定め、同一地方に於ける全桑田に對し一齊に  
肥培管理を為さしむる等の方法に依り成績  
の奉揚に努めてゐる。

前述の如き施設獎勵を講じた結果、桑苗の生  
産數に於ても桑田の面積に於ても將又仕立法  
及肥培管理の改良に於ても長足の進歩を遂ぐ  
るに至つた。然し今から其の實質に就て檢す  
るに、當初に於ては養蚕の獎勵を朝鮮の全地域

に普遍的に施行し、之に對する實地指導が不充  
分であつた爲、桑田一反歩に對する收繭量は  
僅少で、大正十三年（一九二四年）に於て僅に  
七斗一升五合に過ぎない状態であつた。從つ  
て農家は稍もすれば桑樹の植栽を怠らない傾  
が有つたが、漸次養蚕の利益あることを体得  
し桑田の肥培管理に意を用ふるに至り、昭和九  
年（一九三四）年に於ては反當收繭量九斗五  
升に及び、更に總督府の農村振興運動に依る  
養蚕獎勵は、農民に刺激を與へ進んで植桑を希

望す者、篠出し、桑田、肥培養理も著しく改良

而して産蘭百萬石計畫は、昭和十一年（一九  
三六年）度より以つて打切られ、昭和十二年（一  
九三七年）度よりは桑田改善の目的を以つて、  
各年肥培施設費として四萬六千餘圓を交付せ  
られたが、昭和十五年（一九四〇年）度より  
更に五ヶ年を期間とする産蘭急速増産計畫が  
樹立され、實施に移された。

No.

尚最新  
に於ける  
桑田面積の  
消長を示せば

99

No.

[illegible]

生 植 米 田

[illegible]



## 第二節 養蚕

前節に於て述べた様に朝鮮は古くより既に養蚕地であり、各朝歴代蚕業を重んじ其の奨励に努めたので、養蚕製糸の技は大に進み精巧な絹布の特産品が各地に現出してゐたのであるが、李朝末期には殆んど額廢に歸し施政當時は産繭額僅に一萬四千石に過ぎず、国内の需要に對しても供給伴はず年々支那より多額の絹布を輸入する状態であつた。然し朝鮮の氣候は育蚕上<sup>適</sup>の氣温と湿度

No.

No.

熱を保有し、従つて蚕児の發育は良好で其の繭質亦可良であり、勞力は過剩、勞銀は低廉で而も土地は豊富、到る所桑樹の栽植に適する等蚕業經營上天恵の要素を具備してゐるので、本府は施政當初より養蚕は農家の副業として全鮮に普遍的に好適する事業なることを認め併合の際下付せられた恩賜金に依り授産事業と爲し、極力其の奨励に努めて來た。今其の施設事項の主なものを挙げると

(一) 蚕業職員の配置

## (二) 蚕業の講習傳習

蚕業の指導獎勵に當る技術員は施政當初に  
 於ては僅かに總督府に技手一人、地方廳に技  
 手九人に過ぎなかつたが、蚕業の進展する  
 に伴ひ漸次技術員を充實し特に大正十四年  
 (一九二五年)産繭百萬石增收計畫の實施  
 に伴ひ職員を増置を行つたので、昭和九年  
 (一九三四年)には國費を以つて設置する  
 もの四十人、道費を以つて配置するもの三  
 百六十二人に達した。

養蚕の獎勵上簡易な短期傳習所設置の緊要  
 なるを認め、各道は蚕業講習所又は傳習所  
 を設置し實地に就いて養蚕術を會得せしむ  
 ると共に簡易な學理を傳習せしめてゐる。  
 昭和九年(一九三四年)に於ける講習(傳)  
 習所の数は四十八箇所<sup>に</sup>達した。

## (三) 蚕室及蚕具の改良

蚕室は一般に狹隘な居室即ち溫突を使用し  
 つゝあるが、養蚕の發達に伴ひ漸次簡易な  
 蚕室を設備する者も現れるに至つた。一溫突



は稚蚕期に於ては保温上恰好の育蚕室と稱し得るが窓戸少く空氣の流通不良の爲、吐蚕期以後に於ては蚕の生理を害する虞がある。そこで適當な場所に氣拔を設けて是等の弊害を除去する様指導獎勵してゐる。又在來の蚕具は不完全で經濟的にも實用に適しないので、其の地方に生産する萩、柳等木の有り金せの材料で改良蚕具の製造を爲さしむるため、各地に蚕具製造傳習會を開催し、改良簇等に至る迄各自に製造せしむること

努めた結果相當優良なものが普及するに至つた。

#### (四) 稚蚕共同飼育

幼稚な養蚕家に對し育蚕技術を簡易に而も迅速に修得せしむるには、稚蚕の共同飼育が最も捷徑の方法と認め、國庫又は道費の補助に依つて其の獎勵に努めた所、極めて顯著な成績を収め、年に依り消長あるも昭和十七年（一九四二年）には共同飼育所數約千六百餘、戸數七萬餘戸に達した。



(五) 蚕種製造

従来朝鮮には蚕種製造業者なく其の多くは養蚕家自ラ蚕種の複製を爲す習慣であつたので、品種の改良行はれず従つて品質劣悪な蚕種のみ製造せうれ優良蚕種は主として日本よりの移入に俟つた外はない状態であつた。依つて大正三年（一九一四年）度より各道に於て蚕種製造者の養成を行ふこととなした所、之に依り品質の向上せしは勿論其の生産数も著しく増加し大正十四年（

No.

一九二五年）には六十五萬枚に達し大正二年（一九一三年）に比し三倍四分となり、昭和三年（一九二八年）に於ては日本よりの移入は僅少に止り、昭和四年（一九二九年）には自給自足の域に達し昭和七年（一九三二年）以降は過剩の状態となつた。而も品質が優良なもので輸移出さるるものも増加し逐年發達の盛況にある。

(六) 優良蚕種の普及

前述の如く在來の蚕種は雜駁で品質の劣等

を三紙蚕であつたので、<sup>總督</sup>本府は農事試験場  
に於て優良品種たる原蚕種を製造して地方  
廳に配付すると共に、普通蚕種をも製造し  
て當業者に之を配付し、又地方廳は地方農蚕  
奨励機關に於て原蚕種を製造する傍、普通  
蚕種をも製造して之を直接當業者に配付し  
優良蚕種の普及に努めた。然し漸次蚕種製  
造者の増加するに伴ひ多数の原蚕種の製造  
を必要とするに至つたので、道に原蚕種製  
造所を設けて専ら原蚕種の製造及各種試験

調査に當りせ優良品種の普及を図ること  
とした。其の結果施政當時に於ては優良蚕  
種は僅に總掃立枚数の一割三分にも達しな  
かつたが、現在に於ては全部<sup>總督</sup>本府指定の優  
良蚕種となり全然面目と一新した。

### (七) 蚕種の統一

産繭額の僅少な朝鮮に於て数十種の蚕種と  
飼育するときは、産繭の處理上不利不便が  
少くないので、農事試験場をして優良品種を  
選出せしめ、大正元年（一九一二年）に内



No.

地蚕種五種類、大正七年（一九一八年）に  
純粹種及交雜種六種類、大正十年（一九二  
一年）に交雜種三種類、大正十三年（一九  
二四年）に三種類、昭和七年（一九三二年  
）に支歐交雜種一種類を獎勵品種に指定し、  
不用の品種を廢し更に昭和九年（一九三四  
年）に支歐交雜種一種、日支交雜種一種を  
追加指定し法令を以つて之を統一した。  
尚昭和十五年（一九四〇年）に於て國內向  
蚕品種として二種が追加されてゐる。

5

No.

（ハ）乾繭場（機）の普及  
從來朝鮮に於ては産繭を消化する製糸工場  
が少なかったたので、上繭は主として之を日  
本に移出し玉繭、屑繭を鮮内に於て製糸す  
る方針を採つたが、産繭額が漸次増加する  
に伴ひ共同販賣の数量増加し繭質損傷の虞  
が生じたので、昭和二年（一九二七年）よ  
り五ヶ年繼續事業として優良な乾繭場の建  
設に對し、國庫及道より補助金を交付し、更に  
昭和七年（一九三二年）よりも五ヶ年間に之



を繼續して其の普及を圖った。

(九) 朝鮮蚕業令の制定

蚕業の進歩發達に伴ひ、蚕病の豫防驅除、蚕種検査、桑苗の生産販賣、蚕種の販賣及輸入、繭の販賣其の他に付取締を爲す必要を生じたので、朝鮮蚕業令及附屬法規を制定し、大正八年（一九一九年）五月より之を施行した。依つて各道に於ては蚕業取締所を設置して法令に基く各般の事項の取締を行つてゐる。

以上は産繭奨励に關する主なる施設であるが、最近に於ける繭の生産額を示せば、

家 蠶

明治 43年	飼養戸数		蠶種採立枚数(枚)			產 繭 高 (石)			家 蠶 系		
	春	夏秋	總 数	春	夏秋	總 数	春	夏秋	製造戸数	蠶 数	生産高(石)
43	76,037	89,980	89,980	84,586	5,394	13,931	19,960	971	51,015	?	?
44	101,662	8,059	127,124	117,963	9,161	20,032	18,383	1,649	66,057	?	10,677
大正 1	147,927	17,562	179,391	162,437	16,954	29,440	26,327	3,113	92,175	?	17,560
2	167,342	22,114	203,711	177,641	26,070	36,871	32,207	4,664	108,667	?	20,893
3	177,320	37,336	238,042	191,747	46,295	46,194	39,391	6,803	100,533	?	21,457
4	201,913	40,544	283,367	236,014	47,353	57,156	52,280	6,896	102,404	?	23,498
5	237,329	55,499	347,820	285,560	62,260	71,921	61,468	10,453	103,463	?	23,207
6	271,160	97,360	444,730	328,014	116,716	77,185	78,012	19,173	10,185	?	4,557
7	328,451	103,311	543,135	417,604	125,531	121,069	98,244	22,825	10,144	10,422	12,176
8	343,888	127,626	557,672	408,638	149,034	122,305	99,117	23,188	13,052	15,071	20,558
9	325,882	83,883	485,100	389,704	95,396	132,946	115,867	17,079	37,759	40,701	33,636
10	312,578	90,267	458,782	356,701	102,081	132,653	112,515	20,138	32,054	35,311	32,792
11	341,784	114,338	497,831	372,078	127,753	142,691	118,666	24,025	29,139	29,156	45,129
12	401,563	134,758	528,994	425,886	153,108	207,712	173,322	34,890	32,487	33,426	61,131
13	467,475	124,786	640,404	502,027	138,377	243,852	210,121	33,731	33,938	35,311	65,986
昭 和 14	498,100	172,978	693,338	513,220	180,118	285,142	227,510	57,642	110,238	112,551	108,018
1	542,690	222,800	791,190	546,849	244,341	317,080	234,655	82,425	127,704	129,729	142,161
2	572,927	224,232	796,138	562,172	233,666	355,192	267,586	85,606	155,400	161,420	725,978
3	594,209	266,950	837,911	593,407	274,504	386,113	286,013	100,100	172,110	178,135	887,884
4	648,079	324,247	931,362	604,939	326,423	484,802	346,798	138,004	188,355	194,041	1,050,338
5	720,813	352,255	1,002,315	680,604	321,711	555,232	404,197	151,035	245,857	244,460	1,323,555
6	747,084	411,168	1,012,603	662,490	350,113	578,261	407,864	170,397	264,272	262,768	1,432,901
7	786,060	455,642	1,032,500	685,490	347,010	593,407	416,555	176,503	294,843	293,912	1,523,501
8	812,009	578,345	1,128,180	664,287	463,893	668,034	427,140	240,894	282,636	283,911	1,395,831
9	839,814	558,222	1,080,047	680,000	400,047	2,298,908	1,288,304	210,678	326,328	326,050	2,126,162
10	821,573	576,470	1,045,400	628,625	416,775	2,131,560	1,469,918	662,164	361,300	362,727	1,902,132

11	826,109	588,221	1,052,114	629,932	422,182	2,257,152	1,488,440	768,081	344,822	342,167	1,884,711
12	815,278	623,522	1,050,793	609,002	441,791	2,253,923	1,475,626	777,827	333,909	332,416	1,907,941
13	817,426	422,416	1,028,827	612,828	416,000	2,189,221	1,424,148	711,118	325,511	323,227	1,816,111

43	76.037	89.980	89.980	84.586	5.397	3.931	19.960	971	51.015	?	?
44	101.662	8.059	127.124	117.963	9.161	20.032	18.383	1.647	66.057	?	10.677
大正	147.727	17.562	179.391	162.437	16.95	1.440	26.327	3.113	92.175	?	17.560
2	167.342	22.114	203.711	177.641	26.070	36.871	32.207	4.664	108.667	?	20.87
3	177.320	37.336	238.042	191.747	46.295	46.194	39.391	6.803	100.533	?	21.457
4	201.963	40.544	283.367	236.014	47.353	59.156	52.280	6.896	102.404	?	23.498
5	237.329	55.499	347.820	285.560	62.260	71.921	61.468	10.453	103.463	?	23.707
6	271.160	97.360	444.730	328.014	116.716	77.185	78.012	19.173	10.185	?	4.557
7	328.451	103.311	543.135	417.604	125.531	121.069	98.244	22.825	10.144	10.422	12.176
8	343.288	127.626	557.672	408.638	149.034	122.305	99.117	23.188	13.052	15.071	20.558
9	325.882	83.883	485.100	389.704	95.396	132.746	115.867	17.079	37.759	40.701	33.636
10	312.578	90.267	458.782	356.701	102.018	132.653	112.515	20.138	32.054	35.311	32.792
11	341.784	114.338	497.831	372.078	127.753	142.691	118.666	24.025	29.139	29.156	45.129
12	401.563	134.758	578.994	425.886	153.108	207.712	173.322	34.790	32.487	33.426	61.131
13	467.475	124.786	640.404	502.027	158.377	243.852	210.121	33.731	33.738	35.311	65.986
14	498.100	172.978	693.338	513.220	180.118	285.142	227.500	57.642	110.238	112.551	108.018
昭和	542.690	222.800	791.190	546.849	244.341	317.080	234.655	82.425	127.704	127.729	142.161
2	572.927	224.232	796.138	562.172	233.666	355.192	267.586	85.606	155.400	161.420	725.978
3	594.209	266.950	837.911	593.407	274.504	386.113	286.013	100.100	172.110	178.135	887.884
4	648.079	324.247	931.362	604.939	326.423	484.802	346.798	138.004	188.355	194.041	1050.338
5	720.813	352.255	1002.315	680.604	321.711	555.232	404.197	151.035	245.857	244.460	1323.555
6	747.084	411.168	1012.603	662.490	350.113	578.261	407.864	170.377	264.272	262.768	1432.901
7	786.060	455.642	1032.500	685.490	347.010	593.407	416.555	176.503	294.843	293.912	1523.501
8	812.009	578.345	1128.180	664.287	463.893	668.034	427.140	240.894	282.636	283.911	1395.821
9	839.814	558.222	1080.047	680.000	400.047	2278.9088	1588.304	2106.784	326.328	326.050	2126.162
10	821.573	576.470	1045.400	628.625	416.775	21.318.560	14.696.918	662.1642	361.300	362.737	1909.132

11	826.109	588.221	1.052.114	629.932	422.182	22.571.521	14.883.440	7.688.081	344.822	342.167	1.884.711
12	815.278	623.522	1.050.793	609.002	441.791	22.537.923	14.759.626	7.778.297	333.909	332.416	1.909.941
13	817.476	632.466	1.038.837	612.828	426.009	21.893.091	14.246.449	7.646.642	350.501	348.577	2.160.411
14	823.412	655.603	1.056.647	611.111	445.536	20.566.241	14.082.759	6.483.482	315.502	323.157	2.120.295
15	841.132	688.494	1.118.116	629.419	488.697	22.713.127	14.157.036	8.556.091	321.172	324.459	2.106.564
16	860.697	699.279	1.124.380	651.696	472.684	20.185.956	12.715.363	7.470.593	349.127	348.867	2.165.802
17	881.594	716.862	1.100.919	648.242	452.677	14.753.371	10.291.919	4.461.452	320.334	322.044	447.226
18						14.346.997					



### 第三節 産繭處理及製糸

従来朝鮮に於ては養蚕と製糸との分業が行はれず養蚕者は即ち製糸業者であつて、自己飼育の産繭を簡単な繰糸器にさへ依らず殆んど赤手で紬いで自己の衣料に供してゐる状態であつた。依つて本府及地方廳は養蚕者に座繰器を配付して改良製糸の普及に努めたのであるが、優良蚕種の普及と生産の増加に伴ひ、上繭は之を日本に移出するを有利と認め産繭の賣買取引に對して各般の設施を講じた。尚

No.

107

No.

輓近に於ては産繭額の増加するに伴ひ漸次鮮内に於ても專業的製糸工場も設立を見るに至つた。

産繭の處理及製糸に關し本府の施設した事項を挙ぐれば

(一) 繭及生糸の朝鮮輸移出税及日本移入税の撤廢

大正元年(一九一二年)より朝鮮税關に於て課してゐた従價五分の輸移出税を廢止し、

大正七年(一九一八年)より日本税關に

於て課してゐた従價三割の移入税を撤廢し  
て、繭及生糸の日本移出を有利ならしめた。

(二) 生繭の共同販賣

朝鮮に於ける養蚕者は概ね幼穉であつて、生  
繭の販賣に關し往々繭購買者の商策に乗せ  
られて損失を招く虞があり、又産繭は各地  
に散在し販賣上不利不便が尠くなかつた。  
依つて本府は一郡に一箇所或は必要に依り  
數ヶ所に産繭を持寄らしめて爲す共同販賣  
は朝鮮の民衆に適するは勿論、賣買両者に利

便なるを認め、極力繭の共同販賣を奨励し  
た。其の結果繭の出廻額は増加し、昭和九年  
(一九三四年)に於ては總産額の四割が共  
同販賣に依り處理せらるゝに至つた。

### (三) 製糸工場の創設

養蚕奨励の當初に於ては(一)産繭額少く且つ  
点在してゐたので、原料購入の困難であつた  
こと(二)朝鮮の婦女は勤勞又は出稼を爲さな  
い風習あり、工女の雇傭容易ならざること(三)  
朝鮮人は永續勤務の念乏しく従つて工女の



出入頻繁となり技術の熟達期し難く製糸業  
 の經營<sup>に</sup>不利なりと認められた<sup>こと</sup>と(四)製糸  
 業に経験ある者なき爲企業者を得難かつた  
 こと等の諸原因に依つて製糸工場創設の時  
 期に達せず、偶明治四十三年(一九一〇年)  
 一京城に創設された一工場の如きも經營難  
 に陥り之を授産業として京畿道の事業に移  
 すの己をなき實情であつた。然し其の後蚕  
 業の發達に伴ひ機械製糸は漸く勃興の氣運  
 に向ひ各地に大工場の設立を見了に至ると

共に、其の他に於ても從來の操糸器を廢し  
 座繰足踏器に依り繰糸せられるに至り、前者  
 に在つては昭和十六年(一九四一年)現在  
 機械製糸工場六十八戸を存し其の生糸生産  
 額三十六萬七千二百十三貫價額三千百七萬  
 餘圓に達するに至つた。是等は主として外  
 國輸出向として日本に移出せられ、又後者は  
 製糸戸数三十四萬九千五百九戸、生糸生産額  
 二十一萬三千三十四貫、價額一千二百五十  
 八萬三百餘圓を算するに及んだ。茲に於て



總督府

是等製糸業の統制並指導監督を密に

し優良生糸の生産を爲さしむるの必要を認

め昭和十年（一九三五年）八月制令第十一

號を以て朝鮮製糸業令を制定し同附屬法

令と共に十一月より施行し製糸業を免許制

度とし新業の堅實な伸長を爲さしむること

とした。

最近に於ける家蚕糸の生産額を示せば左の

通りである。

## 第六章 畜産

### 第一節 牛

朝鮮牛は古來全道に亘り飼養せられ、性温順で使役容易なこと、體質強健で粗悪な飼養管理に堪へ得ること、肢蹄堅韌で動作が活潑なこと、軀力、耐勞力、役能率の大きなこと、肥育性に富むこと、皮質の良好なこと等幾多の美点長所を有し、農家の農業經營上缺ぐべからざる要素であるばかりでなく、農家の貴重な財産であり同時に又農村に於ける金融機關と

No.

もなり、又一般に牛肉嗜好の習慣が強いので民族生活とも密接な關係を持つてゐる。朝鮮牛の起源に付ては外國學者間にも種々の議論があり、我國に於ても學者に依り印度牛、或はジャバ牛系統説と、類原牛臨似説と其の所説を異にし未だ分明してゐない。其の体型は全鮮を通じて概ね一樣の如くであるが、仔細に之を視ると大小、型態其の他不揃で地方的に多少の變異を現はし、一般に西北鮮地方の牛は南鮮地方のものより体型が大きいことを常としてゐる。

る。

往古にあっては畜牛預託の制度があり、畜牛の保護に意を致したことが窺はれるが、李朝末葉に至ると政弊甚しく苛斂誅求の結果、民性懶惰に流れ、畜牛の如きも耕耘の用あるときは之を養ふが然らざるときは飼養の煩を厭ひて之を放賣する風を馴致した。斯くて朝鮮牛は其の素質は優良なるに拘らず、之に對する保護助力の施設が行はれなかつた爲、次第に退化するに至つた。依つて施政後に於ては畜牛の改

No.

12

No.

良増殖を以つて畜産奨励上の最も重要な事項と爲し、各般の施設を講じた。

### (一) 牛種保存

朝鮮牛の特質を維持し牛種を保存する爲、洋種又は雜種の乳用牛の移輸入がある時は税關長より之を道知事に通報せしめ、當該道知事に於ては混血防止に付て相當の取締を爲すこととした。其の結果今日迄一般農家に飼養する牛には、毫も他の種類の花派を混入することなく純粋の在來種性を保存して



ある。

(二) 種牡牛の設定

朝鮮牛は品質優良であるが、従来農民の間に  
は種牡牛選定の風習なく、而も年々日本及  
露領に向つて比較的優良な牛が輸移出され  
るので、畜牛の体格は漸次劣<sup>變</sup>する傾向があ  
つた。依つて施政の當初から國費又は道費  
を以つて優良種牡牛を購入し、之を篤農家  
に貸付し、一定の期間足留を爲して種付に供  
用する等専ら優良種の種付を奨励した。然

No.

し限りある國費又は道費を以つて多数の種  
牛を購入して、普く供給することは困難であ  
つたので、大正五年（一九一六年）保護牛規  
則を制定して前述の施設に代へることとな  
つた。  
保護牛制度は普く優良な種牛を保護し、畜牛  
改良の基礎を確實ならしむると共に、優良  
な牝牛及犢をも併せ保護し將來に於ける種  
牡牛補充の途を講ずるにあつたが、其の成  
績は概して良好でなく、所有主の中には放責

屠殺の自由を束縛せられることを好まざる者がある。地方に依つては道有組合有契有等の種牡牛を設けて其の缺陷を補つて来たが、元來道費が不足な爲充分に其の目的を達することが出来なかつた。依つて大正十二年（一九二三年）度より特に國庫より道費に補助金を交付し、其後三ヶ年を期し成牝牛六十頭に對し、少くとも一頭の種牡牛を置き、其の種付を奨励せしむることとした。所、各道に於ては、尙く既定計畫の遂行に

(三) 種牛生産地区設定

努め、種牡牛豫定頭数の配置を完了し、朝鮮牛の改良上顯著な成績を挙げてゐる。

朝鮮牛の系統的蕃殖を爲し、優良牛を生産育成して種牛の充實を圓滑ならしむる目的の下に、大正十三年度（一九二四年）より京畿、全北、慶北、平南、咸南の五道に各一箇所、兎優良牛の産地を選んで、種牛生産地区を指定し、一箇所に於て種牡牛一頭、種牝牛四十頭を飼育せしめ、之に技術員を配置し



No. 115  
て飼養管理に従事せしめた。是等種牛生産  
地区は何れも優良な成績を示し、設置以來昭  
和九年（一九三四年）迄に一千五百三十七  
頭の牝を生産し内六百二十九頭を種牛とし  
て供給した。

No. 115  
(四) 種付の奨励  
種牝牛の設置が効果を挙げるには種付の勵  
行が必要なので、種牝牛保護の一助と爲す  
爲種付料を奨へ或は種付<sup>牝</sup>牛に對し<sup>種</sup>付料  
を奨へる等、銳意種付の奨励に努めた結果、

No. 115  
逐年種牝牛の種付数を増し、昭和九年（一九  
三四年）には五十三萬五千余頭を算し同年  
に於ける成牝牛の七割強に達した。

No. 115  
(五) 飼料の充實  
飼料の充實は畜牛の改良増殖上必要を條件  
であり、就中野草は飼料中重要なものであ  
るが従来朝鮮に於ては野草を採集貯蔵する  
の念に乏しく、其の爲冬季に至ると畜牛の  
飼料に窮し、遂に之を放棄して顧みざる風が  
あったので、野草の刈取、乾草の貯蔵其の



他埋草の調製等と奨励した所、漸く其の習慣も改<sup>め</sup>り、逐年好成績を示しつゝある。又飼料の品質を良好にし其の量を増加する為、道農事試験場、郡農會等をして、ルールサンシ詰草類を栽培させてゐるが其の成績は未だ充分でない。

尚近時未墾地開拓、植林事業等の勃興の結果、果、漸次畜牛の繫飼地、放牧地又は採草地が漸く縮少せうれんとする情勢に在るので、各地方に共同牧野を設定せしめ其の保護利

# (六) 畜牛の奨励

用に付特に留意せしめてゐる。

朝鮮に於ける畜牛数は相當數に達してゐるが、年々生産と消耗が相殺されて餘利が少く更に増殖進展と見ない情態にあり、一方耕地面積の増加及一般産業の進展に伴ひ、役牛並に既肥の需要は益々増加する趨勢に在るばかりでなく、食肉の需要も亦年次増嵩せんとする情勢に在るので、畜牛の増殖施設を講じ、需要を充足せしむることの極めて緊要

又生産積中優良なものは更に預託育成し

て蓄殖に使用せしめ蓄殖率の昂上を圖リ

郡農會所有とし、之を農家に無償預託し

價格の二分の一以内を補助し、蓄殖牝牛は

價格の二分の一以内を補助し、蓄殖牝牛は

價格の二分の一以内を補助し、蓄殖牝牛は

(1) 蓄殖牝牛の設置

畜牛の生産適地である山地帯を選定し、蓄

殖牝牛を設置せしむる爲、國庫から購入

したるを認め、其の施設の一端として昭和四

年（一九二九年）度以降國庫より各道に補

助金を交付し、左の施設を實施せしめてゐる。

て蓄殖に供せしめつゝある。成績は良好

であつて、昭和四年度（一九二九年）以降

昭和九年度（一九三四年）迄に八千六十

三頭の蓄殖牝牛を設置し、同期間に一萬三

千六百九十餘頭を生産し、年々六十%の生

産率を示してゐる。

(2) 畜牛失済

畜牛の斃死に依る農家の損害を補填し、代

牛購入の資を得せしむることは、畜牛増殖

を圖る上に於て緊要なるを認め、各道、郡

を圖る上に於て緊要なるを認め、各道、郡

を圖る上に於て緊要なるを認め、各道、郡

を圖る上に於て緊要なるを認め、各道、郡

を圖る上に於て緊要なるを認め、各道、郡

を圖る上に於て緊要なるを認め、各道、郡

を圖る上に於て緊要なるを認め、各道、郡



農會をして共済を實施せしめた所其の成績頗る良好で昭和九年（一九三四年）に於ては七千五百十餘頭の代牛を購入し畜牛増殖上多大の効果を収めてゐる。

(ハ)生産奨励技術員の設置

西北鮮六道中畜牛の生産適地と認められ山地帯の郡農會十五を選び生産奨励技術員を設置せしめて地區内牝牛飼養者に就いて生産増殖に關する適切な指導を加へしめてゐるが其の成績頗る良好で、

指導區域内の生産率は年々六十%餘に達し鮮内平均生産率五十%に比すると遙に高率を示してゐる。

(七)牛契

牛契は従來の習慣に依り全鮮に設置されてゐる。牛契の組織に就いては(一)獨力で牛を購入し得ない細農が合同して一定の期間一定の契金を醵出し順次各自に成牛又は牝を購入所有せんとするもの(二)比較的資力ある農民が合同して契金を醵出し契有として牛



を購入し其の蕃殖育成を圖るもの(三)農民合  
同して契金と醸出し契有として種牡牛を購  
入飼養し契員所有の牝牛に對し種付を為す  
もの等の種類がある。其の内容は一ではな  
いが何れも畜牛の改良増殖に資するので之  
を奨励し且つ必要な指導監督を加へてゐる。

(八) 病牛の治療

郡農會に専任技術員を設置して各種畜産奨  
勵施設の指導に當らしむる傍う、病牛の治  
療に必要な各種の設備と施設し、病牛の診療

No.

に従事させてゐるが、農民間最も歡迎せ  
らる。其の治療数は毎年二十餘萬頭に達して  
ゐる。

No.

(九) 移出牛の検査

畜牛は重要移出物の一であり、其の移出に當  
り病毒の携行に依つて累を日本に及ぼす虞  
なきことを保證することは朝鮮牛の聲價を  
維持する所以なので、明治四十二年(一九  
〇九年)釜山に移出牛検査所を設置し同港  
より移出する牛の検査を施行してゐたが、

大正十四年（一九二五年）より更に仁川、元山、城津、鎮南浦の四ヶ所に移出牛検査所を設置するに及び牛の移出は年々盛況に向ひつゝある。

(十) 輸移出税撤廢

大正九年（一九二〇年）の關稅制度改正に先ち、大正八年（一九一九年）四月より朝鮮より輸移出する生牛の輸移出税を撤廢し、日本への移出獎勵の一助とした。

(十一) 牝牛の去勢

劣等牝牛の去勢は常に畜牛の改良上効果的であるばかりでなく、畜牛の利用價值を高め、其の飼養を促し、亦増殖上重要な事項なので、近時道又は郡農會等に於て施設を講じ、牝牛の去勢を積極的に獎勵し、相當の効果を收めてゐる。

(十二) 畜牛の肥育

畜牛の肥育は、農家の副業として餘剩勞力を生産化し、厩肥の増産を進め、飼牛の普及上重要な事項なので、近時一部の地方に於て去

勢と相俟つて、積極的に施設を講じ獎勵に着手して良好の成績を挙げてゐる。

以上は従來の施設の大要であるが、事變後畜牛に對する需要が増大するに及び、有畜の普及徹底並に食肉及皮革資源涵養を目的として、昭和十三年（一九三八年）度より二十ヶ年を期し、畜牛を二百五十萬頭に増殖する計畫が實施された。本計畫に於ける主な施設獎勵事項は、(1) 資質維持改善 (2) 生産獎勵 (3) 飼牛經濟の向上 (4) 飼育普及 (5) 取引改善 (6) 指導獎勵機關の改

善充實 (7) 試験研究機關の擴充等である。尚最近に於ける畜牛の数を示せば左の通りである。



[illegible][illegible]

牛動態

年	出產		死亡		屠殺		撲殺	
	總數	牛	總數	牛	總數	牛	總數	牛
大正5年								
6	167,401	125,814						
7	171,027	132,908						
8	185,489	149,905						
9	183,109	150,015						
10	178,831	146,322						
11	189,625	155,159						
12	189,625	155,159						
13	208,604	163,705						
14	367,571	207,119	16,389	9,324	29,615	13,426	161,874	380
15	374,170	200,769	17,340	9,354	26,378	12,090	143,577	66
16	368,978	205,326	16,369	9,373	25,766	12,133	138,327	94
17	367,349	202,706	16,464	8,571	29,042	13,345	156,766	34
18	362,488	201,142	16,134	9,246	26,076	11,170	149,264	19
19	356,040	198,418	15,762	9,318	21,611	8,787	128,237	14
20	365,307	200,626	16,468	9,434	26,609	11,058	155,511	20
21								
22								
23								
24								
25								
26								
27								
28								
29								
30								
31								
32								
33								
34								
35								
36								
37								
38								
39								
40								
41								
42								
43								
44								
45								
46								
47								
48								
49								
50								
51								
52								
53								
54								
55								
56								
57								
58								
59								
60								
61								
62								
63								
64								
65								
66								
67								
68								
69								
70								
71								
72								
73								
74								
75								
76								
77								
78								
79								
80								
81								
82								
83								
84								
85								
86								
87								
88								
89								
90								
91								
92								
93								
94								
95								
96								
97								
98								
99								
100								

## 第二節 馬

在來朝鮮馬は<sup>本</sup>格が極めて矮小で、往時に在  
つては兵用、官用を目的として産馬を圖つた  
が、民間に於ては山間險路の小貨運搬、旅客  
の乗用若は祭葬婚禮の用に供するに止り、産業  
上に利用せられたことは極めて少い。

在來朝鮮馬は矮小微力で、到底改良馬産出の基  
礎ならしむるに足りないで、蒙古種又は外  
國種を基礎として新馬を産出する必要を認め  
たのであるが、慎重を期するため先づ以つて

No.

其の研究調査を爲すこととし、大正五年（一九  
一六年）江原道淮陽郡蘭谷面に農事試験場牧  
馬支場を設置した。同場に於ては大正六年（  
一九一七年）蒙古牝馬四十餘頭を輸入し、之  
に配するに馬政局より保管轉換を受けた「ギ  
ラドン」及「アングロノルマン」種の牝馬を  
以つて雜種試験を行い、之を新朝鮮馬と稱し、  
再來引續き蒙古牝馬及洋種牝馬を増加して其  
の蕃殖を圖つて來たが、昭和四年（一九二九  
年）本場を擧げて李王職に移管し李王職に於



て本事業を継承することとなつた。

尚右の外産馬奨励の爲施設された事項を述

ぶれば

(一)種馬牧場の設置

威鏡北道に於ては道内産馬改良の目的を以

つて、大正八年度へ一九一九年以降國庫補

助を受け、種馬所を經營し、民有牝馬に種

付を行ひ馬匹改良増殖並に馬事思想の普及

に多大の貢獻を爲してゐたが、昭和七年(

一九三二年) <sup>總督</sup>本府は之を國營に移し國立種

馬牧場と改稱し、事業を擴充して馬匹の改

良蕃殖に努め、次いで昭和十二年(一九三七

年)馬政計畫の樹立に伴ひ馬政方針の示す

處により馬匹の種付機關としての使命遂行

に邁進し、昭和十五年(一九四〇年)には威

鏡南道に支場を開設した。

(二)馬匹移入税の撤廃及鐵道運賃の低減

貨物運搬用輓馬の需要増加に鑑み、其の移入

を促進するため大正八年(一九一九年)以

後は馬の移入税を廢し、又馬匹改良蕃殖奨励

の見地から種馬に在つては五頭分、競走馬に在つては十頭分に對し、夫々三割迄の鐵道運賃を割引することになつた。

(三) 朝鮮競馬令の制定

従來競馬は鮮内各地で行はれてゐたが、其の大部分は馬の改良増殖及馬事思想の普及と目的とするものではなく、單に賭事を目的とする娛樂機關に過ぎなかつたので、昭和七年(一九三二年)十月朝鮮競馬令を制定、

翌昭和八年(一九三三年)一月一日より之

と實施して従來の不統制な競馬の弊を一掃して、馬産と相聯(關)した公正な競馬を行はしむることとし、京城、釜山、大邱、群山、平壤、新義州の六ヶ所に競馬俱樂部の設立を認可した。次いで各競馬俱樂部の共同利益を増進し、競馬事業の統一進歩を圖るため朝鮮競馬協會の設立を見るに至つた。後昭和十二年(一九三七年)馬産地たる北鮮地方にも競馬を施行することとなり、咸興、清津、及雄基の三ヶ所に新に競馬俱樂部の



設立が認可され、既設六競馬倶楽部と共に競馬を行ひ相當の成績を挙げたるが、情勢の變化は更に統制ある競馬を施行する必要あり。昭和十七年（一九四二年）より各競馬倶楽部及競馬協會を解消し朝鮮馬事會に於て競馬を實施することとなつた。

(四) 朝鮮馬政計畫

近時優良馬に對する需要が益々増加するに至つたので、<sup>總督府</sup>は昭和十二年（一九三七）年、朝鮮馬政計畫を樹立し、内地馬に依つて

No.

増殖を圖る方針を確立した。計畫の内容は生産獎勵地域を咸鏡南北道とし、必要に應じ江原道北部及濟州島にも生産を獎勵することとし、昭和十二年（一九三七年）に改良馬四萬頭を増殖せんとするものである。最近の成績は計畫以上の好結果を示してゐる。

(五) 軍馬資源確保に關する應急施設計畫

國際情勢の變化に依り、鮮内に軍用適格馬の相當数を急遽に確保するの必要を生じたの





馬

飼養 戸数	總 数	数						洋種及雜種		滿州馬		新朝鮮馬		朝鮮馬	
		牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝	牝
明治 43	39860														
44	40976														
大正 1	46565														
2	50652														
3	52545														
4	54639														
5	53017														
6	55380														
7	58217														
8	53240														
9	52521														
10	55421														
11	52994														
12	53276														
13	55146														
14	56569														
47153	28022	28547	236	2180	468	1106	122	110	22196	25181					

[illegible]

馬力能

[illegible]



第三節 緬羊

古來朝鮮に於ては緬羊は王室に於ける祭祀  
用以外には飼養されてゐなかつた。依つて朝  
鮮に飼養が適するや否やを試験するため明治  
四十二年（一九〇九年）日本より洋種羊を移  
入し農事試験場に於て飼育を試みたが其の成  
績は良好でなかつた。越へて大正元年（一九  
一二年）關東都督府より寄贈せられた蒙古羊  
を飼育した所意外にも好成績であつたので、  
大正三年（一九一四年）新に洗浦牧羊支場を

16.

16.

設けて蒙古羊九十七頭を輸入飼養したが、不  
幸にも其の成績は芳ばしくなかつた。依つて  
翌大正四年（一九一五年）再び琿春地方より  
蒙古羊七十九頭を輸入し前年の経験に鑑み、  
寄生虫の驅除、飼養管理に特別の注意を拂ひ  
飼育した所其の成績良好であつたので、大  
正六年（一九一七年）更に二百二十頭を輸入  
し益々良好な成績を挙げた。茲に於て大正八  
年（一九一九年）<sup>總督</sup>本府は新に緬羊飼育計畫を  
樹て、洗浦牧羊支場に専任職員を増置し、北米

合衆國より洋種羊を輸入して改良並に蕃殖試験に着手すると共に、同年以降三ヶ年毎、年蒙古羊四百頭を輸入し、緬羊飼育適地と認められ、北、咸北、咸南、平北、黃海、全南の五道に洗浦牧羊支場生産羊を配付し、實地試験を行ふこととなつた。而して是等の成績は何れも概ね良好であつて、將來を瞻望するに足るものがあつたが、数年ならずして大正十三年（一九二四年）の大規模の行政整理に遭ひ、是等の施設は全廢の處に至り、洗浦支場の緬羊

は民間有志に譲渡された。再來殆んど放任の状態であつたが、當時の配付羊は能く繼續飼養せられ、昭和八年（一九三三年）末調査に於て其の數尙二千六百餘頭を算した。然るに近時國際情勢は著しく國民經濟主義に傾き、羊毛自給の必要が痛感されるに至つたので、昭和九年（一九三四年）再び<sup>總督</sup>本府は緬羊奨勵計畫を樹立して國策的使命の達成を期すると共に、併せて農村振興の一助たらしむることとした。



今其の奨励第一期計畫の大要を述べれば

(一) 奨励方針

朝鮮農家の副業飼育に適し且つ羊毛工業界の要求にも合致する「コリデール」種を以つて奨励品種と定め、先づ飼料豊富で緬羊の飼育に適する西北鮮六ヶ道の農家に對し、一戸當五頭程度の副業的飼育を奨励し、十年後に將來の増殖基礎羊十萬頭に達せしむることを目標とする。

(二) 奨励施設

(1) 種羊供給機關として國立種羊場を設置し、優秀なる原種羊の生産を圖ると共に、急速なる普及を期する為指定された民間牧羊場に於て、國庫補助に依り五年毎、年海外より輸入する二千五百頭の種羊の大量生産を圖り、其の生産羊を農家に對する普及機關である郡農會に供給せしめる。

(2) 指導機關として、<sup>總督府</sup>並に奨励各道に專任職員を置くの外、奨励各郡に國庫補助に依り指導技術員を設置する。



(ハ)民間綿羊事業の保護奨励施設として飼育  
 奨励金の交付、講習講話會補助、羊毛加  
 工事業並に羊肉利用奨励等に對する助成  
 を行ふの外、綿羊關係民間團體に補助金  
 を交付し、その他鐵道運賃の輕減、國有林  
 野の貸付等苟も必要と認むる保護施設を  
 實施する  
 右計畫に基き昭和九年(一九三四年)に於  
 ては濠洲より種羊二千八百九十七頭を輸入し、  
 内二千二百三十四頭は民間牧場として指定

された東洋拓殖會社慶源羊牧場に、他は昭和  
 九年(一九三四年)威海明月川郡に設置された  
 國立種羊場其の他に收容された。  
 斯くて綿羊奨励は着々實行に移され、連年外國  
 より種羊を輸入すると共に、本計畫を擴充し  
 て昭和十二年(一九三七年)には平南順川郡  
 に、昭和十六年(一九四一年)には慶北慶州  
 郡に國立種羊場を、同十六年(一九四一年)  
 には京畿道開豊郡に國立種牡羊育成所を設置  
 し、綿羊飼育奨励を全鮮に及ぼすことになつた。

[illegible][illegible]

尚最近  
に於ける  
緬羊の成績  
を示せば  
左の通り

山 羊 緬 羊 養 兔 養 蜂

明治 大正 昭和	年次	山 羊				緬 羊				養 兔				養 蜂			
		飼養戸数	総頭数	牝	牡	飼養戸数	総頭数	牝	牡	飼養戸数	総頭数	牝	牡	飼養戸数	総箱数	在来種	改良種
			7332				40										
	44		8361				59										
大正	1		10373				82										
	2		10456				56										
	3		11610				142										
	4		14224				220										
	5		13995				289										
	6		15116				571										
	7		16650				670										
	8		17621				962										
	9		21095				1547										
	10		22454				1916										
	11		23193				2153										
	12		25066				2176										
	13		24994				2539										
	14		24275				2319										
昭和	1		24918				2386										
	2		21745				1891										
	3		21743				1803							81169	170705	143304	27401
	4		21166				1659	1291	368	13885	42160	24284	17876	84906	178868	149705	29163
	5	16020	23813	15275	8538	54	1561	1197	364	10616	31245	17793	13452	90027	192540	158656	33884
	6	17482	25601	17339	8262	57	1609	1217	392	9497	30596	18180	12416	91192	192062	155786	36276
	7	18185	27363	18700	8663	56	2208	1677	531	11505	36119	21656	14463	98139	195720	160027	35693
	8	19067	28652	19239	9413	78	2675	2143	532	11895	39182	23904	15278	97535	204372	167333	37040
	9	20743	31177	21501	9676	151	5473	4772	701	13240	45919	29016	16903	97711	201063	164762	36301
	10	22441	34395	23918	10477	433	9388	7927	1411	15672	58898			99469	209170		
	11	25721	39534	28106	11428	690	12143	10443	1700	20722	71613			94611	202533		
	12	28583	43047	30997	12050	1775	19952	17418	2534	15180	49597			97367	199237		
	13					2749	27405	23287	4018	19580	63822			91155	186410		



[illegible]

#### 第四節 豚・鶏

豚・鶏は朝鮮農家の副業的生産に適するの  
で、施政以來之が改良増殖に力を致して農家  
經濟に資すると共に、食肉の供給を補はんとし  
て次の如き施設が講ぜられた。

##### (一) 豚の品種改良

朝鮮豚は体軀矮小、晩熟で而も体量は僅に  
七、八貫内外に過ぎない。依つて早熟性を  
賦與し体軀を大にする方針の下に、コバ  
ン種及其の雜種を以つて改良獎勵種と

132

110

爲し、其の販路及飼料の關係上市邑附近よ  
り其の獎勵を圖ることとし、農事試験場及  
道農事試験場より種豚を配付して指導獎勵  
を加へた所、其の成績は良好で改良種及雜  
種は總頭数の七割強を占むるに至つた。而  
して雜種は朝鮮農家の飼養に好適し、在來豚  
に比し優良なることが一般に認められた。

##### (二) 鶏の品種改良

在來鶏は産卵力少く一ヶ年僅に七十顆内外  
に過ぎず、体量も亦軽く其の飼養は經濟的で

108

ないのて、産卵能力の豊富で体量の肥大な  
白色、トレグホルン種、フポリマウスロスク  
種、名古屋種、フロードアイランドレツ  
ド種を改良奨励種と定め、先づ適當の地  
方に集團的に飼養改良せしめて、漸次一般に  
及ぼす方針の下に、農事試験場及道農事試  
験場より種禽、種卵を配付して奨励に努め  
た所、改良種は既に總数の五割強を占むる  
に至つた。而して改良鶏は卵量及産卵数の  
卓越せることは依り農家一般に歡迎せられ

るに至つたが、体形の大きな割合に在來鶏  
に對し、値開きの無い取引上の慣行があるた  
り、其の二層の普及が阻害されてゐるやうに  
見受けられる。

(三) 飼養管理法の改良

在來豚舎は其の構造極めて粗悪で衛生、防  
寒、及肥料の増産上不適當なので一般に得  
易い材料を以つて其の改造を奨励すると夫  
に、鶏舎に付ても在來の軒下吊巢又は矮小  
な籠釣を改め得易き材料を以つて簡易な鶏



舎の築造を奨励した結果逐年是等改良豚鶏

舎の築造は増加するに至つた。

#### 四 豚鶏模範部落及養豚契

豚鶏は一部落に集團的奨励を為し之を中心

として漸次一般に普及せしむるを必要且つ

便宜と認め、各地に契及模範部落を設けた。

養豚契及模範部落は何れも種豚を共有し

て改良種の血液普及を圖り、主として雜種

改良を奨励してゐる。養鶏に付ては模範部

落に於て品種改良を奨励してゐるが、鶏は

比較的改良し易いので純粹改良種のみを以

つて満たされてゐる模範部落も少くない。

#### 五 豚増殖計畫

有畜農業の普及と食肉、皮革資源の涵養を

圖る爲に、種及其の雜種の飼育

を主眼として、昭和十六年（一九四一年）

度以降五箇年を期し二百二十萬頭増殖計畫

が實施されたが飼料、食糧等の不足に因り

其の成績は良好でない。

豚鶏の改良及増殖は朝鮮農家の理解を得る

[illegible]

135

月永

	飼養 戸数	総数		数 牛	朝鮮種		バークシャー種 其ノ雜種		ヨークシャー種 其ノ雜種		支那種 其ノ雜種		其ノ他 牛	
		総数	牛		牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛
明治 43		565,757												
44		572,840												
大正 1		616,945												
2		761,186												
3		757,803												
4		716,540												
5		780,077												
6		832,280												
7		923,777												
8		962,785												
9		972,368												
10		1,010,776												
11		1,100,721												
12		1,172,128												
13		1,127,928												
昭和 14	737,775	1,150,027	672,972	477,055	504,997	367,862	146,217	87,604	41,08	2293	14,677	12,338	2,273	2458
1	772,310	1,220,677	677,784	542,895	476,606	398,891	175,880	121,770	6307	4784	12,411	16,096	15,80	934
2	818,776	1,244,468	678,849	565,619	461,033	394,815	186,258	143,437	6,449	4,785	23,685	21,794	924	588
3	836,418	1,277,816	700,922	576,894	455,346	389,055	212,197	160,253	6,116	4,632	26,483	22,563	780	391
4	874,287	1,327,983	722,364	605,619	454,927	390,390	231,323	184,809	6,179	4,675	28,670	24,654	1,263	1,091
5	912,116	1,386,891	752,795	629,096	445,483	380,963	274,333	217,862	6,738	5,151	29,486	24,767	1,555	1,151
6	902,142	1,348,199	743,551	604,648	410,333	347,348	294,787	227,273	6,325	4,457	30,118	26,026	1,988	1,314
7	912,760	1,339,473	751,743	587,730	382,201	317,290	330,521	240,280	5,112	3,439	31,214	26,026	1,625	695
8	976,933	1,425,142	816,081	609,055	384,275	304,427	375,158	274,613	4,340	3,121	32,100	26,764	194	130
9	1,103,124	1,583,513	919,261	664,252	385,374	301,137	488,861	326,307	5,606	4,280	37,052	32,019	368	509
10	1,153,493	1,616,408	941,680	674,728	362,242	279,390	536,404	359,673	4,805	3,313	37,455	31,327	774	1,025
11	1,136,946	1,573,590	928,264	645,326	331,622	247,653	524,779	358,586	5,646	3,331	41,167	32,741	135	1,010

12	1,184,342	1,625,091	957,928	667,163	317,287	240,905	596,061	387,284	3,137	1,972	37,544	34,987	1,877	2,015
13	1,124,237	1,506,628	902,445	604,183	276,641	200,010	582,266	367,596	2,850	1,691	37,650	30,683	2,038	2,203





豚ノ動態

	出		産		死		屠		殺		撲		殺
	總數	牝	牝	總數	牝	牝	總數	牝	牝	總數	牝	牝	
昭和4年	1109.223	577.908	<sup>531.315</sup> <del>515.862</del>	124.604	65.346	57.258	748.417	367.254	381.163	29	10	19	
5	1.058.859	540.997	<sup>515.862</sup> <del>490.815</del>	137.746	67.732	68.014	722.062	356.288	365.774	172	94	84	
6	1.037.592	546.777	<sup>490.815</sup> <del>473.797</del>	124.046	65.002	59.444	725.796	361.282	364.514	80	81	39	
7	1.001.572	527.781	<sup>473.797</sup> <del>447.743</del>	122.329	64.862	57.467	687.217	340.465	348.752	78	52	26	
8	1.072.351	572.448	477.903	122.034	64.553	57.481	753.602	368.269	367.333	169	82	87	
9	1.218.258	645.731	572.527	132.469	71.351	61.118	841.057	430.981	410.076	67	37	32	
10	1.230.133	652.159	572.974	134.037	71.478	<sup>62.559</sup> <del>57.481</del>	925.587	481.186	444.401				
11	1.215.490	650.649	564.841	142.239	75.931	<sup>66.308</sup> <del>61.118</del>	875.714	454.688	419.026	8	6	2	
12	1.251.864	673.604	578.260	139.255	75.172	62.083	800.936	415.811	385.125	410	196	214	
13	1.151.405	625.421	525.784	131.148	71.656	59.492	830.750	446.862	383.888	528	315	213	
14	1.048.189	573.662	474.527	123.411	67.555	55.856	771.248	427.344	343.904	93	51	42	
15	1.008.216	546.574	461.642	120.545	65.770	54.775	544.814	299.696	245.118	353	202	151	
16	956.971	518.172	438.799	132.207	71.537	61.672	500.107	265.622	234.485	72	36	36	
17	858.498	462.620	395.878	129.046	67.796	59.250	536.581	287.904	248.677	154	78	76	

鶏

明治 昭和	年 月	飼養 総数		数		朝鮮種		白色レグホーン種		名古種		其 他	
		戸数	総数	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄	雌	雄
明治	43		2796259										
	44		3421312										
	1		3931632										
	2		4194335										
	3		4110234										
	4		4278239										
	5		4400351										
	6		4566639										
	7		4913322										
	8		4998483										
	9		5246121										
	10		5626201										
	11		5874227										
	12		6093168										
	13		5909178										
昭和	14	1537497	6120577	4302559	1808018	3304321	1426829	401583	139589	255049	105616	341606	145784
	1	1536462	6080655	4197087	1888568	3059555	1414787	424162	175431	321107	141402	342263	151948
	2	1530238	6072027	4127915	1944112	2915403	1434155	528654	261276	351877	160855	331981	147846
	3	1531856	6135950	4182469	1953481	2825912	1387375	614097	237253	437838	193895	304620	130938
	4	1548931	6185277	4248916	1936361	2755783	1326312	702030	263331	499830	221241	291273	125477
	5	1541466	6146443	4242834	1903809	2658563	1264431	782696	287788	551606	243594	249769	105996
	6	1548413	6294672	4389900	1904772	2608179	1225736	714692	316130	621015	262289	246014	100617
	7	1557491	6601477	4640395	1961082	2656247	1222592	1045188	355731	708811	287003	230149	95756
	8	1580637	6868037	4852076	2015961	2620774	1208862	1242278	407766	772871	311576	216153	87757
	9	1639784	7178725	5107018	2071707	2643215	1212088	1432151	446536	806229	319438	225423	93618
	10	1650483	7117847	5056007	2061140	2477867	1151867	1533728	485278	833061	337713	209351	86282
	11	1657774	7118089	5095065	2023024	2376686	1087538	7619514	517432	896416	342194	182449	75861
	12	1689048	7221132	5246460	1974672	2334376	1000788	1789392	535447	951866	366793	170826	71544
	13	1679742	7165166	5243022	1922144	2225515	949556	1887879	541410	963903	360470	165725	70208



明治 43

大正 44

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

昭和 1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

2796259

3421312

3931632

4194335

4110234

4278239

4400351

4566639

4913322

4998483

5246121

5626201

5874227

6093168

5909178

1537.497 6120.577 4302.559 1808.018 3304.321 1426.827 401.583 139.589 255.049 105.816 341.606 145.984

1536.462 6080.655 4197.087 1888.568 3059.555 1414.787 424.162 175.431 321.107 141.402 342.263 151.948

1530.238 6072.027 4127.915 1944.112 2915.403 1434.155 528.654 261.276 351.877 160.855 331.981 147.846

1531.856 6135.950 4182.469 1953.481 2825.912 1387.375 614.097 237.253 437.838 193.895 304.620 130.938

1548.931 6185.277 4248.916 1936.361 2755.783 1326.312 702.030 263.331 499.830 221.241 291.273 125.477

1541.466 6146.443 4242.834 1903.809 2658.563 1264.431 782.696 289.788 551.606 243.594 249.769 105.996

1548.413 6294.672 4389.900 1904.772 2608.179 1225.736 914.692 316.130 621.015 262.289 246.014 100.617

1557.491 6601.477 4640.395 1961.082 2656.247 1222.592 1045.188 355.731 708.811 287.003 230.149 95.756

1580.637 6868.037 4852.076 2015.961 2620.774 1208.862 1242.278 407.766 772.871 311.576 216.153 87.757

1637.754 7178.725 5107.018 2071.907 2643.215 1212.088 1432.151 446.536 806.229 319.458 225.423 93.618

1650.483 7117.847 5056.007 2061.140 2477.867 1151.867 1533.728 485.278 833.061 337.713 209.351 86.282

1657.774 7118.089 5095.065 2023.024 2376.686 1087.538 1619.514 517.432 896.416 342.194 182.449 75.861

1689.048 7221.132 5246.460 1974.672 2334.376 1000.788 1789.392 535.447 951.866 366.793 170.826 71.544

1679.742 7165.166 5243.022 1922.144 2225.515 942.556 1887.879 541.410 963.903 360.470 165.725 70.208

1646.540 6976.821 5134.151 1842.670 2235.338 914.921 1802.229 506.940 938.650 358.173 157.934 62.636

1653.767 6690.479 4885.497 1804.982 2148.858 886.362 1698.670 509.618 904.180 355.111 133.789 53.891

1580.816 6284.772 4549.595 1735.377 2125.862 916.040 1498.208 455.385 829.589 319.887 95.936 44.085

1491.747 5693.602 4134.384 1559.218 2093.319 856.716 1255.621 371.528 713.421 278.485 72.023 32.789

第五節 牛皮其の他の畜産物

朝鮮に於ける畜産物には牛皮、牛脂、牛骨、

馬皮、犬皮、豚脂、豚毛、鶏卵、牛乳、蜂

蜜、蜜蠟等があるが、就中重要なものは牛皮、

鶏卵及蜂蜜である。

(一) 牛皮

朝鮮に於ては古來肉食が行はれ、屠牛数も多

く皮革は遠き往時から相當利用せられた形

跡があり、明治十年（一八九七年）頃既

に六十萬圓の輸移出額があつて逐年増

136 110

加を示してゐた。然し朝鮮牛皮は元來其の

質緻密強靱で品質良好であるが、從來其の

取扱が不良で傷痕皸裂が多く、之が為聲價を

失することが甚しかった。依つて本府は施

政以來其の調製改良に努め

(1) 鞍具を改良して鞍傷痕の原因を除去、寄生

虫疾患を豫防し糞塊の附着を防ぐこと

(2) 在來の牛醫を教養して彼等の慣用する鍼

療、烙鐵等の濫用を禁ずること

(3) 剥皮法及剥皮刀を改良して刀痕を防ぐこ

(50810)

(4) 塩  
↓  
乾  
皮製造法を奨励して保存の方法を

(5) 乾燥法及捲き方折疊み方を改良すこと

等の改良施設を奨励し、之を加實行に當つては

地方廳又は郡農會指導の下に、牛皮改良組

を組織せしめて其の地方生産牛皮の改良を

圖  
？  
特  
に  
生  
産  
地  
方  
に  
は  
塩  
蔵  
乾  
皮  
製  
造  
所  
と

設置せしめて之を奨励し、或は改良剥皮刀

を配付して剥皮法の改良を圖り、或は屠夫教

育の爲講習會を開く等各般の手段を講じた。

其の糸糸果草月鮮牛皮は漸次其の面目を改め

改良牛皮と稱するものは、總生産額の五割強

を
占
む
る
に
至
つ
た。

尙最近に於ける生産額を示せば左の通りであ

3.









(二) 鶏卵

改良品種の普及と飼育数の増加に伴ひ、鶏卵の生産は逐年著しい増加を示してゐる。之が販賣處理に付ては從來極力共同販賣を奨励したので、京畿、忠南、慶南の各道を初め、鐵道沿線の各地に於ては養鶏組合又は部落に於て共同出荷を爲すもの増加し、道、郡農會の販賣轉旋に依り販路の擴張と収益の増加に努めて來た。

(三) 蜂蜜、蜜蠟、其の他の畜産物

朝鮮に於ては古くより藥用並に食用として蜂蜜を賞用してゐたので、養蜂は廣く行はれてゐた。最近に於ては改良種を飼養する者各地方に漸次増加し、將來相當發達する見込がある。

其の他畜産物としては、牛脂、牛骨、牛毛、馬皮、犬皮、豚脂、豚毛、牛乳等が主なものである。各相當の産額を有してゐる。牛骨、牛毛、豚毛の如きは從來遺棄して顧みなかつたものがあるが、近年に於ては其の利用は相當進めら



[illegible][illegible]

第六節 家畜傳染病豫防

朝鮮に於ける主な家畜傳染病は牛疫、口蹄

牛肺疫、炭疽、氣腫疽、鼻疽、豚コレラ、

豚痘及狂犬病であつて、中、牛痘、口蹄疫

牛肺疫及鼻疽は滿州地方より侵入し、其の他は

鮮肉に常在してゐる。  
之が豫防施設の大要を

3	求
3	〃
水	
は	〃

(一) 豫防令の制定

從來家畜傳染病に對する豫防制遏の施設が

乏しかつたので、大正四年（一九一五年）  
獣

(二) 國境防疫

疫	豫防令を發布して	豫防上必要な施設を	勵
行し、	後之を改正、	家畜傳染病豫防令と	改
名施行して、	之が	豫防制遏上遺憾なきを	期す
る	こととなつた。		

名  
施  
行  
し  
こ  
之  
か  
豫  
防  
制  
遏  
上  
遺  
憾  
な  
き  
と  
其  
用  
す

3
こ
と
と
な
つ
た

國境より侵入した傳染病中、牛疫、口蹄疫

は  
特  
に  
其  
の  
蔓  
延  
が  
速  
か  
で  
惨  
害  
を  
齎  
す  
こ  
と  
が

多いので、  
国境地方の牛、  
羊其の他  
病毒傳

染の疑ある物件の輸入を停止した外最も

害の大きい牛疫に對しては、大正十五年（一

九二六年	以來	牛疫免疫地帯を設け、國境第一線の畜牛に毎年一齊豫防注射を實施してゐる。	又鼻疽に對しては大正七年（一九一八年）以來平安北道對岸より輸入する馬・驢・騾に對し、新義州外六ヶ所に於て檢疫を施行し、後此の制度を咸鏡南北道に擴充して之が防止の萬全を期してゐる。	(三) 常在病の豫防	氣腫疽は北鮮の一部地方を除く外殆んど全鮮に常在してゐるので、先づ多發地に免疫
------	----	-------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------	------------	----------------------------------------

地區を設定して、定期豫防注射を實施し、其の根滅に努めてゐる。	又炭疽、狂犬病等に對しても、年々發生地に豫防注射を實施してゐる。	(四) 獸疫血清製造所の移管及其の擴張	牛疫豫防上必要な牛疫血清は、當初農商務省所管の釜山牛疫血清製造所から購入してゐたのであるが、朝鮮に於ける牛疫血清の所要量年々増加し、且つ牛疫血清以外の血清及豫防液の需要が増大したので、大正七年（一
--------------------------------	----------------------------------	---------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------



[illegible]

九一八年	同所を	本府	に移管し、其の規模
を擴張して	是等諸液の製造高を増加し専ら	供給の圓滑を圖つてゐる。	
(五)移出牛の検査			
本施設は第一節牛に於て述べた所があった			
の下之を省略する。			

## 第七章 肥料

### 第一節 概論

施政以前に於ける朝鮮の農業は所謂掠奪農法であつて農作物の栽培に肥料を使用することとは極めて少なかった。依つて施政以來肥料増施の必要を認め先づ自給肥料の増産を奨励し來つたのであるが、民度が向上し施肥に對する觀念の發達するに伴ひ大正八年（一九一九年）以降販賣肥料中安全なものゝ奨励に着手し、更に近年産米、植桑、棉作等各種農産

増殖計畫の進展に依り益々施肥の増加を必要とするに及び、<sup>總督府</sup>府は自給肥料の外販賣肥料に對しても積極的に之を奨励するの必要を認め、昭和元年（一九二六年）肥料改良増施計畫を樹立し、又肥料購入資金融通の途を開き、次いで昭和三年（一九二八年）朝鮮肥料取締令を實施した。再來是等施設實施の效果は相當顯著なものがあつた。現下農村の實情に鑑み、今後尚自給肥料の徹底的増産、販賣肥料の廉價供給、肥料の合理的經濟的使用法の普

[illegible]

及に關し必要なる施設を講じ肥料經濟の改善を圖る必要がある。

を	及
園	に
る	際 <sup>に</sup>
必要	し
が	必要
ある。	なる
	施設
	を
	講じ
	肥料
	經濟
	の
	改善



## 第二節 自給肥料

自給肥料の増産奨励は施政以來朝鮮に於ける肥料奨励の根本方針として極力努力を拂つて來たのであるが、特に昭和元年（一九一六年）には肥料改良増施奨励計畫を樹立實施し、主として堆肥並に緑肥の普及増産を圖り、計畫完成年度たる昭和十年度（一九三五年）に於て堆肥六十六億萬貫、緑肥八億萬貫の肥料の自給を期することとした。本計畫は略所期の成績を挙げたのであるが、尙自給肥料生

産額は耕地反當百五十八貫に過ぎず、耕地の地力を維持するに必要な数量にすら達しないので、更に昭和十一年（一九三六年）より同二十年（一九四五年）の十ヶ年を期間とする第二次自給肥料増産計畫を樹立し、諸施設に對し毎年國庫より補助金を交付して、自給肥料の増産に努力することとした。然し農家は極端な販賣肥料依存の觀念に迷ひ、自給肥料の重要性を忘却するの傾向を生じたばかりでなく、栽培緑肥に在つては種子の不足、指導力の

不足、農家の栽培技術の未熟等の原因に因り、  
又堆肥に在っては材料の蒐集困難、指導督  
勵力の不足等各種の困難な事情に阻まれ、本  
計畫の實現が困難となつたので、本計畫後半の  
昭和十六年（一九四一年）度より後五ヶ年の  
計畫を更改し、堆肥の目標は耕地反當二百七  
貫を確保し、他面栽培緑肥の増産に全力を集中  
して、自給肥料の増産目標耕地反當施用量二  
百九十貫を確保實現することとした。而して  
昭和十六年（一九四一年）の實績は生産量百

十一億六千餘萬貫、反當二百六十一貫であつ  
た。  
尚本計畫に對し、<sup>總督</sup>本府は毎年四十萬八千餘  
圓を、技術員設置、種子代、採種圃設置、原  
種圃設置、根瘤菌培養配付、試験調査、液肥  
溜設置の諸経費に補助してゐる。



第三節 販賣肥料

(一) 販賣肥料の奨励

施政當初に於ては、農家の經濟状態が貧弱であり、又肥料に關する知識が幼稚であつたので、販賣肥料の奨励を行はず寧ろ之を抑制する方針を採つて來たのであるが、其の後農家の經濟状態が漸次潤澤となり進んで販賣肥料を施用せんとする者が増加し來つたので、大正八年（一九一九年）以來技術員指導の下に、大豆、粕、其の他の有機質肥料の肥

147

料成分確實、施用方法簡易なものに限り施用せしむることとした。然し昭和元年（一九二六年）度以降は産米増殖計畫の更新に伴ひ一層積極的に奨励することとなり、肥料の購入、其の他の農事改良資金に對し低利資金を融通し、又指導奨励技術員を充實した。この販賣肥料に對する需要は近年急激なる増加を來すに至つた。而して昭和十六年（一九四一年）に於ける販賣肥料の使用高を、見ると九千三百五十三萬圓であるが、事



變以來肥料の供給が漸次不圓滑となつたの  
 で、朝鮮臨時肥料配給統制令を施行し、販賣  
 先、販賣数量、販賣價格等に統制を加へ配  
 給の圓滑を圖ることとした。  
 (二) 販賣肥料の取締  
 前述の如く販賣肥料に對する需要は逐年躍  
 進的に増加してゐるが、農家の肥料に關す  
 る智識は淺々として進まず、其の大部分は  
 肥料の實質鑑識力を缺く情態で、此の間一  
 部奸商の乗ずる所となり、不正粗悪肥料の横

行甚しく之に依り農家の被る損害多大なる  
 のみならず、延いては農産増殖の遂行を阻  
 害する虞を生じたので、~~政府~~府は昭和二年（  
 一九二七年）九月朝鮮肥料取締令を公布し、  
 昭和三年（一九二八年）一月之を實施し、各  
 道に肥料取締官を設置して販賣肥料の取締  
 を爲さじめ、農家が安易に優良肥料を購入  
 し得る方途を講ずることとした。

# 第四節 土性調査

鮮内農家の肥料消費額は逐年激増し來つた  
 のであるが、施肥法を見るに概ね旧慣に捉は  
 れ何等土性、氣候、作物の特性を考慮せず、  
 徒に肥料を濫用する傾向が益々甚しくなつた  
 ので、其の弊害を矯正する爲、施肥法合理化に  
 關する施設を講ずる必要を認め、~~本府~~<sup>總督</sup>は昭和十  
 一年へ一九三六年一度以降十年を期間とす  
 る土性調査計畫を樹立し、  
 現地調査、土壤の  
 理化学分析、肥料試験、施肥處方箋の作製を

行ふ爲、各道農事試験場及~~本府~~<sup>總督</sup>農事試験場に  
 技術員を配置し、之を統一監督する爲~~本府~~<sup>總督</sup>に係  
 官を設置した。本調査は全鮮主要耕地水利安  
 全番七十七萬町歩、田八十三萬町歩、計百六  
 十萬町歩並に道費に依る調査面積番十七萬五  
 千町歩、田五十一萬八千町歩、總計二百二十九  
 萬三千町歩の性情を明にし、是に適應する作  
 物の種類の決定及耕種法改善の基礎を確立し、  
 農家をして施肥上誤る所無からしめんとす  
 るものである。而して昭和十六年（一九四一年）

[illegible][illegible]

度末迄の土壤現地調査の進捗状況は、國費、	地方費に依るものを合せて、前九十四萬一千九	百七十五町歩、田九十五萬四千三百九十町歩	がある。
----------------------	-----------------------	----------------------	------



第八章 穀物検査

施政以來<sup>總督</sup>府が銳意米穀の改良に意を用ひ、又販路開拓にも諸般の施設を試みた結果、朝鮮産穀物の需要は漸次増進し、輸移出額も増加を見るに至つたが、一般農家は乾燥調製に意を用ひず、輸移<sup>出</sup>商人が再製改装する状態で、異品種、土砂其の他夾雜物の混入、乾燥の不充分、包装の不完全等に對する非難の聲は、<sup>々々</sup>として起り、日本移出を阻止する虞を生じたので、<sup>總督</sup>府は産米の聲價を向上し取引の圓滑

を圖る爲、輸移出玄米検査の必要を認め、大正四年（一九一五年）二月米穀検査規則を制定し、道知事又は穀物組合等をして之を實施せしめることとした。之に依り移出玄米の聲價は漸次回復を見るに至つたが、過去の實績に鑑み、大正六年（一九一七年）九月該規則を改正して従來に比し検査程度を高め一般に不良米の輸移出及道外搬出を禁止すると共に、検査機関を統一して道知事をして之を實施せしめることとし、更に大正十一年（一九二二年）

七月には一層検査程度と高め同時に各道（咸鏡北道を除く）をして白米検査をも実施せしむるため同規則を改正した。尚大豆に付ても玄米と同じく改良の必要を認め大正十一年（一九二二年）四月大豆検査規則を發布し道知事をして検査を実施せしめて来たが各道に於て各個に検査を施行したため検査の不統一其の他の弊害を生じ、為に聲價を甚しく損傷するの爲検査の統一を圖ると共に取引の圓滑を期する爲、昭和七年（一九三二年）九月朝

鮮穀物検査令を制定し同年十一月より穀物検査事業を國營に移管し朝鮮總督の権限の下に國の事業として行ふこととした。尚取引の實情に鑑み昭和九年（一九三四）年十月穀物検査規則を公布し希望者に対し検査を行つたが、更に検査の効果を徹底せしめ、爲昭和十年（一九三五年）十月同規則を廢し穀物検査令施行規則を改正し搬出穀全般に亘り検査を実施した。尚昭和十四年（一九三九年）九月朝鮮穀物

検査令施行規則を改正し、玉蜀黍の搬出検査を  
 実施し、次いで昭和十五年（一九四〇年）八月  
 同規則を改正して大麥及裸麥の搬出検査をも  
 実施した。

穀物検査施行以来其の成績は甚だ顯著であつ  
 て、土砂其の他の夾雜物の混入は減少し、容量  
 及包装は一定されて朝鮮産穀物の聲價を昂止  
 すると共に、取引も安全且つ確實に行はれ、檢  
 査當初に比し、日本の同格品との値開も著し  
 く縮少するの利益を生ずるに至つた。又間接

の効果としては農家は乾燥調製に注意を拂ふ  
 に至り、玄米調製の機運も助長されて、朝鮮産  
 穀物の改良上多大の成績を示してゐる。



第九章 米穀統制

一 米穀倉庫計畫

朝鮮米の品位は米穀検査施行以來著しく向上統一せられ、日本に於ける取引に於ても年々逐ひ其の聲價を高むるに至つた。然るに從來朝鮮の農家は其の經濟狀態が極りて貧弱であり、而も生産物に對する處理機關も不備であつたので、生産米は餘義なく之を收穫期に於て放賣する慣行があり、鮮米の移出は著しく季節的に偏倚し、其の大半は出

184

來秋より僅か四、五ヶ月間に移出せられる實情であつた。其の爲日本の農村及市場に大きな影響を與へると同時に、朝鮮農家の蒙る損失も亦尠からざるものがあつた。

<sup>總督</sup>府は這般の情勢に鑑み、農業倉庫を設置し

て生産者の出來秋に於ける放賣を防止し、

値頃に依る平均賣の奨励に依つて移出米の

統制を併せ行ふ方途を講じたのであつた。

更に昭和五年（一九三〇年）米穀倉庫計畫

を樹立し、主として生産地に米穀の保管を

目的とする農業倉庫を設置すると共に、開港地に移出米の調節を目的とする移出米穀倉庫を設置して、穀上の使命を完うせしめ、兩者相俟つて季節的過剰移出数量の調節を計ることとした。米穀倉庫計畫は當時の季節的過剰移出数量百萬石を調節する目的を以つて、昭和五年（一九三〇年）度より向ふ七ヶ年を期し農業倉庫及移出米穀倉庫を設置せんとするもので、其の概要は

(一) 農業倉庫は倉庫一ヶ所の規模二百五十坪

155

其の収容力一萬石とし、毎年十ヶ所宛計五十ヶ所、其の収容力五十萬石の倉庫を生産地に設置するものとする。

(二) 移出米穀倉庫は毎年一定の備庫、新設、買収等に依り七ヶ年後には其の總坪數一萬二千五百坪、其の収容力五十萬石の倉庫を移出地に設置するものとする。

(三) 右計畫に依る倉庫建設に對し農業倉庫は建設費の七割以内、經營費一ヶ所年千五百圓宛三ヶ年間、移出米穀倉庫は新設、

買収又は借庫に要する費用の六割以内を
國庫より補助するものとする。
尚右兩倉庫に貯藏する米穀に對しては大藏
省預金部資金が融通された。
二米穀移出統制計畫
出廻期に於ける鮮米の移出殺到を調節する
為、昭和五年（一九三〇年）に米穀倉庫計
畫が樹立され玄米百萬石を統制することと
なつたのであるが、其の後産米の増加、品
質の改良等に依り移出米の増加を來し、右

計畫のみでは季節的偏倚移出の矯正が困難
となつたので、昭和八年（一九三三年）米
穀移出統制計畫を樹立し、米穀倉庫計畫の
補強工作として粗貯藏倉庫の建設、粗の野
積施設及社還米施設等を講じ、前述米穀倉
庫計畫と相俟つて玄米換算百五十六萬石を
調製することとなつた。
尚本計畫に依り貯藏せられる米穀に對して
は大藏省預金部資金を吸入し融通すること
になつてゐる。



(一) 穀貯蔵倉庫

倉庫一ヶ所の規模二百五十坪其の収容力  
一萬石とし、昭和八、九年（一九三三、  
三四年）の二ヶ年間に毎年十ヶ所宛計二  
十ヶ所、其の収容力二十萬石の倉庫を生  
産地に設置し、倉庫建設費に對しては其  
の七割、經營費に對しては一ヶ所年六百  
圓を三ヶ年間國庫より補助するものとす。  
(二) 穀の野積施設  
穀八十萬石を野積する計畫であつたが、

(三) 社還米施設

昭和八年（一九三三年）産米に對する應  
急施設として建設された穀倉庫に收容す  
ることとなつた。  
邑面を事業主体とし、米穀の出廻期に穀  
を買取り春窮期に細農に對し食糧又は種  
穀として貸付け、秋收期に穀を以つて回  
收し米穀の調節を計り、併せて細農の救済  
に資せんとするものである。尚穀の買取  
資金の利子に對しては國庫より補助金をと

交付する。

以上は米穀統制に関する施設の必要である

が、米穀倉庫計画に依つて建設された倉庫

の実績は昭和十六年（一九四一年）度末現

在左の通りである。

### 米穀倉庫計画実績表

農業倉庫	倉庫坪数	収容力
移出米穀倉庫	一、五四三坪	四五九、一三三石
	七六九、〇二	二七二、八〇四石

備考

一、米穀倉庫計画に依る農業倉庫の坪数は二

158

一、五四三坪であるが、此の外農業倉庫と

して経費してゐるものに米穀移出計画に

依る倉庫五、一一五坪、昭和八年（一九三

三年）産米に對する應急施設として建設

せる倉庫一、四五一坪、其の他一、三七一

坪計一、八九三七坪がある。

二、移出米穀倉庫の中には國庫補助に依るも

のの外自己資金で建設せるものを含む。

# 第十章 農業制度

## 第一節 小作慣行

朝鮮に於ける小作慣行は其の由來頗る遠く、地方に依り地主に依り又土地の肥瘠、作物の種類、所有者の相異等に依り異なるが、茲には其の最も普通に行はれてゐる慣行について略述することとする。

小作契約は一部に於ては證書契約を爲す者もあるが一般には口頭契約を以つて之を定め、從來地主の一方的意思を以つて自由に小作

人を變更するを慣習とした。小作料は契約又は慣例に依り額又は率を定め、土地の收穫物を以つて授受するを通例とするも、往々代物納となし又は金銭納とするものもある。小作料の納付は收穫後二、三ヶ月遅くも陰曆十二月末迄に地主の居宅又は其の指定する場所に運搬すやきものであつて、納付場所が所在地より二里若は三里以上に及ぶ場合には其の超過部分に對する運賃は地主が負擔するものもある。



大地主の多くは都邑に居住し所有地を挙げて  
他人の管理に附するを例とし、又大地主に非  
ざる者で管理人を置く者もある。此等管理人  
を普通舎音と稱し、舎音は地主の近親者又は信  
用ある者より選任され、小作人の選定、變更、監  
督、小作料の決定及其の取立、保管、運搬、  
納税代理及土地の修繕監督等を任務とするを  
普通とする。

小作料の徴收方法は之を區別して定租法、  
執租法及打租法の三とする。

(一) 定租法

此の方法は年の豊凶に關せず年々一定額の  
小作料を納むるものであつて、番よりも田に  
多く行はれる。蓋し番は灌溉排水の便が無  
ければ此の方法は地主、小作人両者に不利  
益なる場合があるからである。従つて番に  
於ては灌溉排水の設備の便ある良番をなけ  
れば此の方法に依らないのを普通とする。  
小作料決定の標準は平年作の四割乃至五割  
を普通とし中には六割に達するものもある。

(二) 執租法

毎年作物の登熟前地主自ら若は合資其の他の代理人を派して小作人立會の上立毛の儘收穫量を達觀し（會社農場等は坪川査定を爲すものが多い）小作料額を決定する方法である。従つて此の方法は次に述ぶる打租法の如く地主が一々刈取又は打穀に立會い煩わづらかない。小作料の率は打租と同様五割を標準とするが、往々地主側に於て單獨檢見を爲し小作料額を決定する者もあるが、

(三) 打租法

實納小作料額は實際收穫高の六、七割に達する場合もある。  
此の方法は地主又は其の代理人が小作人と立會の上收穫の際稲束の数を以つて或は打穀調製の際穀物の量を以つて折半するを原則とする。然し租税、種子の負擔關係又は兼耕けんかう類の歸屬關係等に依り收穫の分配率に多少の相違がある。  
以上各方法を通じて二毛作を爲す場合は裏作

に對し小作料を徴收しないことを慣例とした  
 が、近來之を取立てるものが増加してゐる。肥  
 料は自給肥料の場合には全然小作人の負擔に屬  
 するが、小作料を打組又は執組とし金肥を使  
 用する場合に於ては、地主半量を負擔し殘餘  
 の半量は之を小作人の負擔とし、其の現品を  
 無利子又は利子を徴し地主より貸付くる方法  
 を行ふ者もある。地税に付ては定組法、執組  
 法の場合には概ね地主の負擔とずるものが多  
 い。

金音報酬に付ては種々の例があり一定しな

いが小作人に於て相當の負擔を爲すものも少  
 くない。

次に小作料の減免は定組法に在つては、災害  
 の多少に依り夫々地方の慣習に基いて之を輕  
 減してゐるが、執組法、打組法に於ては、實  
 際收穫高の折半を標準として年々の小作料を  
 定め、そので、收穫の増減に依る利、不利は自  
 ら地主、小作人に均等に介擔せられる。然  
 し作柄が不良で三割作程度に過ぎない場合に  
 は、其の方法の如何に拘らず小作料を免除する



を例としてゐる。

以上は朝鮮に於ける從來の小作慣行の大様であるが、長所と認むべき点は極めて少く幾多の欠点を有してゐる。

翻つて朝鮮農家の現状を見るに、農家戸数は昭和十七年（一九四二年）末現在に於て三百五萬

三千餘戸

あつて朝鮮總戸数の六割を占め而も其の大部分は小作農階級に屬し百六十四萬一千餘戸、農家總戸数の五割三分に達する状態である。従つて是等小作農<sup>農民</sup>大衆の生活の安定

No.

と向上とを圖る爲<sup>地</sup>に政以來幾多の施設が講ぜ

られたのであつたが、小作慣行については前述の如く幾多の欠点があり、小作地の生産力の増進、小作農の生活安定を阻害するものが甚く

ない。昭和三年（一九二八年）二月<sup>總督府</sup>内に臨時小作調査委員會を設置し、其の調査の結果に基き昭和三年（一九二八年）七月小

作慣行改善要綱を決定し、行政的指導に依り之が改善を圖ることとした。然し積年の慣行は深く浸潤し容易に改まらず、加ふるに時代

No.

の推移に伴ひ小作爭議の増加する傾向が顯著となつたので、昭和八年（一九三三年）二月より朝鮮小作調停令を施行し、當事者の妥協互譲の精神に則り爭議の圓滿解決を期することとした。然し本小作調停令は爭議の應急的對策に過ぎないものであつて、小作關係の弊害を根本的に芟除し小作農の地位安定を圖り、小作農民をして専心農事に精勵せしめ地主小作人の協調融和、共存共榮の實を挙げしむるには、更に進んで小作關係を立法的に調整す

る必要があるので、曩に昭和二年（一九二七年）以降六年の星霜を費して完了した小作慣行調査並に臨時小作調査委員會の答申及各方面の輿論を參酌じ、昭和十年（一九三五年）十月朝鮮農地令を公布して耕作權の確保を圖つた。更に昭和十四年（一九三九年）には戰時物價抑制の爲價格等の引上停止が行はれたので、農産物價格構成の重要部分を占むる小作料に付とも、國家總動員法に基き小作料統制令

[illegible][illegible]

165-



## 第二節 中小農民保護

朝鮮に於ける農業者の大多數は小農民及大地主の二階級に屬し、自己の耕地と自ら耕作する自作農民は其の數比較的少く、所謂社會組織の中堅を缺<sup>レ</sup>し、之が爲農業の發達を阻害するばかりでなく動もすれば社會組織の安固を脅威する虞があつた。而も經濟、交通等百般の發展に伴ひ、土地の兼併を熾なりしめ次第に自作農の數を減少せんとする傾向があつたので、施政後に於ては其の對策として左の施

設を講じ自作農の減少を防止すると共に、小作農を保護し其の地位を向上せしめて之を中小獨立營農者たらしむることになつた。

### (一) 土地兼併の防止

大正元年（一九一二年）十一月總督は一重要訓令を發して、農事經營を標榜し又は奇利を博せんとする目的を以つて土地の兼併を爲さんとする者を壓せると共に、中小農民が地價の暴騰に乗じ眼前の利益に眩惑し、其の所有地を放賣せんとする輕舉を戒めた。

而して之が實行に當つては中小農民中土地を賣却せんとする者がある時は、地方官警察官等をして其の實情を調査せしめ、必要已むを得たる場合以外は、當事者を説示し其の賣却を中止せしめたるがある。

### (二) 國有未墾地の貸付及付與

小面積の國有未墾地は地元住民をして之を利用せしむる方針を採り、地元住民の貸付出願に付ては其の手續を簡易にすると共に、貸付後事業成功の場合には之を無償付與

して自作農造成の目的に副はんとを期した。

### (三) 驛地土の拂下

國有驛地土は十二萬町歩に達したが、之を國の管理と爲す必要なく却つて國家經濟上不利なので、之を小作人に拂下げ彼等を自作農たらしめ社會中堅層の増加を図ることとした。即ち大正九年（一九二〇年）驛地土處分の議を決し、二十六萬の小作人に對し十箇年間に其の代金を支拂はしめること

とした。

(四) 自作農地設定及維持

農業生産力の増進、農家経済の安定は中農の保護育成に俟たなければならぬので、昭和七年（一九三二年）度より自作農設定事業を実施し、更に昭和十一年（一九三六年）度より自作農地維持事業を行ふこととした。本事業の主体は道であつて道は設定及維持自作農家に對し、一戸平均六百六十圓を年利三分五厘にて貸付し畝田合せて大

約五反歩を購入せしめ、一ヶ年据置二十四ヶ年賦償還の方法に依つて貸付金と償還せしむるのである。

此の事業の期間は十ヶ年、一ヶ年の實行戸数二千五百戸、面積一千二百五十町歩（七八兩年度は二千戸一千町歩）期間中の總戸数二萬四千戸、總面積一萬二千町歩を設定する計畫であつて、昭和十五年（一九四〇年）度迄の實績は戸数二萬一千四百四十戸、面積一萬三千四百二十二町歩、購入



[illegible][illegible]

に	上	り	豫	期	以	上	の	成	績	を	収	め	て	ゐ	る。			
對	す	る	貸	付	金	額	は	一	千	四	百	十	三	萬	三	千	餘	圓
價	格	一	千	五	百	八	萬	四	千	餘	圓	で	あ	つ	て、	之	に	

第三節 農地移住奨励

一 日本人の移住

東洋拓殖株式会社は明治四十三年（一九一〇年）以来日本人農業移住を募集し、其の取得地を二十五年以内の年賦償還に依り移住民に譲渡し、移住後の農事經營等に對しても便宜を供與し來つたのであるが、既

170

一 市に於て三千八百七十五戸の移住を有してゐた。

不二興業株式会社は模範農村を建設するため、全羅北道沃溝郡内干拓地に日本より移民を收容したが、後不二農村産業組合が設立せられ本事業を継承し昭和十六年（一九四一年）末に三百十八戸の移住を有してゐた。

江原道平原郡の高原地帯にも模範的自作農村を建設するため日本人移住を以つて組織

する産業組合があり昭和十六年（一九四一  
年）末九十三戸の移民を有した。

右の外金鮮に二千百六十九戸の日本人農  
移民があり主として南鮮地方に分布してゐ  
た。

### 二土地改良施行地移住奨励

大正十五年（一九二六年）以降産米増殖改  
訂計畫の實施に伴ひ開墾干拓事業の勃興を  
見るに至つたが、此等開墾干拓地に於ては  
熟練した耕作者を得るに困難な事情が有つ

171

なので、耕地の比較的狭小な地方の農民を  
選擇して開墾干拓地に移住せしむる奨励  
方法を講ずることとなり、昭和四年（一九  
二九年）以来補助金を交付し農事經營者の  
移住者招致を奨励した。而して昭和十六年  
（一九四一年）末迄の移住者累計は六千六  
百五十六戸である。



第十一章 農村振興

朝鮮に於ける農家總戸数二百九十餘萬戸（昭和七年一九三二年に現在）の中其の約八割二百三十萬餘戸の農家は何れも小作並自作兼小作階級に属する小細農であつて、是等農家の大部分は年々歳々端境期に於ては食糧の不足を告げ、食を山野に求め草根本皮を喫り辛うじて一家の糊口を凌がつ、あるものも示少くない。斯くして毎年繰返される糧食の缺乏と無自覺な墾農、冠婚葬祭其の他生活習俗

上の失費は延いて現金支出の増大を招来し收入之に伴はず、民衆を驅つて高利の負債を餘儀なくせしめ、逐年累増して農民の重壓となり、而も一面併令前多年の秕政は遂に自暴自棄、安逸游惰の性格を馴致し彼此相俟つて農村窮乏の重大原因を爲すに至つた。従つて朝鮮農村疲弊の禍根は物心両面に亘つてをり深刻を極むるものであつて、彼の窮民救済事業の如き臨時的施設は窮乏緩和の方策としては勿論必要缺ぐべからざる施設ではあるが、之

と同時に其の疲弊の禍根に觸れ農村匡救の根本的解決策を講ずるの要緊切なものが有つたのを、<sup>總督</sup>本府は昭和七年（一九三二年）來之が匡救打解の方策として農山漁村振興運動を提起し、細農二百三十萬戸の更生を目標として官民協力農村の匡救打解は邁進することとなつた。

指導は個々の農家を對象とし、農家窮乏の共通的最大癌症である（一）不足食糧の充實を圖らしむること（四）負債を整理して其の重壓より免

れしむること（ハ）現金収<sup>入</sup>の均衡を得せしむることの卑近簡明な更生三要点を明示し、自給自足と餘剩勞力の利用消化とを<sup>並</sup>農の鐵則とし概ね五ヶ年計畫を以つて其の生活の安定を得せしめ、漸<sup>進</sup>を<sup>遂</sup>ひて向上の域に誘導する<sup>能</sup>當面の要諦として、昭和八、九年<sup>（一九三三）</sup>三、四年度に於ては差向一邑面一部落を標準として實行に着手したのである。斯くて本運動開始以來昭和十五年（一九四〇年）迄に更生計畫を樹立せる部落は總數四萬



一千二百二十五部落、戸数八十九萬一千四百戸に達し、食糧の充實、負債の償還、收支の均衡等民衆生活の安定向上に漸次解決の曙光を見るに至り、一般民衆に勤勞精神の振作、生活の改善、消費節約、色服着用、隣保共助等の美風良俗を馴致し、納税成績の向上、貯蓄の増加、農産物の増収、各種犯罪の減少等、  
 概見すべきものがある。

尚本運動は昭和十五年（一九四〇年）十一月國民總力運動に統合され、再後は農山村生

産報國運動として強力なる展開を策することになった。



M4-165-3

朝鮮統治の性格と実績

反省と反批判

鈴木武雄

## 目次

- 一 は、一かき、
- 二 所謂「同化政策」に就いて
- 三 所謂「特殊事情」の主張と朝鮮總督の綜合行政權
- 四 朝鮮統治の經濟面
- 五 朝鮮の産業政策
- 六 朝鮮の財政及び金融についての諸問題
- 七 朝鮮人の民度に就いて
- 八 むすび

一は、一かき、

日本のポツダム宣言受諾によつて朝鮮は日本の主権から分離することゝなつた。顧みれば明治四十二年（一九二一年）日韓併合以來三十二年の歲月を経つて朝鮮は獨立と朝鮮解放の前途に當面するに至つた。朝鮮民族の歡喜に及して日本としては慥かに大なる悲しみである。には相違な所が、これも敗戦の結果として己むを得ざる償ひである。と言はなくてはならぬ。然然として考へると、面積二十万平方キロ、人口二千六百万、各種生産額六十四億八千五百萬圓（昭和十八年）を越ゆる領土の喪失は、敗戦日本の傷手を猶ほ上にも深からう。この大損失であることは言ふまでもない。併し軍国主義を完全拂拭して甦生する新日本にとつては、朝鮮のこの領土的分離を必ずしも單純に大損失とのみ考へるべきではないであらう。否、我々の考へるべきは、直に披瀝するならば、朝鮮が日本の領土であるか否かに拘らず、朝鮮民族と日本民族との眞に心からなる結びつきが實現されるならば、それは朝鮮民族にとつても、勿論であるが、特に日本民族にとつても、此程大きな幸福はないと言ふことが出来るのである。今日における日鮮のこの政治的分離は必ずや將來における新たな形における日鮮の友情に立脚した再結合を促進する契機となるであらう。我々は確信するのである。蓋し數千年にあたる日鮮兩民族の歴史は、日鮮兩民族が決して縁なつたことも、此中合はせのよきなりける様な宿柄でなく、互に教へてゐるからである。

併し、たゞそれにつけても過去三十二年にわたる日本の朝鮮統治が、いかに官に帝國主義的  
植民地支配と採取した終結したと小見解が内外に支配的であることは、今次終戦まで  
三十二年の朝鮮に在った日本人として私の頗る遺憾とするところである。勿論日本の  
朝鮮統治には批判するべく又反省すべき多くの失敗と過誤があったことは定まると  
も、それは今後の再生に際して、まず直に認めなければならぬが併し、それだけ  
らとて、特に日本の朝鮮統治が欧米強国の植民地統治にも勝つて朝鮮人を奴  
隸的に搾取し、その幸福を蹂躪したと、小論生きた對しては正當な抗辯の余地がある  
と私は信ずるところがある。五強と言ふことを許さねば、なすらは事志と違つた多くの  
の失敗もあるが、日本の朝鮮統治は理想としては所謂植民地支配を指向したも  
のではないか、たのうである。

かゝる意味に於て、今や日韓關係の新しき再生を近き將來に控える過去三十二  
年にわたる日本の朝鮮統治の眞の性格と實績とを明かにし、反省すべきは、まず直に反省  
し、解くべき誤解はこれを解いておくことは決して必要であることには信ずる。

(因に本稿は、この意圖の下に書かれたものであり、主として古題とすべき諸案と  
取上るに止まり、日本統治下の朝鮮の全貌を綜合的に叙述するものではない。これに  
就ては拙稿「朝鮮の経済」(日本評論社昭和十七年刊)同「朝鮮金融論十講」(朝鮮行政  
學會昭和十五年刊)同「朝鮮經濟の新構想」(東洋經濟新報社昭和十八年刊)等

に續く。

なほ参考資料の全部は朝鮮に残して来た筆者として、慥かに援用し得べき統計  
数字又は資料の存在するところを知りながら、それらが手許になつたため、具體的論證  
とすを得なかつた場合の多いことを、頗る遺憾とする次第である。



二 所謂「同化政策」に就て

日本の朝鮮統治の根本政策は「視同仁」であり或は「内鮮一体」であつた。この植民政策上の術語に當面めるときは所謂「同化政策」であり内地延長主義であつた。

併しこの同化政策とは單に朝鮮が地理的に近接したる位置にあるといふことを以て理由づけることは必ずしも十分ではない。なる程同化政策はフランスのアルジェリアに對するや、或は丹國と植民地とが地理的に近接してゐるや、一つの重要な要件ではあるが併し日本の朝鮮に對する場合は地理的近接と必要條件ばかりでなく欧米の場合には見られない。むしろ異つた要件がある。それは日鮮兩民族が人種、或は民族的に非常に近いといふことである。日鮮の所謂「同祖同根論」は一つの學說であつて必ずしも學界の定説とはいへ得ないであらうが人類學的、種學的將又民族學的に日鮮人が極めて近接した人種若くは民族であるといふことに就ては數々異學界に異説あるを聞かない。それはフランス人とアルジェリア人の關係とは比較にならぬ近いものであるといふこととまふ違ひない。

従つて我々は日本の朝鮮統治の根本方針が所謂同化政策であつた。この同化政策すなはちことではなかつたと考へる。否、植民政策學の術語としての同化政策といふ概念をこの場合に當面めるとは當てなうといはねばならぬ。

程それは特殊のものであつた。謂はばそれは所謂「植民政策」を否定せんとする考へ方を含んでゐることも言ふことが出来る。即ち日本は朝鮮を領有するが、これを所謂「植民地」として恰かしく又或人が野蠻人を支配するが如くに支配するを欲せず文化的にも種族的にも日鮮人は非常に近いのであるからそのやうな公式的植民地支配關係をここに樹立するが如きは到底考へ得られなうといふであつた。これは世界史的に見ても日本の植民帝國群への仲間入りが非常に若く且つアジアの植民帝國としては古く時代の支那を除く近代世界にあつたのは日本が最初であつたといふことも密接な關係があるであらう。

同化主義と異つた一つの新しい植民政策は自治主義である。併し朝鮮に高度の自治を許すといふことは當時の國際場裡における日本の国力としてはいかにリスが印度の自治を許す以上た容易ならぬといふであつた。日本の朝鮮領有既に日韓併合により發展した當時の國際情勢そのものからすれば朝鮮に自治制を施行するが如きは勿論思ひ及ばぬといふであつた。才一、次世界大戰前夜二十世紀初頭の世界情勢並に世界思潮とその時まがわつて来た朝鮮の狀態の狀態の既ち如何なる意味に於ても完全な獨立國として自立する力を有たなかつた朝鮮の狀態を顧みずしてこれは必ずしも日本のみが責めらるべき、貪婪なる膨脹政策といふを得なうであらう。それは才一、

世界大戰後に於ける世界情勢並に世界思潮(就中民族自決主義の盛行)と日本の国力の發展とを考慮する時、日本が依然として朝鮮の自治を考慮せず一九三一年(大正二十年)の獨立萬歲騒擾事件以後、益々同化政策を強化する方向に邁進したことは、深刻な反省が必要とせられよう。蓋し自治主義は、イギリスの自治領植民地に見られるやうに、植民地人口の大部分が母国よりの移民を以て構成せられ、従つて異民族支配の關係が本質的には存在しない、と特徴とするのである。若し日本が朝鮮西民族の親縁性について強い信念を有するならば、この朝鮮に自治を許すことは、慥かに清新な打開策であつたに相違ないからである。

併し乍ら、獨立萬歲事件以後の朝鮮統治政策を具へた検討するならば、謂ふ所の同化政策の一層の強行は必ずしも單純ではなから、複雑な内容をもつてゐる。この點を取上げれば、既述すれば、後の皇民化運動におけると見られる民族としての存在に基き發展した程に強行せられた反面、朝鮮總督の所謂綜合行政權の存置或は「農工併進」の産業政策に見られる綜合經濟圈樹立の努力の如く、行政的な内地延長主義や、或は經濟的な内地延長主義(廣域分業)とは異なり、東のものとされたことを注目すべきである。而し總督の綜合行政權存置の理由としては、内地に比しなほ民衆の低い朝鮮を行政的に内地に包摂す

ことは朝鮮に對する特別な関心をもつた行政が期待せられる。民衆向上に關する特別の施策が、動もすれば手薄になる恐れがあるから、朝鮮に特別の行政圈として、或は或る時期、或は却つて一視同仁の精神に添う所以である。考へられ又綜合經濟圈樹立の努力は朝鮮に、第二の内地經濟を建設するといふことあり、それが一視同仁の産業政策である。考へられたのである。

これを要するに、朝鮮統治の根本方針が獨特の同化政策というが、所謂「一視同仁」政策を以て貫かれたといふことは、朝鮮統治がその性格に於て決して植民地的支配を意圖したものにあらざる。假令外領統治技術としては、欧米先進強國に比し極めて拙劣なものがあり、且つそれゆゑに結果においては却つて朝鮮民族の反感を得たためが多かつたといふことも、また角もその意圖に於ては頗る誠実であつたと言はなくてはならぬ。汽車の切符を買ふための行列、バスを待つ乗客の行列、映画館などの入場を待つ観客の行列、これは戦時下の配給品を買ふための行列、すなわち、こうした行列に内鮮人が全く混つて並んでゐる姿、あの光景を目撃した朝鮮旅行者ならは必ずや、さうした他の植民地には見られない朝鮮統治の眞の性格を見出したに相違ないのである。

今、いかに南聯して、なほ二三の具體的な問題に論及するならば、(一)一視同仁政策をとりながら、政治上の差別を長く、漸く戦争末期に及ん

てあるの帝國議會に代議士を送る權利を朝鮮に與つたことは内容的にも(制限選挙である)不意味に於て將來又時期的にも徹底の識りを免れず、これは事実

、のみは我々の先直に反省しなればならぬところである。併しなから  
日本内地におつた人民の参政權が普通選挙の形におつた完全な實現を具  
たの漸く大いの末期である、と云ふこと

朝鮮に在住する朝鮮人の政治參與は長く認められなかつたけれども内地に在  
する朝鮮人は内地人と同様早くより選挙權を認められてゐた、と云ふこと(従つて、  
内地と朝鮮との差別は内地と朝鮮との地域的差別であつて朝鮮と  
内地に在住する者は内地人と雖も選挙權を與へられなかつたといふことがあつた)

貴族院議員に勅選する、朝鮮人は極めて少數であつたといふことがあつた、  
并の諸の項を一應考慮する、と云ふこともあつた、と云ふことはある、

朝鮮の獨立運動を極端に恐怖し、ために朝鮮人の民族主義的感傷を一種  
同に政策に對する又逆思ひと云ふ見做す程の朝鮮民族主義に對する、り過がた警察政  
治がつけられた、といふことは一視同仁政策のためには遺憾なくあつた、すな  
うち八年(一九二〇年)の獨立黨威嚇擾亂事件が我が當局として憲兵警察と政  
治の弊害を反省せしめ、と深刻であつた、り拘る、憲兵警察廢止後に於て

敬愛警察政治のり過が、殊にその末端に於て容易に改まりなかつた、これはため  
数の善良なる朝鮮人を以て日本の朝鮮統治を差別的彈圧的政治と誤解せしめ  
折角の善政を側面より不意味なうめた場合が少くなかつたのである、若し日本の朝  
鮮統治三十二年間に最大の失敗を指摘する、それは政治警察の面におつて朝鮮人  
を余りも疑つたといふことであらう、これは畢竟日本の政治が民主的におつた  
たからであらう、程度の差、といふあれ、日本の民族も同一様な境遇におつたといふ  
も言ふ、といふが出来る。

(3)比較的最近におつた(南總督以来)「内鮮一体のローガン」の下に推進せられた(聯の  
一視同仁的諸政策は「皇民化」の名の下に民族としての存在を簡單に否定する、り過  
が、同化政策を強行した、と云ふ、またその余りにも形式的であつた、といふため  
に却つて  
逆效果を生じた場合が多かつた、といふことも先直に反省しなればならぬ、而も總督の治  
績を示す指標として末端の行政當局が徒らに数字のよきの成功にのみ狂奔した、といふ  
ことも遺憾なくあつた、殊に戦争末期に於て神がかり的な日本人に  
つて、ヒツタリなる神祕主義的理念を以て、これを推進せられるに及んで、その弊  
は極つた、といふことがあつた。

我々の流弊に從つて當時「皇民化」といふ言葉を不用意に使用した、一視同仁の皇民  
化、朝鮮人も及ぶ、といふ意味におつて朝鮮人の「皇民化」といふことは誤



り、はな、と、若し、皇民化を以て朝鮮民族が朝鮮民族たることを止め、底  
から大和民族たることを意味せしむるならば、それは余りにも性急なる要求と言  
ふ。他、假令同化政策の究極の理想は民族の融合にあるとしても、朝鮮の現段階に  
於て一聯の諸施策がそれと達成し得ると考へたことは安易に過言したと言はなけれ  
ばならぬ。

惟、た、か、誤り、安易な判断におちつた所以は、朝鮮人の大多數が滿洲の支  
那に支那の支那以来、日本人の軍令、共同体たる意識を醸成するに至り、愛国心  
の昂揚顯著なるものがあるからである。この愛国心の顯著なる昂揚は、慥かに  
否定することも、驚異するものでもあつて、それは支那の支那に最高潮に到  
達した。併し、それは朝鮮人の民族意識の衰退を意味するものか、は決してなかつた。  
至、民族意識は益々強く、覺醒せしめられたのである。たゞ自己民族の生存の幸福  
のためには日本国民として生きざるより、他に途がなく、小運命、共同体の意識に到  
達したのである。既に民族意識の上に漸く国民意識（複合民族国家的國民）が  
め、め、来たのである。同化政策のよからぬ論議が、現象であり、慥かに民族  
融合への一階梯を上つた。これに他ならない。併し、これを以て直に朝鮮民族の大和  
民族化へと速断したことは大きな誤りであつた。これはかゝる判断の下には、  
た朝鮮人の皇民化運動は朝鮮人の民族感情を尊重しなかつたために朝鮮人にと

つては精神的に余りに負擔の重い運動となつた。而もそれ形式主義に墮して、例へば  
神社に参拜し、家庭に太麻を奉戴し、或は襖を穿ち、とか皇民化があり、又「皇  
國臣民の誓言」を斉唱する、とか皇民化運動がある、といふに至つて、それは遂に指  
導力を失つてしまつた。そして、太平洋戦争下、徴兵と徴食と供出の犠牲の度、  
漸く強くなるに従つて皇民化は彼等にとり、かゝる民族の苦難のやゝ意味するに至つた  
のである。

併し、ながら、皇民化運動のそのやうな失敗は所謂、善意の悪政の典型をな  
したと言ふことが出来るのである。その根柢におしよは「朝鮮人を奴隸視する」  
といふ、これは全く、反對の謂は、直に家族の一員として、これを日本人社會に迎へ入れ、  
人としての同胞的愛護が流れるのである、と否定するものがある。たゞその善  
意がまた民族の意識を保持してゐる朝鮮人にとつては必ずしも「善意」としては  
受け入れられず、而もその「善意」が獨善的に押つけられたといふ實に、植民地経営  
國としての日本の若し、未熟なものであつたと言はねばならぬのである。併し、その  
謂は、馬鹿正直には、若し、一時日本及び日本人を誤つたところの封建的軍國主  
義に基く大和民族の獨善感と神話的神秘主義との外被を、そこから取除くなら  
ば、慥かに、支那の植民史上類例を見ないのである。人類として、何等愧づべき、といふ  
かと、私は信ずるのである。

、み様に皇民化運動は、その民族を定政策であつたが故に、その善意にも拘  
らず失敗せざるを得なかつたのである。併し一視同仁的国化政策のすくなく  
皇民化運動としての失敗を記録するべきであらう。その進歩的な意味を汲  
み取り得るものも決して少くはない。例へば  
「内鮮一体の推進諸政策は、その皇民化運動と切離して考へるべきは一部のみ」  
心的な内鮮人が、これを支持した様に、最も民主的な従つて革新的な一視同仁的国化  
政策であつたと言ふ。それが出来る。蓋しそれは、内鮮人を全く平等に、日本  
内地人の優越的差別待遇、若くは差別感情をなくするに於て把握する  
、限り、ゆかに革新的な進歩的な性格を有つてゐる。

例へば、創氏制度（昭和十五年実施）の如きは創氏戸数七割二分八厘（昭和十八年  
末現在）といふ数字上の好成績を拘らず、最も失敗した政策の一つといふことが出  
来る。それは、その政策が皇民化運動として推進せられ、而も末端當局に  
よつて、わざと過激な強制が加はれたからである。それより、其を除くならば、その政  
策そのものは、むしろ進歩的な性格を有つてゐたのである。

朝鮮には従来男系の血統を代表する姓は存在したものである。家をあらわす代は  
存在しなかつた。そして儒教の影響者により男系の血統とその血統團體を社会  
構成の基本としてゐた。姓不可変、同姓不娶、異姓を養ひ身分法上の鉄則

といふ。その結果、姓の数は限定され、昭和十五年の国勢調査に際して行はれ  
た姓の調査によれば、現在の姓は三百三十六姓に過ぎない。而し全姓を合す五万五  
千、李姓を五十七万五、朴姓は三十五万五、金姓は三十一万五、以上五姓の  
姓に集中してゐた。創氏制度は、この姓の数を有する朝鮮人に限らず、表はす  
氏を創設することを許すと共に、異姓を養ひ、且一創氏に際して  
内地人式氏を稱することを認めた制度である。朝鮮においては、姓の制度  
が、その母系の制度と共に、原始的な血縁共同体的社会關係を  
作り示すものであり、それがなほ社会的慣習乃至精神生活に保存  
せられてゐる。例へば、社会的生産過程においては、最早、單  
に遺制に過ぎず、社会關係に既に父母を中心とする小血縁團體、即ち「家」  
の關係に介在してゐたことを思ふべきは、この「家」を代表する稱号として、氏  
制度を創設した事は、そのこと自体、社会的に、随分近代化の示すものへ  
の前進に他ならなかつたといふことが出来る。而し朝鮮人社会の長い血統  
を破壊することを、創氏制度によつて在来の姓そのものはこれを消  
滅せしめたといふことは、其を忘れてはならぬのである。

然るに創氏制度は同時に内地人式の氏を稱する事を朝鮮人に許すことが  
あつたがために、それが形式的皇民化運動に利用せられ、遂に創氏制度本

果、意義に没却せられて單に皇民化の外形的指標として日本人式氏名を名乗る事が創氏制度の總てであるかの様に考へられるに至つた。そしてそれが末端行政当局によつて自己の皇民化行政の成績を誇示する手段として強制せられるに及んで朝鮮人の反感を買ふに過ぎない結果となつたのである。内地人式氏名を名乗るの事は許したのも多数朝鮮人の熱心な要望に應へたものであり、且つ内地人の差別を撤去する方向に一歩前進した英断であることは言ふ迄でもないが、而もそれとあつても朝鮮人の自発的要求を前提とすることが法令の建前であつた。即ち内地人式氏名を名乗らんとする朝鮮人に対しては決してこれを内地人の特權として拒否するつもりでなく、先づ居出のみによつて自由に認められるといふ極めて民主的開放的な性格を有する施策であつたのである。我が徳川封建時代庶民は何れも何れも太郎兵衛の如く名乗つてゐて所謂苗字はふかつた。武士と同じく苗字帯刀を許された者は名主の如く彼等のうちの特別な少数者に過ぎなかつた。然るに明治維新の國民平等政策はすべての庶民に苗字を名乗ることを許したのであるが、それが進歩的政策であつたことは言ふ迄もない。朝鮮の創氏制度はそれと比べてすべき劃期的不意義を有するものと言ふべきであらう。

それと比べて心なき末端行政当局によつて例へば創氏せざる者に対しては日本内地への渡航許可を與へないといふ不平等強制が行はれたことは返へすがへす残念であり、茲に朝鮮一政策が良心的な進歩性を有しなから皇民化運動のために金と正反對の逆効果を生んだ適切な事例を見ることが出来るのである。

前述した如く姓の數僅かに三百余种しか金姓、李姓、朴姓等數種の姓を名乗る者が圧倒的に多いといふ状態を以てしては人口の増加、姓の複雑化、取引の煩雜化を来させる近代社会においては最早個人の識別機能は十分に果し得ないことは勿論である。その意味からして、姓を單位とする氏の制度の創設は近代社会關係に適應するかの進歩的政策と言ひ得るのであるが、例へば金海金氏である金姓の者が創氏に際してすべて金海(カウミ)と云ふ氏を創氏すると云ふが如きは創氏がはたふかつたのと全く同じである。即ち創氏制度本来の趣旨が没却せられて、單に日本式氏名を名乗ることの強制に対する朝鮮人側の外見的消極的順應以外の何物をも意味する結果となるのである。

以上我々は創氏制度の失敗を平正に認め、その自己反省を回避する



してはふいふ併しそれがためにこの施策の有った本末の良心的な性格をまや  
を定しきる事を欲し不いである。就中この施策を朝鮮人側のみ不  
なり内地人側のみ施す硬不反対を要する。創氏制による内地人  
人の差別が判然し難いとするとか、内地人式氏名を名乗ることを許す  
にしてもそれが一定の資格審査によつて更に皇民化したと認められ  
朝鮮人に対してのみ許さるべきであるとか云つた硬不反対論を朝鮮  
人に対する優越的差別感を不白脱しこれ一部日本人の固陋不  
偏見に過ぎないか、どう云ふ日本人側一部の強硬反対があつた程それ  
程この施策は進歩的な性格を有つて決して日本人の利益のための政  
策ではなかつた事を知らねばならない。

同じ称ふことは教育制度に於ける内鮮共学校の呼称に入つて云ふ事  
が出来る。朝鮮に於ける専門学校以上の教育は最初より内鮮共学校  
であつたが初等教育及び中等教育に於ける朝鮮人を收容する  
学校を普通学校、高等普通学校、高等普通学校と名づける名前の  
下に内地人学校と區別せられつた。これらに於ける差別待遇  
の結果ではふいふ後述する如き教育費負担を異にする財政上の理由と  
言葉の關係に基づいたものであるが、昭和十二年四月の朝鮮教育会  
改正の内鮮共学校を原則として記す学校の名稱も内地人学校と同様

に小学校、中学校及び高等女学校と呼ぶにあり、既設の学校を従来  
通り實質的には内鮮の區別を存したがる特設の中学校を  
すべて内鮮共学校が実施せられた。この内鮮共学校の原則が確立せら  
れたる中に対して一部内地人の偏狭な反対論があつたが、それと内  
地人の優越感に基づいてあり、内鮮共学校こそは、この優越感を拂拭  
して更に内鮮一併の理想を実現する百々の大計であるとの良心的な  
地人を考へたのである。言葉と云へば、この内鮮共学校は恰かや男女  
共学校が封建的なるものから近代化するものへ進意を意味するものと同一  
に内地人關係の民主化を指向するものであり、凡そ植民地的奴隸政策とは  
対蹠的な態度と云ふべきである。

これを要するに日本の朝鮮統治の根本方針であつた一視同仁的同化  
政策を或は着眼に偽りありと誤解する、推不徹底を示し、或はまた  
晩年の皇民化運動の如き性質を行使した場合のあつたこと、これと  
否定し得ずたれに所収する所とは逆の結果を生んたことが有りかつたおれと  
もそれ結局後進植民地主義としての日本の稚さと弱さ、に基づいて  
あつた。羊は羊として自由の野に放ち羊を喰はせておいた方が飼ひ  
主として羊を飼ひて羊の経費と糞の牧量とが大位で守り上げ、と云ふ羊

を放牧すれば誰か盗まれないかと知らず、逃げてしまふかも知れない。配から一匹や二匹の損失をせせ、秋するまで胸をなや、経費をかけて柵をめぐり、却って羊を潰せさせたり、或る羊を畜生扱ひするに思ひ、これに人間の待遇を與へんとして、人間の社会的地位を強要し、羊は却って有難迷惑をする。云々飼主もある、かう云ふ飼主は所謂羊によつて儲かる資格はふいである。併し羊が若し人の心を與へられ、彼は必ずや小心ふこの貧乏飼主を理解するであらう。この譬喩は或る適切でないかも知れないが、多少似た處た越民政策ではなかつたが、その根本に於ては、日本の朝鮮統治と云ふ特殊の内に於いて所謂越民地作制を止揚する、革新的、民主的、性格を有つていたと云ふことが出来、その意味において、吾界越民史上一つの特異な型を代表するものと云つてよいであらう。

### 三所謂「特殊事情」の主張と

#### 朝鮮總督府綜合行政權

同化主義が母国延長主義と同義異語であることは言ふまでもないが、ナニにも一寸ふれた所に、日本の朝鮮統治三十二年間、最も早くで朝鮮總督府の所謂綜合行政權が存置せられたことは、行政的、母国延長主義と一旦矛盾するが如き、感も与へ、従つて日本の朝鮮統治の根本方針たる同化政策と、朝鮮總督府において、それが一應に取上げらるべきであらう。朝鮮總督府の綜合行政權の下にありと云ふは、朝鮮が行政的には一應内地と区劃せられた一單位地域をふいてあるといふ事であり、法律的に云へば所謂内地とは別個の法域をなす、朝鮮總督府は法に代り、命令を發布する権限が与へられ、内地の法令は必ずしもそのまゝでは、朝鮮に施行せられ、ふいと云ふ事である。かゝる朝鮮總督府は朝鮮における一般行政のみならず、財務、産業、経済、警察、文藝、司法、交通、通信、官立等の各種行政権をも總括して、朝鮮總督府各部、各機關は恰も中央政府の各省の如き、觀望するに足るものである。唯異ふところは、總督府各部、各機關は

朝鮮に於ける各府の如く独立せずして一元的に總督の指揮監督  
下におかれてゐること、陸海軍の軍政に關してのみは總督の権限外  
におかれてゐたことである。

この様な綜合行政圏は日本が韓半島を併合した當初においてはさ  
らにも必要ならなかつた。併しそれが後の世においても存在を続けた  
理由としては所謂朝鮮の特殊事情の存在といふことが挙げられね  
ばならぬ。

この朝鮮の特殊事情と云ふ表現の中には複雑な内容が織り込まれてゐ  
る。即ち或る場合にはそれは政治的な意味に於いて治安の事情が特殊である  
と考へられ、また或る場合には社会的な意味に於いて民族の相異なることか  
ら生ずる事情が特殊であると考えられ、更に或る場合には経済的に朝  
鮮人の民衆が低い事情が特殊であると考へられたのである。この様な考  
へと特殊事情の存在と云ふことは同化政策がまた十分にその効果を奏して  
ゐないといふことと他ならず、換言すれば朝鮮の植民地的・後進的・性  
格の存在といふことである。然らば一視同仁的同化政策はこのやうな特  
殊事情を消滅せしむることに特別の関心と努力を拂ふべきは當然であ  
る。一視同仁的同化政策の使命はまさにそこに存在するといふはわ  
かり、抑々特殊事情の存在なきところ、同化政策はナセンスであつて、

また僅かに三十数年の同化政策を以て、最早同化政策の必要なき迄に特  
殊事情消滅の効果を挙ぐるが如きはたゞ奇蹟のみこれと能くし得ること  
であるが故に同化政策進行の途上においてには特殊事情の存在するこ  
とを決定して同化政策の不成功と云ふは云ひ得ない筈である。又述べた  
皇民化運動失敗の一つの原因は性急にも同化政策の成功を誇示せん  
として事実においてかは存在する特殊事情をば觀念的形式的に無視  
せんといふことにある。

かくして一視同仁的同化政策が特殊事情を消滅せしむることに特別の関  
心と努力を拂ふべきであるならば綜合行政圏をもつた特別の官廳が現地  
に於いてこの任に當ることと亦當然であり、行政的・司法・教育・警察は形式  
的には一視同仁的同化政策と矛盾しないものであるが、朝鮮及び朝鮮人の  
に對する一視同仁的同化政策に忠実であるとは云ふことが出来ないのである。  
この意味において内地中央政府の意圖するところが朝鮮及び朝鮮人の  
利益に及するか若しと云ふことは然らざる迄もその考慮が極めてうすいといふ存  
在が、現地の利益を代表する總督府官吏と中央政府より同じ意見  
の對立が生じ、この對立において總督府官吏の好んで用いた武器が總  
督の綜合行政圏であり、これによってその論據とすまといふが、朝鮮の特殊



事情であつたことは顧みて興味深きことと云はれはなるまい。  
中央と現地のこの種不対立のうちに最顯著なるは支那の支那政策に  
ありては重要産業統制の朝鮮施行を續ける問題であり支那政策  
以ては朝鮮の戦時統制経済の四化と関係する問題であつ  
た。

亦有るは昭和四年の恐慌に就て深刻なる景況に對處するたため内地において  
は重要産業統制法を公布（昭和四年四月）して強制力カルルによる設  
備増設生産制限販売價格の維持等を企圖したのであるが同法  
が偶々朝鮮に施行せられたるのみならず之を他國として強制力具するを極  
して内地の巨大企業は朝鮮に進出して内地は同様の朝鮮統制  
法が合法的に脱却せらるゝ傾向を生じたが内地は同様の朝鮮統制  
を主張したたに對し朝鮮が容易に之に應じなかつたケースである。尤も  
時局の進展に伴ひ結局は總督府當局の應ずるところとなり同様の  
朝鮮統制は昭和十二年三月先づセメント業からついで實現せられた  
がそれ迄は朝鮮と内地の地域間のものが恰つてアクトワイリーの如き立場  
にあり、内地は推進する如く朝鮮の工業化を大いに促進せられた。  
内地をこれに對し朝鮮を「統制破り」と批難し、當時の總督府  
垣一成大將を彼が陸相時代断りした軍統と云ふにこれによつて

「自由主義者」としての烙印を押されたりである。朝鮮に對するこの  
統制破りの批難は當時朝鮮の生命であつた産米増殖事業及び朝鮮  
米の内地移出について内地の要求を大に内地統制に服した朝鮮の  
他の面を見落した片多きもので批難であるといふべきであらうが兎も角  
朝鮮が「統制破り」を敢へてなしたるは朝鮮が内地とは極  
域を異にする独自の行政圏であり、即ち總督府の綜合行政権があ  
らうであつて而してその独自の行政に理由を云へるものが内地の要求  
に應じて米穀單種耕作型産業構造（後述）を捨てて多角化をなすならぬ  
以上朝鮮のこれに余り工業化の他は不十分のためになつた統制破りの  
批難を敢へて甘受すると云ふ朝鮮の特殊事情に他ならなかつたので  
ある。

は者か戦時経済統制の不可避的結果として中央による四化一元  
統制が深化するに伴ひ朝鮮總督府の綜合行政権の存続が危機  
に瀕したに拘らず特殊事情の強調によつて許可を得る範  
围内において極力朝鮮の利益が主張せられたケースである。  
即ち戦時統制経済下の朝鮮経済を物動計画ふらびに臨時治安金調  
整法による投資統制の中に立つ包攝せられ、決して軍需總動員法各條の充

動て見ると、なんでは、同様に基づく各種勅令がそのまゝ、朝鮮でも施行の範圍とせず、建前であつたために、朝鮮一之統制は、こゝに能力不足の前進をみたのである。これら、内鮮一々の理想を、つめて、將又内地延長主義の立場からみて、一見、植民地と見れば、現象と考へられ、易いものであるが、併し、この種、事情と考へると、こゝに、その、朝鮮にとつて、必ずしも、おぼつかない、ところでは、ない。即ち、例へば、物、物、計画による、物、物、内鮮、割、割、等々、に、おいて、過去、実績を、標準とせられる、こと、から、完全、程度、が、内地に、比し、劣つて、いる、に、拘はらず、その、完全、程度、が、内地を、遙かに、凌駕する、若き、朝鮮、産業にとつては、よつて、買、買、する、べき、犧牲が、それ、だけ、加重され、結果と、なつた、のである。換言すれば、或る、程度、の、完全と、みて、既に、十分、の、実績を、もつ、内地より、今、まことに、延び、人として、あり、過去、の、実績は、意味を、失ふ、朝鮮の、力が、より、多くの、苦痛を、忍ばねば、ならぬ、譯である。こゝ、同、の、事情を、中央、當局に、説き、し、少し、でも、多くの、割、割、を、朝鮮に、獲る、ために、總督府、官吏も、願ひ、熱心で、あつた。ために、得、得、は、中央、から、自由主義者、と、批、批、せられ、或は、朝鮮、王、の、官吏と、揶、揶、せられた、ところ、あるが、これは、中央、による、劃一的、方針、の、統制が、動し、それ、が、朝鮮、も、等、因、復する、傾向を、免れ、得、得、の、に、對する、現、地、利益の、主張の、強硬さを、物語、する、もの、といふ、ことが、出来る。

同じことは、企業整備に、關しても、みられた。即ち、總督府、當局は、綜合、行政に、據つて、中央の、方針に、必らずしも、即、應、すること、なく、暫く、維持、育成、の、方針を、堅持し、それが、放棄、の、已む、を得、ざる、に至つた、故に、おいても、民、需、産業の、整備には、能、小、限、り、の、消極、方針が、とられ、むしろ、内地に、對して、整備、せられた、企業、の、朝鮮、移、駐に、努力、した、のである。また、統制、會、方式による、重要、産業、統制に、關しても、若し、内鮮一之統制に、服、する、ことは、専ら、能、率、上の、理由、から、在、朝鮮、の、ある、工場が、閉鎖される、場合、を、し、と、せ、斯う、如きは、当該、工場、の、標準、業と、云ふ、ことによつて、衣食、の、資、を得、る、た、る、多數の、朝鮮、民衆を、路、頭、に、送、け、する、ことである。即ち、統制の、治安に、影響、する、問題、となる、から、かゝる、統制は、劃一的な、内鮮一之統制に、委、する、こと、なく、單、に、能、率、と、云ふ、経済上、の、觀察、のみ、から、各、般の、実、に、おいて、各、般の、事情を、見、ぬ、こと、と、知、悉、して、いる、朝鮮、總督を、は、これに、干、渉、せ、ねば、ならぬ、と、云ふ、理由、が、内、内、鮮一之統制、の、強硬、な、方針、が、つけられた。軍、需、會、合、統制の、朝鮮、施行に、當つても、軍、需、大臣の、監督、権と、朝鮮、總督の、綜合、行政、權との、調整、問題が、凌、つて、同じ、種、の、強硬、が、具、えられた、のである。因、に、昭和、十七、年、十一月、一日、より、實施、せられた、所謂、内地、行政一之化

の措置は中央にも外地の行政的統制を意圖するところであつたことは疑ひなく、この措置の内容もこれに對し、朝鮮に關聯した部分に對するものは、先づ第一に、これに對し、國務大臣の権限であつた朝鮮總督府に關するもの、務の統理は、國務省の廢止に伴ひ、國務大臣の権限に歸し、國務大臣は、此に對し、朝鮮總督府に對して、事務の統理に必要なる指示をなし、得る事となつた。次に、朝鮮に關する行政に必要なる範圍に對し、内地に準じて取扱ふこととなり、新たに制定せられた勅令「朝鮮總督府及台灣總督府監督等ニ關スル件」によつて、內閣總理大臣又は各省大臣は、内地行政一之化の見地から必要と認められる一定の事務に對し、その事務別に、內閣總理大臣又は各省大臣が、その主務に應じて、朝鮮總督府を監督し、これらの事務に對し、監督に必要なる指示をなし、得ることとなつたのである。國務省の廢止と同時に設置せられた大東亞省が「準外地」といふべき區域を管轄したものと對比するよりは、朝鮮が國務大臣の統理下に置かれたことは、僅かに「外地の内地化」の感と察せられたと云ふことが出来るが、併し前述した措置内容も、此にかゝるに、朝鮮總督府の綜合行政権は、これによつて、廢止されたことを、注目し、ふたたび、これを、即ち、新たに定められた指示「權も公法學者によれば、事務處理に關する、

概括的方針の指示であつて、訓令の如き下命令の爲とは異つた性質のもゝと解せられ、従つて、總督の綜合行政権を制約する力は、極めて弱いために、政治問題としては、この指示権を簡單には、最初、得ないといふことから、内地行政一之化の措置は、中央による外地の行政的統制を意圖したもので、あつたが、遂に實質的には、外地の綜合行政権を、解指せしめ、得なかつたのである。以上、朝鮮の特殊事情及び綜合行政権を、獲つた中央と朝鮮との行政的對立は、總督府官吏のセリシヨリズムに、因由するところも、僅かにあつたであらうが、朝鮮王の官吏として、都府に在る程の、謂はば、馬鹿正直さを以て、朝鮮の利益を主張する一種の、誠実さが、彼等にあつたことは、これを認めてやらずばなるまい。そして、それらの官吏が、多くは日本人官吏であつたことを、思ふふらば、日本の朝鮮統治の一體同仁的性格の實際が、却つて、このやうなところに、實現されることも、云ふことが出来るや、あつた。



# 四 朝鮮統治の経済面

我々の見解によれば日本の朝鮮併合は必ずしも日本資本主義の朝鮮市場独占の要求に根源を有するものばかりではなく、当時の日本資本主義をまた余りに微力で強大な欧米資本と伍して朝鮮市場の獲得と争ふ程の差違段階には到達してゐなかつた。たゞ日本の地理的その他の直接性と接近する際、朝鮮経済のミラブル必然に基き欧米列強の市場としての関心をもたれ、朝鮮の開港以来その貿易上日本の占める地位を圧倒的に大きくしようと矢張り日本が朝鮮市場の独占を謀るに至つた。その歴史は、最初より日本が朝鮮市場の政治的支配による排他的確保を必要とするものではなかつた。即ち朝鮮が長い鎖国時代から漸と開港場として世界経済の一員に伍するに至つたのは、明治九年（一八七六年）日本による江華條約締結以後のことであるが、朝鮮の貿易統計が正式に発表され始めたのは明治十九年（一八八六年）以降併合までにおける個別貿易と百分比でみると、如く輸出入貿易に於いては日本が圧倒的であり、輸入貿易においては日清戦争後は対日本が僅かに対支那に打ち勝ち、日清戦争後は対日本が独占的不位

置を占めてゐる。

	輸 入				輸 出			
	明治三十八年	同三十九年	同四十年	同四十一年	同四十一年	同四十二年	同四十三年	同四十四年
日本	五〇・三%	七三・三%	七三・七%	六三・七%	九〇・九%	九五・三%	六六・一%	七三・三%
支那	四九・一	三六・二	一八・六	九・七	七・九	三・七	三・八	一五・二
ロシア	〇・七	一・六	〇・三	—	一・二	一・〇	〇・一	五・八
イギリス	—	—	一・三	一五・六	—	—	—	〇・一
アメリカ	—	—	二・三	八・一	—	—	—	一・六
其他	—	—	—	二・九	—	—	—	〇・一
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

また日本の朝鮮が世界資本主義の商品販賣市場として、余りに経済的不存在ではなかつた。證據として、多量な欧米人の朝鮮在住者は、一には基督教の宣教師であり、二には鉄道、鉱山等の利権探求者

であつた商業的方面の代表者は比較的少数であつた。接壤と一なる  
ほロシアがあるが同様の極東政策は政治的方針に急にして経済  
的必然性これに伴はなかつたと思ふ。他を言ふ、ロシア當局  
自身もこの缺點を慨してゐる。朝鮮に於ける近代資本主義の成立  
過程——京城帝大経済学会論議、朝鮮社会経済史研究所收  
と云ふ四つを授け、記述やまた前掲朝鮮国誌に記載せられた所が概  
三十九年における各主要商館数は日本が三百十、清国が四十三、独  
各三、英佛各一と云ふ状態等々を挙げれば十分であらう。  
従つて日清戦争に終つた日本が朝鮮に對して執つた態度をその  
領有ではなかつた清国の宗主権からの朝鮮の解放、朝鮮の独立であり  
これを契機として行はれた甲午の革新（明治三十七—三十九年）は  
李氏朝鮮が近代化の方向をとり始めて試みた政治的並びに社会的  
改革であつた。即ち「従来の文官武官等尊卑の別を廢して金  
同等とす」「西班及び平民を法律上金と同等とし貴賤門閥に拘  
人我を差用する公私奴婢の典に籍を廢し人牙売買を禁ずし等の封  
建的身分的從屬關係を廢止すると共に理財財政の金匱化官  
中府中の別等元祇ふ近代改革を企てその要諦には近代的前  
算制を施した。

この時日本清戦争は朝鮮を獲り日支の戦争であつたにもかゝらず、その戦  
の結果日本が單に清国の宗主権を朝鮮半島から驅逐したといふばかり  
でなく封建的な清の朝鮮から朝鮮を近代化の新生せしめんとする進歩  
的の方向をとつてゐたことを注目しなければならぬ。さうすると日本は  
併しなかりその後における帝政ロシアの朝鮮半島進出によつて重  
大なる訂正と餘儀ふとされるに至り、日清戦争勝利の後における朝  
鮮の保護國化及び併合といふ独立否定の方向へと發展したものであつた。  
その朝鮮における日本の経済的優位が終極の要するところである。圧  
倒的となつて来たことは前掲の貿易表によつていふことがあつた。それ  
は朝鮮を獲り日清戦争の同様に経済的不動機に基く市場争奪闘  
争といふのは国防的軍事的動機を直接的とするものであつた。  
その一つは更に併合後十の月日韓の関税を据置いたことである。  
によつても首肯され得るものである。蓋し日韓の関税を据置いたことは  
日本の関税線による朝鮮の包攝を延期して朝鮮市場を暫く從  
来の儘に自由なる國際競争の舞台としておき、即ち謂  
はば経済的領有を暫くこれを延期したといふことに他ならぬといふ  
である。





の段階、而も一個の大企業都市を中心とするもの多敷の市が結合するものと云ふ意味から都市経済と云つて存は幼稚子、幼稚の段階と云ふべし。都市経済の一段階として規定せられた。いづれにしても極めて低度子経済である段階にあることには間違ひなく、柳田博士は旧朝鮮の社会は我が鎌倉幕府発生の以前、殊に鎌倉時代、比すべからざるとせられ、河合弘民博士も我が五島の末期に（旧経済大群書）また和田一郎博士も我が中世時代（旧朝鮮の土地制度及地租利度調査報告書）夫之比せられたことによつてこれを首肯することか出来る。そしてこの低度の発達段階にあると云ふ朝鮮の経済は農業を主要な力の支柱とする原始産業構造であり、工業は殆んど曲辰村の水田等工業の程度に止つてゐた。善生永助氏の調査にかゝる朝鮮の物産は李朝初期、李朝中期、李朝末期に分けて李朝時代朝鮮の物産の付録に記述した如く、朝鮮の物産が農業、林産、水産、畜産、手工業に分けて記述した。昔も今も多量に物産の分布状況を通じて觀たる朝鮮の手工業は約四百多から約五百多からまた約五百多から共々原始的な領域を脱してゐない」と結論した。李朝末期における生産品は農産物、林産品、水産品を主とし、工業品にありても機械を用いる工場工業は殆んどなく、いづれも小規模の原始的工業に依る生産

に過ぎなかつた。と結論してゐる。露は大蔵省編するところの韓国統計又  
韓はハルビン家族経済ノ域ヲ脱セズンテ分業ノ方法ニ依ルモノ甚ダ少ク生  
活上ノ必需品ハ大抵家族ノ手ニヨリテ凡テヲ準備シ耕作シテ穀作ヲ收護  
スルト同時ニ日用品ノ原料ヲモ併セ作り巨ツ之ヲ製造シ云々(西農商務  
省山林局譯刊)と記してゐる。これによつて旧來の朝鮮の工業生  
産力が如何に低度であり且一草一木産業生産力そのものも極めて低く而  
も停滞的であつたことが容易に窺ひ得るやある。  
此點を旧來の朝鮮經濟の停滞は如何に原因したものであつたか。それ  
は軍侯や土地その他自然條件より社會的諸條件に歸せ  
らるべきものである。即ち旧來の朝鮮農業社會は名目上土地所有  
制度もつたが、實態上は兩班貴族の土地所有と兼併の力の上に耕作  
農民の大多數は事實上の小作人と化して而も極めて高率の小作料に  
支配されてゐた。例へば明治三十八年我が農商務省によつて行はれ  
た「韓国土地農業調査報告」に依れば南野に於ては「村の各小作人  
といふ村後が多數見出され、中野に於ては一般に村長は小作人であ  
るが小作人、西野及北野に於ては小作人といふものが小作人といふ状態であ  
つた。また小作料は地租法に地租法に依りて割合も幾分その他に

地稅、戸布、錢等も小作人の負擔であり、更に築堰、鑿渠、浚湖、擔輿等々のために小作人は無償の勞働を地主に給付せねばならなかつた。それは、李朝に有数の學者丁若鏞も「賦稅の剝削、攘奪此の極に至る哀々たる下民は」と欲して生きた能はざりし（一）牧民の書として歎ぜしめた程の事。率々作料だったがある。

旧来の「政治経済」に封建制農産が存在したか否かは前述した如く学問上に議論の存するところであるが事実上、地主と小作人の土地と獲る二の収取関係はこれと「封建的」と稱して蓋し大いなる誤りはないであらう。そして、こゝやうな封建的の事、小作料のために極多の富乏化した農民と不産生の寄生的を封建地主とを以てしては農業の技術が向上發展し得ざることを論を俟たぬ。かゝる灌溉排水防氷等の設備は著しく荒廢し、また耕作農民も農具や耕牛や種子や肥料や如き生産手段も不足を告げ従つてそれらの生産手段は極めて原始的幼稚なものであつた。例へば露路王太藏省編纂の「支那記」韓國誌には耕耘が主として多くの労働によること、従つて農具も小鋤若しくは鉋、是が用ひられ、それら最も幼稚な形式に属するもので小鋤を直例木根を以て製し、先に鉄を嵌め込むことを指摘し、ために深く耕すを得なると書つてゐる。上述べたところによりて旧來の「政治経済」の停滞性が主として社會的條件

にその原因を有すること、そしてその社會的條件も農業に於ける封建的收取關係、秘蔵の専断、小作料にあることが、ゆゑとなつたのである。この點に考へると「三作一作十の三作」といふ言はれた頻繁なる旱害と水害、この自然の醜態、そして水が裏鮮農村を渡弊せしめた大きな原因であるには相違ないが、又農村を渡弊せしめたもの、記の社會的條件が原因となつて自然を「一層醜態列」ならしめてゐたと言ふことが出来るのである。それをあの裏鮮名物とすむ言はれた香山、即ち北山の頻る旱が如何に水害を苛酷ならしめたか、また韓末當金面積の約八割にも及ぶ天水田（灌溉設備なき水田）が如何に旱害を甚大ならしめたかに想到すれば、容易に首肯を得る。と云ふのである。

かゝつて併合以前の旧来の朝鮮經濟の窮乏弱停滯を縮小再生産とするも  
 云ひ得る。ミザブルな状態は次の間、早を數字を以て最も適切に要約する  
 ことが出来る——即ち耕地面積と李朝開闢二百一十年より隆熙二年に  
 至る二百十五年間に四十五万九百十四結、割合にして約四割弱の絶対的  
 減少を来じ、人口また李朝英祖三十九年より光武入年に至る百五十二  
 年間で、即ち李朝中葉より末期に到る期間において百三十二万九  
 千九百三十九人、割合にして約三割弱の絶対的減少を来したのがある。



（参考資料）による 又は即負担（朝鮮の農業機構）（参考）

朝鮮の経済が三つ存在をミゼラブルな状態に併合後僅か三十数年の間に今日見られる一大発展を遂げたに至ったことは恒例に日本の指導の成果であるといふことも過言ではない。これは豊かなる経済力を駆使しての指導であるといふことも過言ではない。中、中道線は手段であつた。それによつて日本の力は蓋し容易ならぬものであつたといふことが出来る。この日本が指導する朝鮮産業開発の政策は指導するに非いてこれと顧みることが略言すればその顕著な開港場の日本資本の所謂自然主義的の自己増殖運動に基つたといふことは多局の積極的吸引に基つた。それが頗る大である。即ち当局の朝鮮産業開発方針が一定の方向への資本投下を有利とする。如き基礎的諸条件を準備しその基礎の土地地質を誘引するものであつてそれによる困難な場合には國家が資本が用ゐられたのである。この意味に於いて日本による朝鮮産業開発の推進力は資本の自己増殖運動よりも國家的指導の力にあり多量の重宝があつたといふなければならぬ。これは日本による朝鮮の支配が主として国防のためであり、ある程度までは先述した如く財界方面において朝鮮の経営はパーセルをいふとさへ考へるものもあつたといふこと、閑聯するものである。

勿論日本資本は併合以前早くより朝鮮に移り来てゐた。先述の如く

易において見られる朝鮮における日本の圧倒的経済的優位からそれは当然のことであつた。併しそれは銀行、鉄道等を除けば概ね非近代の商業的の利益を以てあるか或は極めて零細な商工業のみであつた。

併合前の朝鮮において日本人の利益を以てあるか如何に跋扈してゐたかは信夫淳平氏が當時の著書「朝鮮半島に公憤を以てかゝつてゐる如くである。また工業資本について云へば明治三十二年代に之が開港市場にその端を發し、糖米、煙草、皮革、醸造、製糖、茶等の工場が主として日本人資本によつて設立經營せられた。如何に小資本であつたかは、併合前の未統監府調査の数字を平均二万六千餘圓一工場にして二十万圓を越ゆるものなしといふ状態によつて知られるのである。それによつて知られるのは商業的の利益を以てあるか如何に跋扈してゐたかは、併合前の朝鮮において概して知られる。地盤なる個人資本は農業資本、二の性格を有してゐたものであつて、それは朝鮮農村における資本主義の封建的な多量の小作料の存在と密接な関係があつた。

即ち地盤たる金銭的な金貸業が金貸業としてその利廻を享受し、併合といふことはその中が実は封建的な多量の小作料の存在に基礎を有つてゐる。



これは云ふ迄もないが朝鮮に進入した日本資本はたゞに金貨業に止まらず、土地投資と云ふ方法で進んで直接協定にこの封建的専断や作料の收取関係の中に入り込んでいたのである。その過程を次の如くであつた。即ち併合前における朝鮮における貿易の圧倒的割合が対日貿易であつたことは前記した通りである。朝鮮の対日輸出品の大部分は農産物であつた。これは併合以前の朝鮮貿易をみると農産物の輸出が毎年輸出総額の九割を占めてゐた。當時の貿易相手として清国を殆んど朝鮮の農産物を輸入する必要もなかった。これは明らかなである。そしてこの農産物の対日輸出に當つたものが日本商人であり、日本商人はこれら農産物の収買に關してその收穫取以下にその收穫の全部又は一部を引き渡す。この契約の下に農民は労賃金を得るのを慣用手段となつた。この方法で農民は窮乏の契機に契機せられて買手にとり有利な條件となつた。昔に豊凶の如何に拘らず、商品を入手し得るの便があつたがこれは同時に土地投資、土地私有の契機となつたのである。専断的作料の好利廻と日本人に与へるものであつた。蓋し外人の土地所有は開港地以外には韓政府の認むるところでなかつたからである。併し輸出農産物確保の必要と専断小作料による土地投資の好利廻とは、開港地以外の朝鮮内地における日本人の事実上の土地投資、土地所有

有る旺盛をうめた。農商務省技師加藤末郎氏の「韓国農業考察論」も「韓国農商務省の韓国土地農産物調査報告書」もいづれも日露戦争前までの事情に於いて多数の日本人が開港地以外の内地に土地を事実上所有して農産物を専断してゐることを記述してゐる。これは四才教授が「韓国土地記述」といふ書によれば「當時陸路公利せられたる韓国産業界紹介の諸書」で米島、尾崎、尾崎、尾崎と記述して土地購入の利廻り計画に及ぶものはなく、未だ日本人による土地の好利廻り地價騰貴と云はれる程であつたのである。この頃から、當時における日本人の土地投資も亦農産物の輸出と關聯した商業的性格を有つたものであり、且つ専断小作料の好利廻りに誘引せられたる利貸的性格を有つたものであることを知るべきである。故に又、當時の朝鮮に進出せる日本資本が近代の巨資であり、専断利貸資本である中核とすることを知らねばならぬ。これは日露戦争前か、日本資本主義の発達段階からして必らず言ひ得ることである。この非近代的な商業的利貸資本が朝鮮の愚智にして素朴なる農民からその土地を奪ふ。半価に買ひ取つたこと及び日露戦争中ドサクサに乗じて不法に土地を収奪した者も無いてはなかつたこと等は、我々が上述に認めをすればなる。遺憾な事実であるが、それによつて注目しをなすなら、これは多分の在

朝鮮の資本主義的商業的発展の性格が遂に併合後日本によってけはれた朝鮮の土地改革を極めて不徹底ならしめ、その結果朝鮮経済に一つ大きな疵を刻したといふのである。

朝鮮の土地改革は日清戦後独立せる韓王政府によって試みられやうとしたが日露戦争後及それに関聯する政治的混亂のため遂に果されず、日本の保護のもとで、日本が指導することによって土地調正事業として発足し、それは併合後に持ち越され、昭和九年四月一日、二千五百万圓の経費を費して大正七年に着手し、完成した大事業であった。これによって旧来の封建的土地所有制度が近代的私有制度に改められ、旧来の朝鮮経済の近代化の礎石とあるものが出来たのであるが、それは土地所有者の確定に於いて實に非進歩的であつた。即ち土地の現實的保有者である耕作者であつた農民を土地私有権者とするのではなく、分封した封建的土地所有者即ち收租権者たる地主、近代的土地所有者と確定せられたのである。従つて收租権者の存在なくして直接国家に租税した農民も従来より公田が公有地に編入せられた結果、例へば、公有財産となつた墾田土の小作人の如く、多きは天賦の自作農民を得なかつた。日本の統治初期における土地改革も不徹底であつたが、これをそれより遙か下不徹底であつた。今や現實的を土地占有者であり耕作者であつた数百万の農民が土地の所有権を失ひ、土地から離脱せしめられ、その朝鮮社会に

あつたは、この土地を失へる大多数の農民が都市労働者又は農業労働者として新たに吸収さるゝ素地を有しなかつたから、彼等は結局封建社会のうしろあつた。移住した来た零細農的生産様式の下に依然たる小作農として再編成せられ、それは封建的を零細小作料の收取關係を改善しなば、より土地を失へる農民の競争に於いて寧ろそれと甚だしかりなものである。

従つてこの土地改革は朴文奎氏の言小如く、その後に於ける農村社会分化の起點をなし、農村社会分化の起點として、土地調正事業を就け、——その結果は依然として零細小作料の分配關係の上で寄生し耕作農民を、この酷烈な負擔の下に依然として生かすこと以上には農業経営の進歩改善をはかることが出来ず、低劣な文化水準に低迷するの宿命におかれたいのである。朝鮮の進歩的、植民地的性格の止揚を、總督府當局は始め日本の軍事力にたより、たゞであるが、その植民地的性格の根本を實にこの封建的土地關係の遺制の残存にあり、この抑圧による徹底し得なかつたことは、西洋植民地統治には見られなかつた。この誠意ある政策がけられ、たゞ拘捕朝鮮人の民衆的向上を産業の素地、外見的発展程には達成し得なかつた最大の原因となし、と言ふことが出来るのである。

我々のこの事實を平直に認める。そして再び土地を貸すやうなことを徹底を  
土地改革をなすべきを得なかつた事情として我々は、さきに述べた日本人の土地  
投資をこの理想に近づけねばならぬ。即ち多数の日本人が朝鮮内地に  
おける事実上の土地所有者となつてゐた事實が、明治三十九年（一九〇六年）の  
土地収買法に規則として公布による外人（日本人）の居留地外における土地所  
有の法的公認となり、それが更に発展して遂に土地調査事業による土地所有  
制度の確立となつたのであつて、かく考へて来ると、土地代を目的として直接  
土地に投資せしめた投資乃至は、その利益を目的として農業に貸し出れ  
た投資、又はそのやうな投資、若しくは貸し出たに向はんとする資本にとつては  
封建的な零細小作農の再生産に依る資本小作料の搾り取と云ふこ  
とが却つて望ましいことであつたとも見るべきで、この朝鮮土地改革の特殊の  
性格が認められるのである。このために、零細小作農の拡大再生産  
となつて、朝鮮農村の疲弊を容易に匡救し得なかつたばかりでなく  
又資本小作料の搾り取に基づく比較的資本主義の土地利益が資本主義  
積の誘引を依然として、朝鮮農村にあらたに、朝鮮人は預金や證券の形態  
をとる投資より土地投資を望み、して民族産業資本の成長を自ら阻む  
と共に、この土地利益と競争を餘儀なくせしめられる。關係上、朝鮮の金  
利水準、産業利潤は動い内地より低く、地位を占めるを得ず所謂金

植民地利潤と云ふ植民地的性格を不可避ならしめたのである。  
以上の反省は、朝鮮統治の経済面を論ずる上における、実に根本的な反省  
であり、またこの問題を、新生朝鮮がその民族経済再建に當つて所する  
べきに解決しなればならぬものと考へるが故に、敢てここに強調した次  
でであるが、翻つて、朝鮮に考へるとき、日本が朝鮮経済指導の責  
任に當つて、この封建的土地關係を拂拭し得なかつたことは、果して日  
本の朝鮮統治の、特徴であらうか、と私は言ひたいのである。さうで  
はなく、この様なことは、多少のれあひがある。植民地に共通したもので  
あつた。しかも日本の場合には、その資本主義の完全な農業革命を  
了へてはいなかつたのであるから、況んやその植民地において徹底的な土地  
改革をなし得なかつたのは、一應無理からぬことと言ふことが出来る  
であらう。



### 五 朝鮮、産業政策

併合後日本による朝鮮の産業開発は国家的指導と援助の下に内地資本の移住による行われたといふことは前述した。これは旧来の朝鮮経済の額面を以て後令日本の指導によるものは、朝鮮自らの民族資本を以てこれをなすを得なかつたことと言ふこともない。また前述した如く日本資本自体も亦計外膨脹を必要とするやうな過度蓄積の段階に達してゐなかつたから、内地資本の移住といつても、そこには強力な国家的指導と援助が必要であつた。従つて國家資本に依りねばならぬ場合も多かつたのである。日本の朝鮮併合以後における朝鮮の産業経済政策の推移は大體してこれを四期に分つことが便宜である。

その第一期は併合以来約十年餘の間であつて、大正九年（一九二一年）がその明確な轉機をなす。

第二期は大正九年（一九二一年）から昭和六年（一九三一年）の満洲事変前後に至る約十年の間であつて、満洲事変が明確な轉機を劃する。

第三期は満洲事変前後から支那事変に至る約五六年の間であつて、明確な轉機を劃するものとしては、支那事変の勃発を以てしなげればならぬであらう。



移出と目的とする米穀中心の産業構造に再編成せられたものであつて、謂は、一種の広域企業業が形成せられたものである。そして一般に單種耕作型産業構造が所謂植民地経済の典型的構造である。すなはち朝鮮経済はこの時期に於いて公式に最も常態する植民地経済の形相を呈したと言はなければならぬ。蓋し典型的な母國と植民地との経済関係は植民地の母國に対する原料食糧品の供給市場であり、且、母國の工業製品を販賣市場としたことである。それは先達母國工業資本の植民地市場独占の利益のために植民地を永久に原始産業地域として縛りつけることに他ならぬからである。そして單種耕作型産業構造こそは、経済的には最も植民地的性格の強きものと云ふことが出来る。特に「経済的」といふ意味は、例へばフランスルの政治的には獨立國であつても、その産業構造が如何なる單種耕作型産業構造であるかの経済的性質は獨立性をもち、工業先進諸國に隷屬せざるを得ないといふやうな場合をも包含するものである。それだけに政治的にも特獨立的植民地に於けるこの單種耕作型産業構造は最も隷屬性の強い経済たることを示すものであり、而も朝鮮に於ける米の場合にはそれが英領マレーにおける如き、世界市場商賣ではなく、専ら母國日本と相手とするものであつたから、その單種耕作型産業構造の

母國隷屬性は最高であると言はなければならぬ。我々はこの事實を平直に認めなくてはならぬが、併しそればかりでは日本は朝鮮人の空腹の犠牲において朝鮮から米を収奪したとす、新罪には尙單に与することが出来ない。

な程大規模な産米増産計畫が朝鮮に実施されるに至つた。直接の動機は第一次世界大戦を契機とする日本工業の躍進に伴ふ内地に於ける深刻な食糧不足（大正七年米騒動勃発）に對処するためであり、且、産米増産率以上に鮮米の内地移出を増加し、ために鮮内における米消費量が減退するに至つたのは事實である。左表はそれと物語る統計である。

鮮米の生産高、移出高及び一人當消費高

米穀年々事	生産高	移出高	一人當消費高
大正一	一六三、三三	一〇、〇五	一、一四
二	一四、一〇	二、一九	一、七〇
三	一四、五〇	四、三三	一、五八
四	一五、七九	六、六〇	一、四九
五	一七、〇〇	八、七五	一、四〇
六	一八、〇〇	一〇、〇〇	一、三〇
七	一九、〇〇	一二、〇〇	一、二〇
八	二〇、〇〇	一四、〇〇	一、一〇
九	二一、〇〇	一六、〇〇	一、〇〇
一〇	二二、〇〇	一八、〇〇	〇、九〇
一一	二三、〇〇	二〇、〇〇	〇、八〇
一二	二四、〇〇	二二、〇〇	〇、七〇

（總消費高は生産高に本年よりの特減高及び移入高を合計したる）



供給高より移出高及び翌年への繰越高を加へたるものと差引いたるもの  
 一人當消費高はこれと人数にて除いたるもの

この鮮内米消費高の減少は満洲からの米輸入その他鮮内生産の米、雑穀等によつて補はれたが、朝鮮の主食糧一人當消費高はなほ内地台湾のそれに及ばなかつた。左表は昭和五年におけるその比較である。(外務省調査局中三課内地朝鮮、台湾ニ於ケル食生活ノ趨勢)

内地朝鮮、台湾ニ於ケル食生活ノ趨勢

内地	米	麥	雜穀	甘藷馬鈴薯	計	大豆	合計
一石〇八	〇石三八	〇石〇九	〇石〇三	一、六八	〇石一二	一石八〇	
朝鮮	〇石五五	〇石四九	〇石〇五	一、五〇	〇石〇三	一、六八	
台湾	〇石〇六	—	〇石五七	一、七一	〇石〇七	一、七八	

これは僅かに問題に値するが、次の諸氏は一應これを考慮する必要がある。  
 (イ) 台湾の一人當米消費高が内地に劣るものは外米の輸入があるからであり、且つ雑穀の生産に乏しく、台湾においてはその消費は極りて少くこれを補ふものが内地朝鮮よりも遙かに多い。甘藷の消費であるため、全体としての消費高が比較的にならざるゝこと。  
 (ロ) 大正一五年間平均の朝鮮における一人當米消費高は右掲表の

如く、七七八石であるが、この期古における雑穀消費高は一、五三六石で米と雑穀を合した一人當消費高は一、九七二石となる。この二石内外の消費高は寧ろ多い位で、これはおそらく食生活の餘り複雑になつたからであり、昭和年代における主食糧の減退は寧ろ内地に近くなつたとも考へられ、蔬菜その他食生活の複雑化がある程度これを補つたとも見られること。  
 (ハ) 絶対量において内地に比し少く劣つてはゐるが、強いて取上げる程の重大な開きではないこと。

たゞ問題は米と雑穀との消費割合が朝鮮と内地とちやうど逆になつてゐることである。即ち朝鮮は米を作りながらそれを内地に送つために米よりも雑穀の方をより多く食つてゐる、といふことであるが、これこそ米穀軍種耕作型産業構造の反映に他ならず、米の商品生産の結果である。

このことは内地の都会と農村の關係においても見られることであつて、民族の差異や國境の問題を離れても、社会的に農民が一面は通過せねばならぬ段階であらう。さうであるならば、米穀軍種耕作型産業構造に立つ朝鮮は内地を都會とすれば恰かも農村の如き立場にある譯で、ここに特別の民族的差別政策の意圖をみて付する必要は必ずしもないであらう。更に注意すべきは、鮮米の内地移出が旺盛であつた

この時期は、我々時下におけるやうな強利保出によつて米が朝鮮から内地に荷つて行かれたるは、高き米を賣つて、その差額を食つたといふ、然るに、經濟現象の結果であるといふこと、そして、我々時下の強利保出時代には、朝鮮の米消費は不作の年が多かつたにも拘らず、また、滿洲、中國向輸出が増加したにも拘らず、増加してゐるといふことである。左表は、その概表に續く、各米穀年表における、鮮米の生産高、移出高、及び一人當消費高である。

米穀年表	生産高	移出高	總消費高	一人當消費高
昭和十二年	一九四一〇石	七、一六一石	一二五七九石	〇、五五七
十三年	二六、七九六	一〇、七〇二	一五、七八三	〇、七〇三
十四年	二四、一三八	六、五五一	一七、六四六	〇、七七六
十五年	一四、三五五	四、二九	一三、九八六	〇、六二八
十六年	二一、五二七	三、六八一	一七、五五四	〇、七二八
十七年	二四、八八五	五、六四四	一九、一四一	〇、七五七
十八年	一五、六八七	〇	一六、五三七	〇、六二四

要するに、單種耕作型産業構造のその「單種」が、朝鮮の場合には、偶々、主食物たる米であつたといふことに、問題の取上げ方の混亂する原因がある。であつて、若しも、英領マレーや、葡領東印度の如く、それがコムや砂糖であつた場合

合には、後令それが世界市場商品でなく、専ら母國向け輸出商品であつたとしても、問題の取上げ方は、おそろしく、經濟的以上の「人道的」な性格にまでは、發展しなかつたであらう。併し、問題の皮相的觀察のみでなく、更に深く掘り下げて見るならば、コムや砂糖の場合にも、それが單種耕作型である以上、止はそのために、現住民の主食食物の栽培耕作が、非常に制限せられ、その結果、現住民の食糧の大部分は、これを他國よりの輸入に待たなければならなかつたのである。従つて、問題の第一義的衝突は、單種耕作型産業構造そのものにあり、かつ、その「單種」が何であつたかは、第二義的であるといふべきであらう。朝鮮の場合、それが米であつたことは、謂はば素人眼にも判り易い。然し、日本にとつて不利であつたと言ふに過ぎないであらう。併し、朝鮮の、向金米以外に、何があつたであらうか。當時の朝鮮の産業的諸條件の下において、米にまさる輸（移）出向生産物がある。他に何があつたであらうか。そして、この米の買手として、日本、本國程に強き需要者が他にあつたであらうか。後に朝鮮が、獨立國として、その産業政策を自主的に決定し得る立場にあつたとしても、當時の諸條件の下においては、必ずや、対日輸出を目的とする米穀單種耕作型産業構造を採つたに相違ないであらう。これは、總督府當局が、稲の品種改良、即ち、在米種を内地種に

改良することにより、その耕作面積、水田總面積に對する割合が昭和四年既に七三%に達した（昭和十五年九%）。これは、在來種が收量、品質共に如何に劣悪であつたかといふことと共に、對内地移出を目標とする以上、市場性の高い商品生産に移行することは當然であつて、必ずしも日本人の嗜好を一つに指導するものは批難を得ないであらう。

なほこの産米増殖計畫の實行について附言して、おねはならないことは、それによつて朝鮮農業がその内部機構に鬼も角として、ここに一大轉換を來たし、生産力の飛躍的増大を見たとのことである。朝鮮農業の後進的封建的機構及びその併合當初の土地制度確立において、再生産せられたことに就ては、本章に述ぶところがあつた。このやうな農村内部の封建的機構を前提とする農業生産力の拡大は、農民自身、積極的努力によつては到底達成し得るものでないことは、言ふと俟たぬ。かくて、總督府當局の農業政策は終始一貫官による積極的指導と督勵であり、また能く限りの國家的補助と保護を手へした。それは久岡健一代の言ふ如く「官廳は常に一種の企業者の役割を担當した」と言ふことによつて適切に表現せられる。長く土作官として朝鮮農業の良心的研究者であつた久岡健一代の言ふ所とここに引用しよう。

「朝鮮における今日の如き農業生産の發展は朝鮮独自の推進力によつて達成されたものではない……」

それは專ら性急によつて強力なる内地の資本とその知識と技術と撓ゆまざる努力に基くものである。それは一面において朝鮮が資本力においても人力においても、到底自力を以て進展しうる生命力を有しなかつた止むなき結果である。就中忠告すべきは一般に指導者階級たる在來朝鮮地主の多くが何等の企業者の才能、破求能力を有せず、唯分配消費の關係においてのみ生き、高率多額の小作料を獲得すること、能く資本形態に動員する力に乏しく、特に農業に就ての經濟的發展に資する事が殆んど乏しく、其の初期的形態においては、國家の保護と官廳の補助を必要とした。此の意味において官廳は、常に一種の企業者の役割を担當した。斯る事態は朝鮮の農業開發において内地よりも著しく、且つ強力なものである。（甲略）官廳的觸数は多くの場合、官廳の権威にも等しく、強制力の下に行はれたのである。朝鮮の農民は民衆と知識の乏れるが故に、その自発的にして、諦觀的な生活精神、傳統の爲に新しい合理的





耕地の拡張 耕種法改善等の他の技術的改良指導の産米増強計画実  
 施によつて一層積極的に推進せられ左表に見る如き耕地の増加並に  
 収量の顕著な増大が主としてこの産米増強計画に負ふものであつた  
 亦注目せられねばならぬ。

耕地面積の増加		水田		畑		火田		計	
年	千町	年	千町	年	千町	年	千町	年	千町
明治三十三年	八四七	一九一七	—	—	—	—	—	二四六四	—
大正四年	二一七七	一九九三	—	—	—	—	—	二一七〇	—
九年	一五四七	二八一九	—	—	—	—	—	四四九五	—
十四年	一五七五	二八二三	—	—	—	—	—	四五七一	—
昭和五年	一六四三	二八二二	—	—	—	—	—	四六四六	—
一〇年	一七〇三	二七九六	—	—	—	—	—	四九一七	—
一四年	一七六二	二七六三	—	—	—	—	—	四九三八	—
一五年	一七七〇	二七四〇	—	—	—	—	—	四九三三	—
一六年	一七六九	二七一九	—	—	—	—	—	四八八八	—
一七年	一七六七	二七〇七	—	—	—	—	—	四八四九	—

即ち併合以来當は二倍強、田は一六倍強、耕地総面積におよぶ二倍強の

増加となつてゐるが、この耕地増大のうち背面積の増加は、米増強計画の實施に基く開墾、干拓、土地改良、地目変換等の結果である。

ことは言ふまでもない。一、昭和十五年又は十四年と峰として最近背田に  
 耕地面積が減少傾向に轉じてゐることは戦時下軍需工業の勃興による  
 工場敷地及び飛行場その他の軍用基地として耕地が潰滅せられたためで

米の反當収量		作付面積		收穫高		反當収量	
年	千町	年	千町	年	千町	年	千町
明治四十三年	一三五二	一〇、四〇五	—	—	—	—	—
大正三年	一四八四	一四、一三〇	—	—	—	—	—
八年	一五三七	一二、七〇八	—	—	—	—	—
十三年	一五七五	一三、二一九	—	—	—	—	—
昭和四年	一六三二	一三、七〇一	—	—	—	—	—
九年	一六七一一	一六、七七一	—	—	—	—	—
十二年	一六三九	二六、七九六	—	—	—	—	—
十三年	一六五九	二四、一三八	—	—	—	—	—
十四年	一六三九	二四、三三五	—	—	—	—	—
十五年	一六四一	二一、五二七	—	—	—	—	—

昭和十四年は、大旱魃により作付不能、收穫大減少を見た。その反響、收穫量は減少した。また反響、收穫量の昭和十二年と頂上として、雨後減少した。これは、戦争の影響が漸くあらはれて来たため、即ち工業方面への農村力の抽出による農村自給の努力不足、金肥の不足、農機具の補修困難等によるものである。

即ち米の反響、收穫量は、併合当初僅かに七斗六升九合であったものが、昭和十二年には一石六斗三升五合と二倍の増加であり、その後戦争の影響等により減少傾向を見せにけりとも、なほ併合当初の二倍弱と云つて可いのである。

反響、收穫量のこの躍進は、前述の收穫量増進に至る種々の優良内地米種に改良せられたことのみならず、水利事業の進展に伴ひ所謂「自然の恒常化」下施肥栽培法、農機具の改良普及その他技術的指導の結果によるものである。

そこで、これらの技術的指導、水利事業その他農業施設が全行けられ、と便宜し、従つて併合当初即ち明治三十三年の反響、收穫量とその後も毎年維持せられたと便宜するときは、併合以来昭和十六年までの如き数字が得られる。

昭和四三 — 昭和十六年合計

三七九、〇六八 七三三石  
 五一〇、四五九 一三三  
 一三〇、九九〇 三九〇  
 一三三、六八一 三三三  
 七、四四〇 五〇四  
 一、二六二 四九二  
 七、七九二 六六

併合当初の反響、收穫量による收穫高

實際收穫高

差引、技術的指導改良による收穫増

輸移入高

輸移出超過高

差引、鮮肉消費純増

即ち技術的指導改良による收穫量の増加による收穫高の増加は、米の輸移出超過、即ち鮮肉流出高とカブアーとなほ、四斗五升以上に及んでゐる。而も右の推算は、併合以後における耕地面積の増加とそのまゝにして毎年、實際耕作面積は明治三十三年の反響、收穫量を基として得たものである。若し耕地面積の増加も干拓開墾等の如く技術的指導と資金的援助に及ぶものとして、併合当初の状態が持続されたか或は多少の増加を見込めたとすると、實際の増加率は遙かに低い増加率と見込め、後述すれば併合後の技術的改良指導等により、後述する場合の收穫高合計は、上記数字よりも更に少くなり、従つて差引、鮮肉



消費純増高は更に増大することになる。即ち日本の技術と資本による朝鮮米の増産以上に日本は朝鮮の米を得たのである。この数字によつて結論されるのであつて、單に産米増産計画実行期における産米増産率以上の鮮米移出率を以て、朝鮮に対する日本の米収奪を結論することは必ずしも正確ではないのである。

斯く考へるとき、朝鮮産業の二期における米穀單種耕作型産業構造の確立は従来の朝鮮經濟の民族的獨立性を解体して日本經濟への隷屬性を強化した点において、そしてまた産米の増産率以上にその対日本内地移出率の増加によって鮮内における米消費量の却つて減退するに至つた点において日本、朝鮮統治が植民地政策改革以外の何物でもなかつたとなす地盤に對しては最大、弱點をなすと言はなけれはならぬが併し大局的には朝鮮經濟の發達にとつて頗る幸福であつたといふ見方も成り立ち得るのである。即ちそれは朝鮮經濟と旧來の静止的停滯性との急進に向上せしむるに役立ち、更に産米増産計畫の内容たる土地改良事業並に農事改良事業實施のたぬの巨額の資金流入は増産せられた米穀の旺盛なる内地移出によるこれが巨額の代金獲得と相俟つてひきつり當面の産米事業のみならず

らず、朝鮮經濟全体を刺激し、これを活況に導いたものであつた。この旺盛なる米穀の内地移出はそれまで移入超過を續けて来た朝鮮の対内地貿易を大転換し、昭和三年に至るまで連年出超たりし外に主たる原因となり、その出超額は最低一千五百百金乃至最高九千五百百金、年平均五十二百百金弱、この出超十二年平均の總額六億二千百金弱といふ巨額を算したのである。若しこの時期を通じてなかつたならば、朝鮮經濟はなほその素朴的農業を中心とする静止的停滯性を經てゐるを得なかつたであらうし、またその後における工業の發達も困難であり延びて遅かしの獨立を約束せしむるに至つた今日の朝鮮に見られるかの差違ひに近代經濟力の保有にも到達しなかつたであらう。

亦三期の特徴は一言に一言（は）朝鮮の工業化のめざまゝい時期であり、米穀單種耕作型産業構造の崩壊（米はなほ重要な生産物たることを續けたこと勿論であるが）せる時期である。米穀單種耕作型産業構造の崩壊は珈琲、小麥その他在野的農産品の單種耕作型産業構造の崩壊と同しく一九二九年の在野經濟恐慌と相俟つた甚張り農業恐慌の波浪は日本とも離衣した米

價その他農産物の價格は激落し農村は極度の窮乏に陥つた。當時の日本内地における輿論及び政府當局者の見解はこの米價下落の原因を専ら朝鮮、台湾よりする生産費の低廉な米の大量移入にあると考へたため、鮮米等の移入並に朝鮮の産米増殖計畫の實行に對して制限を加へることをなすたのである。我々は前述した如く朝鮮の米穀單種耕作型産業構造そのものと必あり日本、利己的政策の産物と考へたのみならず、この産業構造の崩壊も日本に世界の農業恐慌の波の中を勿論不可避的ではあつたが更にそれに積極的な指針をその中に日本内地の政策、即ち朝鮮米の内地移入、抑制及び朝鮮産米増殖政策の打切（昭和九年）とこそ我々は日本の利己的政策であると言ひたい。これによつて朝鮮（の農業恐慌の打撃は二重に深刻となつたのである。それは産米の増殖にも拘らず内地への鮮米移出が旺盛なために朝鮮内の米消費量が減退したといふこと以上に朝鮮にとつての苦難であつたといふことが出来る。

併しなから、産米増殖政策の打切は必然に朝鮮産業政策の転回を意味した。それは今まで考へるも及ばなかつた近代工業の移植

成であつた。即ち朝鮮とは日本の工業製品―特に完成品の販賣市場として考へなかつた日本資本にとつて、近代工場と建設、工業生産を起すといふことは、まさに今まで考へるも及ばなかつた劃期的なものであつた。それは、

（一）第一次世界大戦を経て、日本の資本が漸く海外膨脹を可能とする程の蓄積をなしたことに、

（二）而も世界恐慌場の不況対策のために行はれた重要産業統制法が生産過剰の克服策として生産設備の新設拡張を制限したことに、

（三）拘らず、同法は内地にのみ施せられ朝鮮等の外地には施せられなかつたから、朝鮮が地域的に恰かもカルテルのアウトサイダーの如き立場に立ち、過剰資本の捌け口として極めて恰好の地域となつたことに、

（四）満洲事變の結果として日本資本の独占市場が満洲全土にまで広がり、更に華北も有望化して来たために日本内地の工業製品、市場として朝鮮の比重が相対的に減小し、従つてここに近代工業の勃興することと競争者の出現としておこる必要が急ぐなり、定寧る満洲華北に開かれた広大な市場を目標として、これに近接する朝鮮半島（の工業資本の進出を有利とする）展望が与へられたこと、

① 満洲事変によつて満洲が日本の勢力範囲になつたといふことは、工場進出といふ見地からすれば満洲は朝鮮に比し治安の良しにおいて著しく安定を缺いたこと及び建國当初の満洲國は右翼的の及資本主義のイデオロギーに支配せられてゐたために日本資本の進出舞臺として、國策と名とする南東軍の強割による場合を除く他は満洲よりも寧ろ自由な朝鮮が選好せられたこと

② 朝鮮の豊富低廉なる労働力と工場敷地の安收賃その他の建設費の割安とが内地過剰資本にとり頗る魅惑的であつたこと、而して工場法その他の労働立法がまだ朝鮮においては施行されてゐなかつたから、前頃の事情と併せて朝鮮こそはまさに資本の王道樂土であつたこと等々を主として事陳とすべきものであるが、それより政治的、経済的、社会的、事情の他に更に

(一) 従来水路式発電技術と以てしるは全く絶望視されてゐた朝鮮水電資源の流域変更方式によつて素晴らう！再発見となり（水路式による従来理論発電能力五万七千キロワットから一躍二百二十五キロワットへ）これはその故更に大野水池式低落差発電によつて更に大なるものとなつた）技術的にも朝鮮工業化の将来は輝かしい光明を

扱つたこと

をも忘れてはならない。

かくて朝鮮の工業化はめざましい勢力で進展し最早朝鮮を農業國と呼ぶのは必かりし適當でなかつたと言はねばならぬ程の産業構造の再編成が進行した。貿易もこの工業化傾向を反映して内鮮貿易は再び朝鮮側の入超に轉じ輸入品は主として内産品は最早完全製品に非ずして生産財となるに至りまた外國貿易の比重が漸く増大して対滿輸出がその圧倒的内容をなすに至つたのであるが、この貿易構成の變化を見れば、朝鮮が最早従来の如き單なる日本内地の從屬的經濟地域ではなくなつて、今や新くアジアにおける先進産業地域とならんとし、あることか穴規は小なるのである。

さてこの工業化の成功は米穀單種耕作型産業構造の崩壊によつて生じた危局に直面せんとした朝鮮經濟を再生せしめると共に、今までその所得源泉と原始産業のみに依存してゐた朝鮮民衆に轉たなる稼得場所を提供したものである。

た、惜むらくはこの工業化が強とすつて内地資本の進出によつて行はれ土着民族資本振頭の余地が殆ど乏かつたことである。

朝鮮対内地貿易額





入	移		入	出	入出超
	食料品	原料	原料製品	金製品	其他
合計	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
食料品	九	八	九	一	二
原料	四	六	七	六	四
原料製品	九	一	一	六	一
金製品	七	五	六	六	一
其他	五	六	五	五	一
合計	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

（即ち朝鮮より内地へ移出せらるるもの、うち、金製品は、比重は、顕著に低下してより、また内地より朝鮮に移入せらるるもの、うち、金製品は、比重は、二小も大に減退し、反対に原料製品は、比重は、増大し、なることを注目すべきである。）

朝鮮对外贸易

明治四三年	輸出	輸入	入出超
昭和七年	四、五、三、五、千円	一、四、四、三、四、千円	入九、八、九、九、千円
	二、九、二、〇、九	六、一、六、八、四	入三、二、四、七、六

昭和八年	輸出	輸入	入出超
九年	五、二、七、七、三、千円	六、四、三、六、八、千円	入一、一、五、九、四、千円
一〇年	五、七、六、七、三	七、九、五、二、七	入二、一、八、五、三
一一年	六、四、九、〇、二	一、〇、〇、五、八、九	入三、五、六、八、七
一二年	七、五、二、六、五	一、一、四、四、九、九	入三、九、二、三、三
一三年	一、一、三、〇、九、七	一、一、八、一、三、八	入一、五、〇、四、一
一四年	一、六、九、〇、六、六	一、三、四、五、八、二	出三、四、四、八、四
一五年	二、六、九、九、一、一	一、五、九、〇、三、一	出二、一、〇、八、七、九
一六年	二、〇、六、三、八、四	二、四、〇、六、五、二	出三、五、七、三、二
一七年	一、八、四、四、四、四	一、五、八、三、四、四	出二、六、一、一、九
一八年	一、九、二、四、三、五	一、一、六、四、〇、八	出七、六、〇、二、七
一九年	一、九、一、三、九、八	二、一、五、三、三、五	入二、三、九、三、七
二十年	一、九、〇、七、六、六	一、八、六、七、一、六	出四、四、〇、五、〇

（一七年以降輸入額中、は大陸特産物、送貨物の貿易額を含まず）

大正三一年	輸出	移入	合計
	六、〇、九	九、三、〇、一	一、〇、〇、〇、〇





業育成の根本方針から窮乏な朝鮮に割當せられた建設資材の  
 内地より送り出されたことによつて朝鮮の水力発電並に重化学工業建設  
 備の膨張は顕著なるものがあった。それらの或るものは建設半ばにして  
 終戦の途途に際し一時のものもあるがそれによつても朝鮮の近代的工業生産  
 力の物的基礎は戦時中において先づ一應の形成を見ることが出来たと云つて  
 多くこれは日本から分離独立する朝鮮人の経済にとって幸福なること  
 とは疑ひ無きところである。

左表は三期以後における朝鮮工業の進展を物語る若干の指標である。

各種別産業別生産額	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年		昭和十四年		昭和十五年	
	金額	指数	金額	指数	金額	指数	金額	指数	金額	指数
農産物	六七三・一〇	一〇〇	六九四・八	一〇四	七〇九・二	一〇五	七三九・一	一〇七	七六一・一	一〇九
畜産物	二九七・五五	一〇〇	六九・五九四	二二	一三三・一	二二	一三三・一	二二	一三三・一	二二
林産物	五九三・三八	一〇〇	一三八・七〇九	二〇	二二二・三	二二	二二二・三	二二	二二二・三	二二
水産物	七七・五六二	一〇〇	一八七・九五三	二四	二二二・三	二二	二二二・三	二二	二二二・三	二二
鉱産物	二一七・四一	一〇〇	一八七・九五三	二四	二二二・三	二二	二二二・三	二二	二二二・三	二二
工業物	二五・九三	一〇〇	九五・九三	三三	一三三・一	二二	一三三・一	二二	一三三・一	二二
総計	一一一四・四九	一〇〇	三、〇二六・四五	二七	三、〇二六・四五	二七	三、〇二六・四五	二七	三、〇二六・四五	二七

即ち昭和六年（三期の初め）には農産物は生産物総額の六〇％を占め  
 工業物は二三％であつたが、昭和十二年には農産物四九％、工業物  
 五〇％と工業物の比重が相対的に増加し、更に昭和十八年には農産物三二  
 ％、工業物四二％と工業物は農産物を凌駕した。またこの間における増加  
 速度を見るとき、農産物は昭和六年の一〇〇に對して、十二年 二二・一、十八年  
 三二・一と増加速度が鈍つてゐるのに反し、工業物は三六・四及び一〇・六三と著  
 増してゐる。且つ生産物総額の増加指数は二七・一及び五八・二である。こ  
 れは、三期以後の朝鮮工業の躍進が、實に著眼せられべきである。こ  
 れに、鉱産物の比重増加並に増加速度の大なることも注目すべきである。こ  
 れは加工のたの素材の多く内地に移出さるゝものも多かり、また、朝鮮内に効  
 用する製鉄、合金鉄、軽金属、各種工業の原料として現地加工も  
 増加したためである。

### 工場生産額類別

工場生産額	昭和十一年		昭和十二年		昭和十三年		昭和十四年		昭和十五年	
	金額	指数	金額	指数	金額	指数	金額	指数	金額	指数
紡織工業	九、〇三七・八	一〇〇	一、九三三・七	二一	一、九三三・七	二一	一、九三三・七	二一	一、九三三・七	二一
金属工業	二、八三六・六	一〇〇	一、三二一・六	四六	一、三二一・六	四六	一、三二一・六	四六	一、三二一・六	四六

機械器具工業	七、三九九	一、〇	一、〇	四七、三三二	三、五	六、三九	一、〇五九七〇	五、七	一、〇三三
窯業	一九、〇三二	二、七	一、〇	三、八八〇	二、四	一、八八	八、一八〇	四、四	四、三一
化学工業	一、二二四	二、九	一、〇	四、五八八	三、三	二、八二	五、一七二八	三、〇	三、四
木材及木製品工業	一九、二二〇	二、七	一、〇	四、〇九七	二、八	二、二二	一、一三三	六、〇	五、七八
印刷製本工業	一、二四七	一、八	一、〇	一、八三七	一、二	一、四七	二、三七七	一、三	一、九一
食料工業	三、二五八	四、五	一、〇	四、五三三	三、九	一、四一	四、八二二	二、九	一、二七
電気工業	三、九八八	五、二	一、〇	三、四二二	二、一	七、〇	二、六三九	一、四	六、五
其他工業	一、〇〇三	一、四	一、〇	五、六六六	三、九	五、二	二、三三三	一、三	二、三六
合計	七、九八六	一、〇	一、〇	四、六六八	一、〇	二、〇	八、六九三	一、〇	二、〇二

（五人以上の職工を使用する設備を有し又は常時五人以上の職工を使用する工場）の生産額を以て、官営工場と生産並に修理加工に係るものとを除く。従つて、掲各産業の生産額中、工業額とは一致せず。

即ち、金属、機械器具、窯業及び化学工業の所謂重化学工業の比率は昭和十七年には三〇・六％、十八期における朝鮮の工業化の程度、平和産業中心であったことを物語つてゐる。昭和十七年以降の傾向、更に強化されてゐる。若くは

昭和十七年秋に開かれた朝鮮産業経済調査会は「朝鮮産業経済調査会」の一般方針を、各申において「原始産業中心の方策より多種多様な産業の全面的発展を目標とするべきことと強調し、農工併進、或は「農本主義」一面、爾後諸産業殊に、鉱工業に付、其の飛躍的振興を期すべし」と主張したのである。朝鮮産業はまさにその線に添つて着実に今や大陸における「東の内地経済」とも云ふべき、内地経済を、小形土にいたやうな一種の綜合経済構造を有するに至つてゐる。

因にこの第四期における朝鮮工業の急速な重化学工業化、軍需産業化の過程は、総政府当局が戦争の要請に従つてこれに推進に力を入れたことは勿論であるが、而もその市民需産業の育成確保に如何に困難な努力を傾けたかはここに強調し、おく價值があるであらう。

即ち、前述した如く、三期以来（満洲事変以後以来）朝鮮工業化の進展は、めざましいものがある。拘らず、消費財生産部門の発達も、三期のことに属し、それをも十分を代表する。足るうちに（満洲より）一歩先んじた（これとも）第四期の軍需産業、生産財生産部門中、時代に移行したため、朝鮮の民需消費財に乏しなほ日本内地の供給に待たねばならぬ割合が、少くなつた。朝鮮貿易統計と見ても、例へば昭和十七年夏における内地より

の移入品のうち布帛及び布帛製品の三億二百万系、衣類及び同附屬品の一億二千万系、帳簿手帳その他紙製品の二千八百万系、陶磁器の一千七百  
万系、硝子製品、錫釜、洋傘、和傘、竹製品、木製品、漆器、ゴム製衣  
品、電球、頭具、小同物及び化粧品、文房具等の七千四百万系といふや  
うな数字は勿論その全部が鮮内消費ではなく、滿華大陸向けもある  
筈だけれども何れにしても日用消費財貨の内地依存度がまた高いことを示  
すものと言ふことが出来る。

然るに内地における決戦経済の進展に伴ひ昭和十八年に断行せられた大  
規模徹底的な所謂戦力増強企業統制の備は内地の民需産業生産力を  
極度に圧縮するものであり、且つ輸送困難の深刻化に伴ひ内地よりこの小  
民需物資の供給が急激に減退するに至つた。これらの事情に對し  
朝鮮の民需品自給を達成するために總督府事務局は消極的には  
朝鮮の企業統制の備において能く限り民需産業の統制の備を避  
け、その内の中小工業の企業統制の備は内地より一年乃至二年も遅小  
その間却つて維持育成に朝鮮の特許事項に對し、安んずる方針と  
して當局の堅持するところであつた。積極的には内地におきける設備の  
ため後休化する（而して後には空襲対策のため疎命せんとする）民需

産業施設の鮮内移駐に極力努力したものである。

このことが所謂「自給自足」の確立といふ戦争的標語を以て推進  
せられたかといつて、直にこれと批難することは輕率の辨りを見れば  
であらう。民需産業生産力と極端にまで圧縮しても一切の生産  
力を支拂つて軍需産業に転換するやうな作れは容易に満足しな  
かつた軍部の強力な要求に直面して、なほ且つ能く限りの民需  
産業の保護に努力した總督府事務局の苦衷は十分同情する（べきであ  
らう）。惜むらくはこの民需物資鮮内自給化計畫はその完成を見や  
らううちに早くも潜水艦並に機雷投下による内鮮肉類送込杜絶  
空爆による内地生産力の壊滅となり、遂に終戦となつたことである。  
以上日本の統治期における朝鮮産業経済の推移を顧みること  
結論し得ることは日本の朝鮮に對する産業政策は根本において日本  
のための産業政策であつたことは言ふ迄もなく、そのことは米穀軍糧  
耕作型産業構造の確立とその産業及び戦争への強力なる動員  
において見えにあらうであるが併しなほ必ずしも日本資本の搾取的植  
民政策に終始し朝鮮自体のための産業発展政策が全く顧みられ  
なかつた點をばなすといふことである。否全体を通じて朝鮮の産業経



前日本の統治下において、それ以前と比較にならぬ程の向上發展を遂げ、  
 産業的には著しい進歩と特徴とするアジアにおいて、兎も角も日本内地  
 に次いで先進性を誇り得る經濟圏にまで躍進したことは否定し難い。  
 事實である。僅かに三十数年においてこれだけの産業的發展を遂げ、  
 その産業構造においても内地のそれと小型に似たやうなところがある程である。然し、  
 的作系を確立するに至つたことは、何と言つても帝王主義的な植民政  
 策の公式を以てしては、簡單に律し得ないケースであると言はなければ  
 ならぬ。その強いてこれに類似の事例を齎すのは、程々の差は勿論大に  
 あるが、イギリスの自治領の經濟にも此まで及んであう。併しこれは豊民族  
 の支配若くは指導による經濟と云ふよりは、移民經濟であり、寧ろ所謂  
 は「マニカロ」ランの經濟の延長である。然るに朝鮮の場合に於ては  
 本國人口の三分の一に過ぎる豊民族の支配指導による經濟である。こ  
 こに「同化政策」の術語は、必ずしも適切に表現し得ない特異なところ  
 一視同仁と政策の經濟面から見ればなからうか。

六 朝鮮の財政及び金融に關する諸問題

朝鮮の財政と金融につては以下の諸氏が本稿の課題に關聯して注意せらるべきであらう。

朝鮮の財政に關して先づ問題となることば、今次戦争中朝鮮總督府特別會計より臨時軍事費特別會計（繰入れられた所謂朝鮮の戦費負担額に相當の巨額に達した）とあることであらう。それは昭和二十二年夏季算までの累計において十七億二千四百万に達した。左表にこれは財政面における最も明瞭な朝鮮に對する搾取であるといふ批難については次の諸点とを考慮に入れる必要がある。

朝鮮總督府特別會計  
臨軍費  
入累計

[illegible]

かつたところから、臨軍費関係歳入の或る部分は在韓陸海軍の経費として朝鮮に支出されてゐる。そのほか、程の額であるかは不明であるが、おそく繰入額をばるかに超過するものであることは間違ひない。殊に戦争末期、日本は決戦に備へて、朝鮮の要塞化を行はれた。この朝鮮における臨軍費の支出は、かなりの巨額であり、朝鮮総督府特別会計より繰入の如きは、九牛の一毛に過ぎなかつたに相違ない。只前述の如く、朝鮮の財政は朝鮮における軍需関係経費を負擔するものゝ、それは陸海軍省費或は臨軍費等として内地会計の負擔するところである。この朝鮮の一般行政費に充つたため、内地一般会計より補充金を名稱の下に、毎年一千万乃至二千万の金が朝鮮総督府特別会計に繰入されてゐる。この補充金と陸海軍省費とが、朝鮮関係の合計、即ち内地一般会計負担の朝鮮経費が、幾何に達したかといふと、その併合以来の累計は、表に最近年たる昭和十二年迄で八千五百九十八千に達してゐる。補充金は、後の計數に明記して、昭和十三年以降十九年迄九千九百六十千あるが、軍事関係経費の合計は、昭和十三年迄に一般会計負担軍事関係経費六、四三九千の同年迄、朝鮮総督府特別会計歳入總額

に對する割合一四%と、以て爾後各年交における一般会計負担朝鮮関係軍事費と推定すると、その合計は約十一億と推定する。これは極めて、若干の誤差を認めて、さうだとすると、この内輪の推計を以て、且つ臨軍費会計の分を同はなして、一般会計負担の朝鮮経費の分を、昭和十三年以降推定約十二億と推定する。これは昭和十三年までの記載数字を加へると、併合以来の累計は約三十二億、内輪と推定する。これは朝鮮の負担した臨軍費関係と推定するに超過することになる。以上によつて明らかなく、朝鮮財政の臨軍費の一部を負擔したことを以て財政面における朝鮮の搾取と結論する。これは此が早報である。否、財政面においては、朝鮮に對する日本よりの援助は、むしろ不足であることが注目せられねばならぬ。因に朝鮮総督府特別会計より内地の一般会計へ繰入されるものとして、地方の臨時軍事費特別会計へ繰入る。他に一般会計へ恩給分、年金の繰入、國債整理基金特別会計へ、朝鮮関係公債の元利償還金の繰入がある。併し、表は昭和十九年交予算に於て、一億三千七百七十千、増額は八二二七千、十月迄合計九千八百二十千、歳入總額に四%弱に過ぎない。而も、退

職官吏に對する恩給の支拂は朝鮮人と同じく得又その旧所屬官、署長等は同一格として内地一般會計（逓信省所管後に逓通省）より、の歳出となつてゐること、及び後述する如く朝鮮總督府特別會計の歳入財源において公債金の比重が頗る重く、その殆んど全額が内地において募集されるものであることを思ふよりは、この兩項目の内地會計繰入れは、當然のこと、言ふべく、かのインフレーション財政が、對英米國負担費即ち所謂ボローナ・ヤード・金歳土の三分の一に及んでゐることは全く比較にならなことを知るべきであらう。

又、朝鮮總督府特別會計は日本財政が軍備擴張戦争準備のため赤字公債依存に陥つた後において所謂健全財政方針を堅持し、來つたことは、天にも告げ、安易なる財政方策に墮せんとする傾向の中にあつて、總督府財務當局の良心的な努力に基いたものと、言ふことが出来る。

勿論、朝鮮戦時インフレーションから免れざるを得ないのは、大體インフレーションの波及は日本インフレーションの一種としてであり、且つ大體インフレーションの波及は最も深刻に受けたからであつて、朝鮮財政が、この財政インフレーションと原因とするものでなければならぬ。財政インフレーションが一種の大衆課税の

作用をもつものであるとするれば、朝鮮財政が健全財政を勉む迄も堅持したことは、全日本の財政インフレーションが、結局朝鮮にもその中に搭乗せられてしまつたけれども、兎も角、その自作とすべきは、大いに注目されてゐるであらう。

朝鮮總督府特別會計が健全財政を堅持したといふことは、その公債收入が赤字公債でなく、大部が朝鮮事業公債法による公債であつて、朝鮮における道路、港灣、鐵道、電信、電話の建設改良等を生産公債であつたといふことであるが、これらの公債はすべて内地において調達せられたといふこと、即ち内地の資金の援助に依つたといふことが注目せられねばならぬ。

朝鮮事業公債法は、制定當初（明治四十四年）の發行限度額五千六百萬元より、屢次の改定擴張を、昭和十八年には二億九千四百七十七万円であつた。昭和十八年迄の起債高累計は一億七千三百四十七千四百、うち償還高九千七百七十四、差引公債残高は一億四千六百七十三、この二十年後、即ち終戦當時には約二十億円と推定せられる。これまた朝鮮財政に對する日本内地の援助を示す数字である。因に朝鮮總督府特別會計の歳入における公債財源の比重は、毎年歳入総額の



二割前後と占め、歳入構成は官業收入を第一位とし、租税若しくは公債が常に二位若しくは三位にあつた。このことは朝鮮の開港が国家資本に依つて、この大資本、而もその朝鮮において形成される力の基にたつたことを物語つてゐるのである。

租税制衣におき特に朝鮮人に対する差別的市課が行はれたてゐる。明らかならぬのである。昭和十一年における直接税平均負担額と内地人の負担にみると、左表の如くであり、所得及び生活程度との差以上に内地人の負担の方が重く、ことを示してゐる。

直接税平均負担額（昭和十一年）		朝鮮人	
戸當	一人當	戸當	一人當
部 總額	四二四・四九六	九四・四七四	六・九〇二
府 總額	三〇一・二九	二七・一七	三・九九
部 地方税	一二三・六七	二七・五七	二・五〇三
府 地方税	二二九・二二	六八・五三	二・一九一
部 國稅	一三六・九九	三・七	一・八七
府 國稅	九二・二三	二・四六	一・五〇
部 地方税	九二・二三	二・四六	一・五〇
府 地方税	九二・二三	二・四六	一・五〇

（内地における昭和十一年の直接税平均負担額二六・四四元）

尤も右は直接税のみであつて、若し間接税が大衆税であるといふ理論に従ふときは、例へば昭和十九年と租税收入予算中における直接税と間接税の割合は前者三四％後者六六％（更に煙草の専賣を考慮に入れるときはこの割合はもと後者を八〇％とする）となり、かかる租税体系そのものは朝鮮人大衆の租税負担の重なり、むしろ二倍に及ぶと一應いふことが出来る。

併し、これら間接税の主なものは酒税、清涼飲料税、砂糖消費税、通行税、入場税、特別入場税、物品税、遊樂飲食税等であつて、大部分け不急不急且つ奢侈的なものであり、並に必需品に對する消費課税は殆んど存在しない。酒税は租税收入の殆んど一割に達する。内地からの移入税は統一國税制が実施後も酒税、酒類、全有飲料及び織物に一つだけ存続した。たゞこれに一つも昭和二年以降税率を減し、昭和十一年に至つて全廢した。なほ最近の増税にみることも例へば酒税の増徴によつて朝鮮人大衆の愛好する酒類の増税率を特に輕微とせし、また煙草の専賣價格の引上げに際しても、同様に朝鮮農民の愛好する刻み煙草の増税率の引上げを行はなかつた。等々考慮がなされたことも注意されたい。之を要するに、朝鮮財政の性格は、その歳入財源において内地よりの支拂の程度、非常な強かつた点に於いて、殊に、搾取的性格であるといふことは出

来ないであらう。この点と相上りて一時日本の朝鮮に至るは買収のみ多くして、ペイサ小なといふか如き議論まで行はれた。その見解の於相約に過ぎることには言ひ迄もなかり、ほに以て朝鮮財政の性格の一面と云ふに足ることも言ふことが出来るであらう。

朝鮮の金融については、それが全く日本依存であつたことが注目せられねばならぬ。金融機関は併合の治政に早くより日本に把握するところであり、露露戦争以後に於て韓廷の露人財政顧問アレキセーフによる露韓銀行の創設、朝鮮に流通する日本通貨の排斥等が行はれたこともあつた。通貨金融に關する日本の支配権は早くより確立せられたと言つてよい。朝鮮の貨幣制度は保護時代日貨田財政顧問によつて日本と同じ金本位制の實施せられた。後大正七年には日本貨幣法が朝鮮に於て施行され、更に及んで全く内鮮通貨となつた。但し、言はるる通貨たる銀行券は併合前の第一銀行券の傳統と受け継ぎ、朝鮮銀行券と日銀券とは言ふ迄も等價の資格を認められた。朝鮮銀行券の流通が認められなかつた。朝鮮にあり、たゞ日本内地に於ては朝鮮銀行券の流通が認められなかつた。朝鮮銀行券が發行利交は日銀券と同じく、昭和十七年まで所謂屈伸利交を採用し、爾後日銀券が發行利交に移行した。屈伸利交は時代

には正貨準備に日銀券が加へられ、日銀券が發行利交に移行して後、正貨の比例準備制が併せ採用せられた（朝鮮銀行法及台湾銀行法が臨時條例に關する法律第二條第二項）。その正貨準備中とは日銀券及び日銀に對する高圧預金を加へられた。これによる朝鮮の通貨利交は、同為替本位制とも言ふ（この關係におも日本は統制下におかれ、たのである）。

蓋し朝鮮銀行が正貨準備中日銀券の占める割合は最初より一例的に大きく、殊に金準評價法實施以後においては朝鮮銀行の金準備は最も

問題とならぬ。額となつたからである。昭和七年の金本位再停止以後、朝鮮銀行は日銀券と共に不換紙幣となり、従つて朝鮮銀行の金兌換義務は免せられた。朝鮮銀行法に規定する朝鮮銀行の日銀券兌換義務は、義務には免れなく、且つ内地において朝鮮銀行は強制通用力と有しなかつた。たゞ、朝鮮より内地に對する送金は、如外なる送金ルートを通じて結局内地における朝鮮銀行支店の日銀券（内地資金）拂出を意味した。この点からすれば、朝鮮銀行は一種の兌換紙幣とも見ることが出来る。屈伸利交の場合、たとふと、朝鮮銀行當局は日銀券（日銀

における高座預金とも含めての十分な準備なくしては鮮内において  
 失墜に鮮銀券を増発する訳には行かない。それは陰に全本位制下  
 において銀行券の発行が金準備に束縛されると相似た制約下におか  
 れておたうである。若し鮮銀高局がこの制約を重視してその通貨造  
 出力を行使するならば、必ずしも内地における日銀券（内地資金）の研  
 出に行詰ることもなく、そればかりでなく、鮮銀券の日銀券に対する減価と  
 招来し、内鮮間に為替相場が立つことになるであろう。しかしこれは内鮮等  
 價の大原則に反するから、鮮銀高局が飽くまで内鮮等價を維持せんとす  
 るは鮮銀は破産の運命を免れないこととなる。この意味において、朝鮮  
 銀行の銀行券発行力を過大に評價し、延いてその正貨準備と超ゆる発行  
 が通貨機構による日本の収奪であるといふことは、必ずしも正確ではな  
 い。このことはまた最近の朝鮮インフレーションにつても一應の注意を要請  
 するものである。終戦以後は別として、終戦に至る約三ヶ年以内における鮮銀  
 券の膨張は極めて急激なものであり、且つ顕著であった。

鮮銀券発行高

明治三十三年末  
昭和七年

二四、一〇、〇〇〇  
一、二、〇〇〇

昭和八年末

九手	一四八
才手	一九二
十一手	二二〇
十二手	二一〇
十三手	二七九
十四手	三二一
十五手	四四三
十六手	五八〇
十七手	七二一
十八手	九〇八
十九手	一、〇六六
二十手	一、三三六
二十手、二月末	一、三三七

併しこのやうな鮮銀券の膨張は、その殆んどすべてが実は鮮銀高局にとつ  
 ては如かきともし難い外、本邦事務に及ぼすところのものであつた。外来的事務  
 といふのは、一方において内地からの他方において満洲支那大陸からの資金  
 の流入が夥しく、その小の自働的に鮮銀券を増発を意したものである。そして内



地からの移入資金流入は、軍事費を中心とする國庫送金及び産業資本と主として大陸よりのそれは朝鮮と大陸との物價差に基くものや大陸間系通貨の用途に不安を感ずる逃避資金であつた。このことは朝鮮内地及び朝鮮外地の爲替統計が昭和十八年乃至昭和十九年以後銀の爲替に於いても郵便爲替に於いても朝鮮の巨額の押出超過（爲替の押出は即ち資金の流入である）となつてゐることや、また満洲國幣の鮮銀券との交換額が昭和十九年においては二億六千八百萬圓に達したことに等しいことも明らかに首肯せられるものである。なほ鮮の各種金融機関の預金總計が昭和十八年十二月以後急激に超過するに至つたこと及び前述せる朝鮮總督府特別會計が健全財政を堅持したこと等は財政上にも銀行信用上にも鮮の独自のインフレ系圓の起ることを示してゐる。

鮮の金融機關預金總計（昭和二十年一月末）

各種銀行	預金	貸出
金融組合	三、四八九、百圓	三、七一九、百圓
信託會社	一、六六三、	五三四、
東洋振興會社	一、五七、	七、
	一七、	二二五、

郵便貯金	五二六、百圓	八二〇、
銀行以外小計	二、三六九、	四、五五〇、
總計	五、八五九、	

このやうに見て来ると、朝鮮の戦時インフレーションのすべてではないまでも主たる原因は大陸インフレーション及び日本インフレーションであつて、即ち外來的、他動的であると言はなければならぬ。而も銀行券増額のテンポにおいて物價騰貴率（圓價格とも含め）において朝鮮のインフレが内地のそれよりも強固であつたことは、國民の協力を基盤とする政治力、統制力において朝鮮が内地よりも著つてゐるといふ理由の他に、朝鮮が大陸に接壤し大陸インフレーション波及の第一線としてその影響を受けると内地よりも遙かに深刻なるに基いたつてゐる。もとより大陸インフレも日本インフレも戦時經濟の遂行に失敗せる日本の責に帰せらるべきものであり、その限り朝鮮の戦時インフレーションも結局は日本の責任ではあるが、併し勤王兵朝鮮インフレに關する限りにおいては上述の諸点はこのことを明らかにしておかねばならぬと信するものである。

（朝鮮の戦時インフレについては拙稿「朝鮮のインフレーション」大陸東洋經濟所載参照。目下手許に右の拙稿とその他最近の關係統計資料も持ちあはす、一切朝鮮に就いて来たため、敢て字句に詳細な論議の出来

なかつたことを遺憾とする。  
朝鮮の金融機関は前述したく併合以前より既に日本の支配するところ  
であり、民族資本による近代銀行資本の形式は遂に見られなかつた。開  
城の「叶辺」や平壤の「新債」は朝鮮独自の金融機構となつて残存  
してゐるものもあるが、それは所詮資本主義的個人金融であ  
り、朝鮮金融の大勢を左右するものではない。尤も個人的な資本  
主義的高利貸資本の小規模なものも、広汎に存在は、朝鮮農民の債  
務収束的な地位との関係において看過することは出来なかつた。中国や  
印度及びその他のアジア諸植民地と比較するよりは、朝鮮におけるこれ  
ら代表的な高利貸資本の地盤への近代金融機関の浸透は遂に進行し  
つゝ、この金融組合は、それより早業以上に進んで、機関であるとの性質  
もあつた。併し組合数は百十の組合員数二百八十三萬二千九百九十九  
九月末の約算を以て、組合員数は十八年未全鮮組戸数の五八%に當る  
といふ組織化の進展は、遂に朝鮮金融史上一つの誇りべき成功といふべき過  
言ではないであらう。  
さて朝鮮の近代金融機関は右述の金融組合（及びその全鮮的中央機

関として金融組合聯合会）他、前述した中央證券銀行としての朝  
鮮銀行内地の勸業銀行及び興業銀行と一つに、やうな朝鮮地産  
銀行の二特殊銀行、朝鮮商業銀行、朝鮮銀行（全鮮一社）、朝鮮信託（全上）朝  
鮮多量（全上）、東洋拓植会社（通）一通り備はつてゐる。且つ一應の整備  
も行はれた。勿論なほ解決を要する（一）緩急の内部であり、例（一）は「内鮮  
一作」の根本方針から言へば、朝鮮に特別の中央証券銀行を存せ  
（一）めより、日本銀行と朝鮮に進出せしめ、朝鮮証券を「廣く」これと  
日証券に統一する（一）或は通貨ユニットとしての朝鮮証券を「廣く」存せし  
る。提の下に朝鮮銀行の中央銀行的性格を一層強化する。かく朝鮮銀  
の普通銀行業務の廣く、他の朝鮮金融機構再編成を行ふ（一）ま  
とつたやうな問題は遂に未解決のままに終つたけれども、この問題は  
「ま」に述べた朝鮮金融の綜合行政権存続の問題と関係し、綜合  
行政権の存続する限りは通貨ユニットとしての朝鮮も亦存続せし  
る（一）といふ者（一）の方から強かつたやうである。就中戦争末期に至り  
内鮮の連絡絶えざる所請、自給自足態勢の破産が叫ばれ  
るに及んで、この者（一）は決定的となつた。これらの問題は結局日本の金

融的支能機構の枠内における問題に過ぎないと言ふことが出来るが、機構の上の形式的内鮮一律に急な事が必要とし、朝鮮のみに利するものかと言へず、我々もこの金融に關する限り、これは寧ろ内地巨大資本の要求を代弁するものとも見ることが出来るのである。

朝鮮における資金形式の問題については、その量と共に謂はざるを得ない。小ねはなぬ。量的観点からすると、朝鮮の資金蓄積力は、一向極めて低弱であつた。朝鮮内各種金融機關の資金の貸出に及ばなつた。世態は、さきにも一寸觸れたやうに、昭和十八年まで続いた。資金と貸出とのギャップを埋めるものが、朝鮮殖産銀行、東拓及び朝鮮金融組合聯合会、内地市場における債券發行による資金供給であつた。例へば昭和十五年末の状況は次の如くであつた。

預金		貸出	
各種銀行	一、四九、百、萬	一、九六、三、百、萬	
金融組合	三七、二	三六、八	
信託会社	八、二	六、七	
東拓会社	一、六	一、四、七	
郵便貯金	一、二、七		
合計	一、七四、八	二、五四、六	
差引貸出超過	七九、八		

（合計額の符合せよ。は百、萬以下切捨てたるによる）  
 左の貸出の他に、銀行有價證券投資八億四千八百、萬、月を以て、と資金と超えるギャップは十六億、萬以上となる。これに對し、十五年末における殖産、東拓、金融債券の発行及び朝鮮銀行の保証發行が、左の如く合計十三億、萬、月を以て、このギャップを埋めるに近づく。

殖産債券	五、七、七、百、萬
東拓債券	四、二、二
金融債券	三、一
朝鮮銀行保証發行高	二、九、〇
合計	一、三、二、一

然るに昭和十八年十二月以後、朝鮮の各種金融機關の資金は貸出を超過するに至つた。茲において資金自給論の提議したものが、これは朝鮮における資金の謂は、質の良と顧みない皮相の見解と言ふことが出来る。何故なら、  
 1. 朝鮮内各種金融機關の資金が増加したのは、朝鮮の生産能力の増大に基くは、あるが、主に内地より、旺盛な資金流入の結果であり、  
 2. 従つて、若し資金自給の方策を徹底して、内地資金流入を止



エリとするときは果して預金超過の趨勢が維持し得らるゝか否か如何  
であること  
之金融機関の種々によりて預金流出のバランスは必ずしも預金超過  
を限らざる例は朝鮮銀行、朝鮮殖産銀行等の大銀行に依  
然として巨額の貸出超過をあり、金融組合の如き大衆預金の集  
積機関の圧倒的に預金超過を示し、以て金融機関全体としての預金  
超過の結果としてあるといふこと、従つて貸付の相違よりすれば長期固定  
性危険性の大きい軍需産業（の直接投資の困難な脆弱な細小な  
資金の大部分）であるといふこと  
等の諸点の考慮が水ねはならなからである。かくて、軍需産業投資  
の大部分は朝鮮銀行、殖産銀行等の大銀行によつて行はれたが或は戦時金融  
庫その他内地よりの投資によつて行はれ、朝鮮の大衆蓄積資金は  
或は共同融資等の方法によつて殖産債券等の地場債券に投資さ  
れるとか或は内地の戦時金融債券、地場債券に投資されるとかの同種  
的方法がとられたいである。  
これを要するに朝鮮の資金蓄積力は最近のインフレーション期においてこそ  
量的に相當の向上を見られ、なほ頗る脆弱であり従つて朝鮮の金融

は資金の強固な自給自足の條件を欠き、その大部分を内地資金の供給に  
依存せねばならなかつたのである。これは朝鮮の産業開発がまた建設の  
途中にあるに完了するに至るに従つて朝鮮はまた資本輸入の段階にあ  
り、その果実として母国に送る程の仕態には到達してゐなかつたのである。  
またより根本的な原因としては朝鮮農村機構の後進性封建性  
といふ朝鮮経済自体の内部にこれと密着するところがある。即ち朝鮮  
農村の代表的な高率小作料、土地利廻と比較的高水準に維持  
してゐるが故に資本蓄積の誘因が薄弱なものである。従つて預金や証券  
の形態をとる投資よりも土地投資が依然として盛んであるといふことか  
注意せられねばならぬ。朝鮮の金利水準は最近大に軒高をせし  
のなほ内地よりも高位にあることは根本的にこのやうな事情に基く  
と見られるのである。例へば定期預金利率は内地の甲種三分三厘乙種三  
分四厘に對し朝鮮は甲種三分四厘乙種三分五厘であり、日銀及び朝鮮銀  
の貸出標準金利は國債担保の貸付利子も各々半割引きである。か  
日銀九厘と同率である他は日銀一厘半、朝鮮銀の一方割高である。従  
てこれと朝鮮金融の植民地的性格と規定することはふいふ。筆者者は常  
にこれを指摘し、その立場に立つて強調した（拙稿「朝鮮の経済」）

章。しかし金融面におけるこのやうな植民地的性格はひとへに朝鮮に限  
 らず、アジアの植民地乃至半植民地交通の事象であり、朝鮮はその中  
 で比較的改善せられた地域であると言ふも過言はけなうであらう。

### 七 朝鮮人の民交について

昭和後日本に統治下における朝鮮人の民交について若干の分析を行は  
 ねばならぬ。蓋し「一視同仁」的同化政策究極の目標は内地人に  
 比し低劣な朝鮮人の民交と内地人の水準にまで引上げることにあるか  
 らである。「民交」といふ言葉は従来屢々用ひられ、未だこのことは  
 民族としての生活程度といふ意味でこの言葉を使用したのである。それは物的  
 な経済的な生活水準を意味するのみでなく、それと基礎とする文化  
 的な生活程度をも意味することは勿論である。  
 前述した如く日本統治下三十数年間における朝鮮経済の躍進発達  
 は併合以後の状況が餘りに惨めであつただけに、これを何に歸目するに  
 値するものがあると言つてよい。いま若干の数字を以て、這般の實績を示  
 せば左表の如くである。

### 朝鮮経済力の向上

耕地面積(千町)	明四三	二四六四	昭一六	四八八八	昭一七	四八四九
生産価額(円)	明四四	三八一四一四	昭一五	四八五九六	昭一八	六四八五九三二
輸移出額(円)	明四三	一九九一三	昭一六	九七三二九六	昭一九	一〇四九九九
輸移入額(円)	明四三	三九七八二	昭一六	一五九三三七	昭一九	九五五八九五

発電力 (KW)	明四五	一八二五	昭一五	九六五五	昭一九	一四九五	八五九
電灯数	明四五	七五二五	昭一五	二六八七	昭一九	三三八八	九〇〇
鉄道営業料程	明四四	一三六九	昭一五	一五一九	昭一八	三二四四	
道路延長	明四三	二九三	昭一五	三二七二	昭一八		
通常郵便取扱件	明四三	四七〇八三	昭一五	四四九〇一	昭一八		
電話加入者数	明四三	六四〇八	昭一五	六六八二	昭一八		
公社資本金 (千円)	明四四	一五九一〇	昭一五	一六八五四	昭一八	二〇九〇六	八
鮮銀券発行額 (千円)	明四三	二〇一六三	昭一五	七四一六	昭一八	四三三七	九七五
銀行預金 (千円)	明四三	一七八五五	昭一五	一三九五八	昭一八	四〇三三	五三三
銀行貸出 (千円)	明四三	二二九九	昭一五	二一八〇九	昭一八	三八九四	七三三
金融組合預金 (千円)	大三	六八	昭一五	五八二二	昭一八	一九六八	七四
金融組合貸出 (千円)	明四三	七七九	昭一五	四〇八二	昭一八	五四九六	五
郵便貯金 (千円)	明四三	三三三	昭一五	一七九九	昭一八	二五三三	二
総督府特別金計 (千円)	明四四	五三二八	昭一五	一七八五	昭一九	二五八八	八
租税収入 (千円)	明四四	六四八	昭一五	二二二二	昭一九	五二一六	三

もとよりこのやうな全体としての経済的発展がそのまゝすすんで朝鮮人の福祉の増進を意味するものでないことは論を俟たぬ。要するに既に述べた如く、このやうな

うな経済的発展は殆んど全く日本資本の移植導入によつて達成せられ、そこに民族資本の介在する余地は極めて少かつたのである。併しその水にも拘らず、このやうな経済的発展が縮小再生産の傾向を示し、認められなかつたこともなかつた。静止的停滞的の経済は余儀なくせられ、併し併合以前の状況と比較して朝鮮人に多くの稼得場所と稼得機会とを与へ、全体としてその民衆の向上に寄与するところ顯著であつたことは疑ふべきでない。併合以後に於ける朝鮮人の人口の顯著なる増加も端的に物語するものは、併合以後に於ける朝鮮人の人口は、その経済的増加である。さきにも述べた如く、李朝時代朝鮮人の人口は、その経済的増加の疲弊のために絶対的減少の途を辿つてゐた。即ち李朝末期の二十九年より光武八年に至る百五十二年の間、推定すれば李朝の中葉より末期に至る期間において、百三十九万九千九百二十九人、割合にして約二割弱の絶対的人口減少を見たのである。然るに併合以後は左表の如く、昭和十八年までの三十四年間に一三二八七八八八から二五八三三三〇八人と一三二六九八五三八人の絶対的増加を来し、約二倍となつてゐるからである。

併合後朝鮮人口の絶対的増加



年	未	戸数	男	女	計	指数	実数	千人	増減(%)
明治四三		二七四九六	一五五三三	一五五三三	一五五三三	一〇〇・〇	一五五三三	一五・〇	
大正六		三〇七、二五九	一八五、三三九	一八五、三三九	一八五、三三九	一〇〇・〇	一八五、三三九	一八・九	
一三		三、三九四、五一	一、九四、五五一	一、九四、五五一	一、九四、五五一	一〇〇・〇	一、九四、五五一	一、九四・五	
昭和六		三、六九二、五九	二、一〇、二三八	二、一〇、二三八	二、一〇、二三八	一〇〇・〇	二、一〇、二三八	二、一〇・二	
一四		四、一三三、四四	二、二七、九一一	二、二七、九一一	二、二七、九一一	一〇〇・〇	二、二七、九一一	二、二七・九	
一五		四、三三、一七	二、三三、三三	二、三三、三三	二、三三、三三	一〇〇・〇	二、三三、三三	二、三三・三	
一六		四、三三、二九	二、三三、三三	二、三三、三三	二、三三、三三	一〇〇・〇	二、三三、三三	二、三三・三	
一七		四、五八、二四	二、三三、三三	二、三三、三三	二、三三、三三	一〇〇・〇	二、三三、三三	二、三三・三	
一八		四、七九、九一	二、三三、三三	二、三三、三三	二、三三、三三	一〇〇・〇	二、三三、三三	二、三三・三	

人口の絶対的減少からその急激な絶対的増加(この変化こそその内  
部にいさ)の今配上の内題と見ると(一)思と角も全体としての民衆の  
向上と雄弁に物語るものと言はなければならぬ。  
この朝鮮人口と更に職業別について見ると、次表の如く、統治全時期と通  
して農林漁業即ち原始産業に従事する者が圧倒的多数で朝鮮  
人の大多数の生活がこれら農業業の原始産業によるものであり、それが判る。

併しなから、前述に如く滿洲事変前後からの近代産業の勃興の結果相  
対的には工業、鉱業、商業及交通業等の人口比重が増加し、原始産業人  
口のそれが減退して、近代産業の隆盛と関係ある公認  
の自由業の比重も増加し、そのうち、多職者の数が絶対的により比重におよそ  
減つてゐるものである。このことは、原始産業がなほ朝鮮人の大多数の生活  
を支へてゐるが併合以来と比較すれば、原始産業以外の新になつた所得  
源泉が朝鮮人のために増大し、あるといふこと、他ならぬ。また多職者  
の減少も朝鮮人経済活動の活発化と明朗化を示すものとも見ることが  
出来る。  
但し戦時下に入つて前述に如く耕地の増加が絶対的には増加しなから  
相対的には増勢が鈍化するに至つたため、農業人口の相対的減少にも構  
うず、農業一戸當耕地の面積は昭和十四年の一、六四町と頂点として、爾  
後漸減し、昭和十七年には一、五九町に下つてゐる。これは軍需工場敷  
地或は軍用基地としての耕地の増産に基くものであり、戦争が朝鮮農  
業に及ぼした悪い影響の一つであるが、一般に戦争と朝鮮人の民衆の変  
化については後述することにする。

朝鮮人職業別人口推移		昭和十三年末		昭和十三年末		増減(△)		指数		昭和十三年末		昭和十三年末	
業種別	人口	昭和十三年末	昭和十三年末	増減(△)	指数	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末
農業	六〇、五、五	一、六、九、五	四、八、四	五、三、四	一、四、〇、一	八、六、九	七、八、一	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇
農林漁業	二、〇、八、二	一、六、九、五	四、八、四	五、三、四	一、四、〇、一	八、六、九	七、八、一	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇
工業	二、〇、八	六、五、八	四、五、〇	五、三、四	一、四、〇、一	八、六、九	七、八、一	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇
商業及交通業	九、九、〇	一、五、二、四	五、三、四	五、三、四	一、四、〇、一	八、六、九	七、八、一	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇
公務及自由業	一、七、五	六、八、四	五、三、四	五、三、四	一、四、〇、一	八、六、九	七、八、一	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇
其他有業者	六、六、二	一、五、一、八	八、五、六	五、三、四	一、四、〇、一	八、六、九	七、八、一	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇
無職及職業不明者	四、四、七	三、七、〇	七、七、〇	五、三、四	一、四、〇、一	八、六、九	七、八、一	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇
合計	一、四、五、六、九	二、一、六、八、二	七、二、一、六	一、四、〇、一	八、六、九	七、八、一	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	一、〇、四	三、〇、〇	三、〇、〇

朝鮮人職業別人口推移		昭和十三年末		昭和十三年末		増減(△)		指数		昭和十三年末		昭和十三年末	
業種別	人口	昭和十三年末	昭和十三年末	増減(△)	指数	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末	昭和十三年末
農業	一、六、六、五	一、七、〇、四	四、三、九	一、〇、二、五	七、五、七	七、一、三	一、〇、七	七、一、三	一、〇、七	七、一、三	一、〇、七	七、一、三	七、一、三
水産業	三、二、四	四、〇、三	七、九	一、二、五、〇	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二
鉱業	二、五、七	四、六、二	二、〇、五	一、七、九、三	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二	一、一、二
工業	五、八、五	九、二、八	三、四、三	一、五、八、六	二、二、七	二、二、七	二、二、七	二、二、七	二、二、七	二、二、七	二、二、七	二、二、七	二、二、七
商業	一、四、二、二	一、六、四、三	二、二、〇	一、一、五、四	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五	一、一、五
交通業	一、九、六	二、八、七	九、一	一、四、六、四	一、一、〇	一、一、〇	一、一、〇	一、一、〇	一、一、〇	一、一、〇	一、一、〇	一、一、〇	一、一、〇
公務自由業	六、四、六	八、四、三	一、九、七	一、三、〇、四	三、〇、〇	三、〇、〇	三、〇、〇	三、〇、〇	三、〇、〇	三、〇、〇	三、〇、〇	三、〇、〇	三、〇、〇
其他有業者	一、五、三、一	一、八、七、四	三、四、三	一、一、二、四	七、〇	七、〇	七、〇	七、〇	七、〇	七、〇	七、〇	七、〇	七、〇
無職	三、七、〇	四、二、五	五、五	一、一、四、八	一、一、八	一、一、八	一、一、八	一、一、八	一、一、八	一、一、八	一、一、八	一、一、八	一、一、八

以上、問題は朝鮮人全作としての観察から、朝鮮人間の分配と朝鮮人の  
 在鮮内地人官の分配とに移動するより、小はなれぬ、このためには、先づ農村の  
 階級構成と内地人の産業支配関係とを検討する必要がある。  
 朝鮮の農業階級別統計を見ると、併合以来、遺憾ながら、自作農の少  
 作農への懸念が顕著で、併合當初の土地所有権確立にあたり、封建的

土地所有関係と再産認了の結果はここにその拡大再生産と分ちてあるは  
 いたるである。即ち農家階級別統計が始めて発表せられた大正三年  
 には自作農が二二%小作農が三三%であったものか、昭和十七年  
 には自作農一七・三%小作農五三・八%となつてゐる。即ち次表の如し。

農家階級別構成比率

地主	自作	自作兼小作	小作	純火田民	被備者	計
大正三年	一・八	二二・〇	四二・一	三三・一	—	一〇〇・〇
十三年	三・八	一九・五	三四・五	四二・二	—	一〇〇・〇
昭和八年	—	一八・一	二四・八	五二・九	—	一〇〇・〇
十三年	—	一八・一	二二・九	五九・九	—	一〇〇・〇
十七年	—	一七・三	二二・九	五三・八	—	一〇〇・〇

(昭和八年以降様式に變化あり、地主と農家(被備者)と追加す  
 従来の「地主」は大部分自作農中に包含されたものと見てよい)

また自作小作別耕地面積と見ると、耕地総面積に対する自作地及び小  
 作地の割合は前者の減少し、後者は増加し、變化が著しく耕地総面積のほ  
 過半を占める耕地増加の突において、自作農地の増加よりも小作農地  
 の増加の方が遙かに大きい。次表の如し。

自作小作別耕地面積比率及指教

大正三年	昭和十年	十二年	十四年	十五年
自作	四八・九	三八・六	三八・四	三七・六
小作	五二・〇	五二・八	五二・九	五二・八
自作	一〇・〇	一三・五	一三・四	一三・一
小作	一七・七	一六・八	一七・〇	一六・七

このやうに小作農が拡大再生産せられてゐることは土地所有の集中化と  
 物語るものであると共に、更にその集中が経営の集中化とつながり、更に  
 作地主の増大であり、小作関係の拡大であることと示すものである。更に  
 次表は自作農をも含めて、新鮮農業か如何に経営の零細化と特徴と  
 してゐるかを規定してゐる。即ち一町以下は経営の零細化と特徴とすは  
 総作において六三%、小作農は五二%、自作農は五二%、自作  
 兼小作農は六一%、小作農は五二%、自作農は五二%、自作



耕地面積別農家戸数比率（昭和十三年）

規模別	自作農	自作兼小作農	小作農	合計
三反以下	一三%	一四%	二九%	一七%
三反—五反	一七	二一	二三	二一
五反—一町	二一	二六	二六	二五
小計	五一	二一	二九	二五
一町—二町	二一	二二	一八	二一
二町—三町	一六	一一	九	一一
三町—五町	九	五	三	五
五町以上	三	〇	一	一
合計	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

このやうな零細小作農の大量的存在は、既に朝鮮農業の一つの脆弱点であり、朝鮮農民の貧乏弱は主としてこれに基くのである。この春、朝鮮政府は、朝鮮農民の多量に、このやうな農村の半封建的機構に因る所が大き。総督府當局は、或は自作農創設維持計畫と實行的に、或は朝鮮農地令と公布して、小作関係の保護調整を期し、或は、恒続的農村振興運動、展開、或は小作関係の農村再編成計畫

等種々努力するところがあり、半封建的機構の根本をメスと振ふこと、出来なかつたために、根本的に農村の振興と實現すること、出来なかつた。併し、半封建的機構の農村振興運動の如きは、農家経済の改善に資するところ、僅かに、多少の、もの、あり、といふは、例へば、総督府調査、農家経済の概況と、其の、変遷、によれば、農家経済更生計畫を樹立する農家経済の昭和八年と一〇〇とする同十三年の、指数は、自作兼小作農家において、農業所得二二四農業外所得四九、合計総所得一九九、小作農家においては、農業所得二五二、農業外所得一〇〇、合計総所得二二七と増加してゐる。この中に、物価指数は一四二である。上記の農家所得増加指数は、物価指数と上廻つてゐる。且つ、農家の貨幣所得の、見ると、その指数は、自作兼小作三〇〇、小作三二二と夫々物価指数と遙かに上廻つてゐる。これは、農家経済の好轉を如実に示すもので、あるの更に、春、前より、減少してゐる。食糧自給の出来ない農家も、右の調査により、明らかに減少してゐる。即ち、昭和八年には、食糧不足農家が自作兼小作農家下は、調査農家一八五九戸のうち、一、二二八戸から、六七一戸に減少してゐるのである。

とす小総督府の努力も、これと見比べると、農業土地関係の根本的改革と実行し得たか、たゞにその努力にも拘らず農村階級分化の進行と阻止し得ず、広汎な農民層の貧乏化と延びて都市勤労層の低賃銀と根本的に改善し得なかつたことは、全体として、民衆の向上にも拘らず、その朝鮮人内における均配分配の関係を頗る跛行的なうしめたことは、認めなければならぬ。併し、そのやうな土地関係の根本的改革は、自らの本國においても、これと成就し得ない日本が、その植民地において先んずこゝをなすし得る筈があるものである。従つてこの点について、日本の朝鮮統治と地盤するところは、此の焦炙を免れず、痛みのある。即ち日本は、その植民地朝鮮に對して、植民地たるが故に特に、そのやうな根本的改革と躊躇したるは、全くその水は内鮮に共通する社會的階級の問題である。且つ列強植民地においても封建的土地関係の言ひ、積極的に温存されゐるもの、一方が大部分にあることは、考慮する必要もあるであらう。

次に、内鮮人の産業支配関係と分析すれば、それは、総督府発表の統計より比較的に早くから内鮮人別の様式と成つたのである。正確な数字の根據による立論は困難で、以下は大部分の推定に基くものである。

先づ鉱工業及び鐵道運輸業等の産業設備に投せし水は資本額について大体の推定を試みると、昭和十七年頃の狀態を左表の如くである（東洋經濟新報特輯、日年刊朝鮮、昭和十七年版参照）

朝鮮産業設備資本の按割割合	七四%
内地産業資本の直接進出	一八%
鮮内主要産業資本系	一八%
其の他の一般鮮内在籍会社	八%
合計	一〇〇%

右の鮮内資本或は鮮内在籍会社の意義は、鮮内に経営本據を置く内鮮人の経営する事業としての意味である。必しも朝鮮の民族資本又は朝鮮人経営の意味ではないが、兎に角右によつて内地産業資本の直接進出の圧倒的に大きく、全体の七四%を占めてゐることは、今も、これは、さういふ述べた如く、朝鮮の近代工業化が専ら内地資本の進出によつて行はれたことの証左である。

このやうに朝鮮産業経営の支配的部分を占めるものは内地産業資本、資本の直接進出であるが、これは、資本系によつて行はれたものである。次表の如くである（東洋經濟新報、日年刊朝鮮）